

一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

鳥取県西伯郡伯耆町

さか ちょう ばく ろう づか い せき  
坂長伯楽塚遺跡

ばく ろう づか  
伯楽塚17～21号墳

2016. 3

一般財団法人 米子市文化財団

一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

鳥取県西伯郡伯耆町

# 坂長伯楽塚遺跡

## 伯楽塚17～21号墳

2016. 3

一般財団法人 米子市文化財団

# 例 言

1. 本報告書は、鳥取県が計画する一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴い、平成23・24年度に西伯郡伯耆町坂長地内で実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、鳥取県の委託を受けて、一般財団法人米子市文化財団が実施した。
3. 本報告書における方位は真北を示し、表記した座標値は世界測地系の座標値である。またレベルは海拔標高を示す。
4. 本報告書第3図の地図は、国土地理院発行の5万分の1地形図「米子」（平成17年1月1日発行）を加筆・修正して使用した。
5. 調査の実施に当たって、調査前地形測量と空中写真撮影をフジテクノに、火山灰分析を（株）火山灰考古学研究所にそれぞれ委託した。
6. 出土石材の同定は、高橋章司氏の肉眼観察による。
7. 本報告書は、佐伯純也が執筆、編集した。
8. 発掘調査によって作成された図面、写真類は米子市埋蔵文化財センターに、出土遺物は伯耆町教育委員会によって保管されている。
9. 現地調査及び報告書の作成には、多くの方々からご指導、ご支援を頂いた。明記して感謝いたします。（敬称略）

青山 航、太田美喜、大橋泰夫、岡田憲一、久保穰二郎、金原正明、河合章行、早田 勉、高橋章司、東 和幸、山内紀嗣、鳥取県西部土地改良区

# 凡 例

1. 発掘調査時に使用した遺構名及び遺構番号は、報告書作成時に変更している。
2. 坂長伯楽塚遺跡の略称は「BRD」と記載した。
3. 本報告書における遺物・遺構番号は次のように記す。  
Po：土器・土製品・陶器      S：石器
4. 本文中、挿図中及び写真図版の遺構・遺物番号は一致する。
5. 遺物実測図のうち、須恵器は断面黒塗り、それ以外は断面白抜きで表示した。
6. 遺物実測図の縮尺は、土器・陶器が2分の1、4分の1。石器が1分の1、4分の1である。

坂長伯楽塚遺跡 新旧遺構名対照表

新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名
建物 1	SI16	陥穴 28	SK9	石棺墓 2	SX28
陥穴 1	SK75	陥穴 29	SK8	石棺墓 3	SX27
陥穴 2	SK71	陥穴 30	SK12	石棺墓 4	SX26
陥穴 3	SK67	陥穴 31	SK14	石蓋土壙墓 1	SX30
陥穴 4	SK69	陥穴 32	SK15	石蓋土壙墓 2	SX29
陥穴 5	SX81	陥穴 33	SK6	土壙墓 1	SX57
陥穴 6	SK34	陥穴 34	SK102	土壙墓 2	SX58
陥穴 7	SK33	陥穴 35	SK103	土壙墓 3	SX64
陥穴 8	SK35	陥穴 36	SK5	土壙墓 4	SX68
陥穴 9	SK36	陥穴 37	SK104	不明遺構 1	SD70
陥穴 10	SK37	陥穴 38	SK106	不明遺構 2	SD7
陥穴 11	SK38	陥穴 39	SK107	道路 1	SD25
陥穴 12	SK79	陥穴 40	SK101	道路 2	SD17
陥穴 13	SK63B	陥穴 41	SK105	道路 3	SD72
陥穴 14	SK63A	土坑 1	SK1		
陥穴 15	SK39	土坑 2	SK2		
陥穴 16	SK40	土坑 3	SK3		
陥穴 17	SK20	伯楽塚17号墳	SD46		
陥穴 18	SK19	伯楽塚18号墳	SD52・77		
陥穴 19	SK18	18-1 主体部	SX51		
陥穴 20	SK55	18-2 主体部	SD78		
陥穴 21	SK56	伯楽塚19号墳	SD49		
陥穴 22	SK22	19-1 主体部	SX47		
陥穴 23	SK54	19-2 主体部	SX48		
陥穴 24	SK42	伯楽塚20号墳	SD50		
陥穴 25	SK41	20-1 主体部	SX74		
陥穴 26	SK23	伯楽塚21号墳	SD31・32		
陥穴 27	SK11	石棺墓 1	SX24		



# 目 次

例言、凡例、新旧遺構名一覧表

目次

図版目次

写真図版目次

## 第1章 調査の経緯と経過

第1節 発掘調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の経過	2
第3節 整理作業の経過	2
第4節 調査体制	3

## 第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3節 既往の調査	8

## 第3章 坂長伯楽塚遺跡丘陵部の調査

第1節 調査の方法	9
第2節 東側丘陵の試掘調査	11
第3節 遺跡の立地と丘陵部の層位	11
第4節 古墳時代以前の遺構	14
第5節 古墳時代の遺構	26
第6節 奈良時代以降の遺構	48
第7節 近現代の遺構	53
第8節 丘陵部から出土した遺物	56

## 第4章 坂長伯楽塚遺跡谷部の調査

第1節 谷部の層位	57
第2節 検出した遺構	60
第3節 IV層出土の縄紋土器	64
第4節 III層出土の縄紋土器	64
第5節 II層出土の縄紋土器	74
第6節 その他の層出土の縄紋土器	77
第7節 IV・III層出土の石器	77
第8節 II層出土の石器	77

第9節	Ⅱ・Ⅰ層出土の土師器・須恵器・石器	80
第5章	自然科学分析	
第1節	坂長伯楽塚遺跡におけるテフラ分析（㈱火山灰考古学研究所）	81
第6章	坂長伯楽塚遺跡発掘調査の総括	
第1節	坂長伯楽塚遺跡出土の縄紋土器	89
第2節	伯楽塚古墳群の調査成果	91
第3節	道路状遺構について	92
写真図版		
報告書抄録・要約・奥付		

# 図版目次

第1図	遺跡位置図	1	第36図	道路1・2遺構図	49
第2図	調査地位置図	2	第37図	道路1断面・遺物図	50
第3図	周辺遺跡分布図	5	第38図	道路1転石出土図	51
第4図	昭和34年発見の石棺	8	第39図	道路3遺構図	52
第5図	調査範囲図	9	第40図	第1遺構面平面図	53
第6図	試掘トレンチ断面図	10	第41図	交通壕遺構図	54
第7図	第2遺構面平面図	12	第42図	丘陵部出土遺物図	56
第8図	丘陵部の断面図	13	第43図	谷部遺構平面図	58
第9図	建物1遺構図	14	第44図	谷部断面図	59
第10図	陥穴1～6遺構図	16	第45図	陥穴34～37遺構図	61
第11図	陥穴7～14遺構図	18	第46図	陥穴38～41遺構図	62
第12図	陥穴15～20遺構図	20	第47図	土坑1～3遺構図	63
第13図	陥穴21～25遺構・遺物図	22	第48図	谷部 IV層出土土器図①	65
第14図	陥穴26～30遺構図	24	第49図	谷部 IV層出土土器図②	66
第15図	陥穴31～33遺構図	25	第50図	谷部 III層出土土器図①	67
第16図	伯楽塚17号墳遺構図	26	第51図	谷部 III層出土土器図②	68
第17図	伯楽塚18号墳遺構・遺物図	28	第52図	谷部 III層出土土器図③	69
第18図	伯楽塚18号墳1・2主体部遺構図	29	第53図	谷部 III層出土土器図④	70
第19図	伯楽塚19号墳遺構・遺物図	31	第54図	谷部 III層出土土器図⑤	71
第20図	伯楽塚20号墳遺構図	32	第55図	谷部 III層出土土器図⑥	72
第21図	伯楽塚20号墳遺構・遺物図	33	第56図	谷部 III層出土土器図⑦	73
第22図	伯楽塚21号墳遺構・遺物図	34	第57図	谷部 III層出土土器図⑧	74
第23図	石棺墓1遺構図(蓋石・断面)	35	第58図	谷部 II層出土土器図	75
第24図	石棺墓1遺構図(平面・立面図)	36	第59図	谷部 その他の層出土土器図	76
第25図	石棺墓1遺構図(掘形・立面図)	37	第60図	谷部 IV・III層出土石器図	78
第26図	石棺墓2遺構図	38	第61図	谷部 II層出土石器図	79
第27図	石棺墓3遺構図(蓋石・断面図)	39	第62図	谷部 II・I層出土土師器・ 須恵器図	80
第28図	石棺墓3遺構図(掘形・立面図)	40	第63図	谷部 表採石器図	80
第29図	石棺墓4遺構図	41	第64図	小町石橋ノ上遺跡の土塁状遺構	94
第30図	石蓋土壙墓1遺構図	43			
第31図	石蓋土壙墓2遺構図	43			
第32図	土壙墓1・2遺構図	44			
第33図	土壙墓3遺構・遺物図	45			
第34図	土壙墓4遺構・遺物図	46			
第35図	不明遺構1・2遺構図	47			

# 写真図版目次

## 写真図版 1

1. 坂長伯楽塚遺跡調査前（北西上空より）

## 写真図版 2

1. 坂長伯楽塚遺跡調査後（写真上が北）

## 写真図版 3

1. 建物 1 完掘（南東より）
2. 陥穴 1 完掘（東より）
3. 陥穴 4 完掘（西より）

## 写真図版 4

1. 陥穴 5 完掘（北西より）
2. 陥穴 6 完掘（北より）
3. 陥穴 8・9・10 完掘（北より）

## 写真図版 5

1. 陥穴 14（左）・13（右）完掘（北より）
2. 陥穴 18 完掘（北より）
3. 陥穴 19 完掘（南より）

## 写真図版 6

1. 陥穴 21 完掘（北より）
2. 陥穴 22 完掘（北より）
3. 陥穴 25 完掘（南より）

## 写真図版 7

1. 陥穴 27 完掘（南より）
2. 陥穴 28 完掘（東より）
3. 陥穴 30 完掘（東より）

## 写真図版 8

1. 陥穴 31 完掘（東より）
2. 陥穴 32 完掘（東より）
3. 陥穴 33 完掘（東より）

## 写真図版 9

1. 伯楽塚 17 号墳（東より）
2. 伯楽塚 18 号墳 1 主体部検出（西北より）
3. 伯楽塚 18 号墳 1 主体部完掘（南東より）

## 写真図版 10

1. 伯楽塚 18 号墳南周溝土器出土状況（南より）
2. 伯楽塚 19 号墳 1・2 主体部検出（西より）

3. 伯楽塚 19 号墳 1・2 主体部完掘（東より）

## 写真図版 11

1. 伯楽塚 20 号墳周溝内土器出土状況（北東より）
2. 伯楽塚 21 号墳南周溝検出（南東より）
3. 伯楽塚 21 号墳周溝内土器出土状況（北東より）

## 写真図版 12

1. 石棺墓 1 検出（南より）
2. 石棺墓 1 完掘（北東より）
3. 石棺墓 1 枕（北より）

## 写真図版 13

1. 石棺墓 1 掘形埋土（南西より）
2. 石棺墓 1 掘形完掘（南東より）
3. 石棺墓 2 検出（北東より）

## 写真図版 14

1. 石棺墓 2 断面（南西より）
2. 石棺墓 2 完掘（北東より）
3. 石棺墓 2 転落石（南西より）

## 写真図版 15

1. 石棺墓 2 掘形完掘（南西より）
2. 石棺墓 3 検出（南西より）
3. 石棺墓 3 断面（南西より）

## 写真図版 16

1. 石棺墓 3 完掘（南西より）
2. 石棺墓 3 掘形埋土（東より）
3. 石棺墓 3 掘形埋土（南西より）

## 写真図版 17

1. 石棺墓 3 掘形完掘（北西より）
2. 石棺墓 4 検出（西より）
3. 石棺墓 4 断面（北より）

## 写真図版 18

1. 石棺墓 4 完掘（東より）
2. 石棺墓 4 掘形（北より）
3. 石蓋土壙墓 1 検出（南東より）

写真図版19

1. 石蓋土壙墓1完掘（南西より）
2. 石蓋土壙墓1枕（北より）
3. 石蓋土壙墓2検出（北より）

写真図版20

1. 石蓋土壙墓2完掘（北より）
2. 土壙墓1完掘（北西より）
3. 土壙墓2断面（北西より）

写真図版21

1. 土壙墓3調査中（北西より）
2. 土壙墓3完掘（東より）
3. 土壙墓3完掘（北より）

写真図版22

1. 土壙墓4完掘（北西より）
2. 不明遺構1完掘（北東より）
3. 不明遺構2完掘（北より）

写真図版23

1. 道路1検出（北西より）
2. 道路1凹凸溝検出（北西より）
3. 道路1転石部断面（北東より）

写真図版24

1. 道路1凹凸溝断面（南西より）
2. 道路1凹凸溝断面（南西より）
3. 道路1凹凸溝断面（南西より）

写真図版25

1. 道路1完掘（北東より）
2. 道路1完掘（北西より）
3. 道路1完掘（南東より）

写真図版26

1. 道路2完掘（北西より）
2. 交通壕完掘（北西より）
3. 交通壕完掘（北西より）

写真図版27

1. 谷部東側Ⅲ層上面検出（北より）
2. 谷部南西断面（北東より）
3. 谷部中央断面（東より）

写真図版28

1. 陥穴34完掘（北より）

2. 陥穴35完掘（北より）

3. 陥穴36断面（東より）

写真図版29

1. 陥穴36完掘（南東より）

2. 陥穴37完掘（北より）

3. 陥穴38完掘（西より）

写真図版30

1. 陥穴39完掘（南より）

2. 陥穴40完掘（東より）

3. 陥穴41完掘（北より）

写真図版31

1. 土坑3完掘（南西より）

2. 火山灰サンプル採取中（南東より）

3. 石棺墓1移築復元（北西より）

写真図版32

1. 昭和34年出土土師器1

2. 昭和34年出土須恵器2

3. 昭和34年出土須恵器3

4. 伯楽塚古墳群出土土器

写真図版33

1. 伯楽塚18号墳 (Po. 1)

2. 伯楽塚19号墳 (Po. 2)

3. 伯楽塚19号墳 (Po. 3)

4. 伯楽塚20号墳 (Po. 4)

5. 伯楽塚20号墳 (Po. 5)

6. 伯楽塚20号墳 (Po. 6)

7. 伯楽塚20号墳 (Po. 7)

8. 土壙墓3 (Po. 9)

9. 土壙墓3 (Po. 10)

写真図版34

1. 伯楽塚21号墳 (Po. 8)

2. 土壙墓4 (Po. 11)

3. 道路1 (Po. 13)

4. 道路1 (Po. 13底面)

5. 道路1出土土器 (Po. 12、Po. 14、Po. 15、Po. 16)

6. 丘陵部出土遺物 (Po. 17、Po. 18、Po. 19)

7. 谷部出土遺物（縄紋土器以外）(Po. 114、

Po. 115、Po. 117、Po. 118、Po. 116、Po. 119)

写真図版35

1. 谷部Ⅳ層出土土器(Po. 20、Po. 21、Po. 22、Po. 23、Po. 24、Po. 25、Po. 26、Po. 27、Po. 28、Po. 29、Po. 30、Po. 31、Po. 32、Po. 33、Po. 34)

写真図版36

1. 谷部Ⅲ層出土土器①(Po. 40、Po. 41、Po. 35、Po. 36、Po. 37、Po. 38、Po. 39、Po. 42、Po. 43、Po. 44、Po. 45、Po. 46、Po. 47、Po. 48)

写真図版37

1. 谷部Ⅲ層出土土器②(Po. 49、Po. 50、Po. 51、Po. 52、Po. 53、Po. 54、Po. 55、Po. 56、Po. 57、Po. 58、Po. 59、Po. 60、Po. 61、Po. 62、Po. 63)

写真図版38

1. 谷部Ⅲ層出土土器③(Po. 64、Po. 65、Po. 66、Po. 67、Po. 68、Po. 69、Po. 70、Po. 71、Po. 72、Po. 73、Po. 74、Po. 75、Po. 76、Po. 77、Po. 78、Po. 79)

写真図版39

1. 谷部Ⅲ層出土土器④(Po. 80、Po. 81、Po. 82、Po. 83、Po. 84、Po. 85、Po. 86、Po. 87、Po. 88、Po. 89、Po. 90、Po. 91、Po. 92、Po. 93、Po. 94)

写真図版40

1. 谷部Ⅱ層出土土器(Po. 96、Po. 97、Po. 98、Po. 99、Po. 100、Po. 101、Po. 102、Po. 103、Po. 104、Po. 105)

写真図版41

1. 谷部その他の層出土土器(Po. 106、Po. 107、Po. 108、Po. 109、Po. 110、Po. 111、Po. 112、Po. 113)

写真図版42

1. 黒曜石製の石鏃(S. 1、S. 4、S. 8、S. 9、S. 10、S. 11、S. 14、S. 20、S. 21、S. 22、S. 23、S. 24、S. 33)

2. 黒曜石製の石鏃(裏面)(S. 1、S. 4、S. 8、S. 9、S. 10、S. 11、S. 14、S. 20、S. 21、S. 22、S. 23、S. 24、S. 33)

3. 黒曜石製以外の石鏃(S. 12、S. 13、S. 25、S. 26、S. 27)

4. 黒曜石製以外の石鏃(裏面)(S. 12、S. 13、S. 25、S. 26、S. 27)

5. 打欠石錘(S. 3、S. 5)

6. スクレイパー(S. 7)

7. 玉(S. 15)

写真図版43

1. 磨製石器(S. 2、S. 19、S. 6)

2. 礫石器・石鋏(S. 16、S. 17、S. 28、S. 29、S. 30、S. 31、S. 32)

写真図版44

1. 石核(S. 18)

# 第1章 調査の経緯と経過

## 第1節 発掘調査に至る経緯

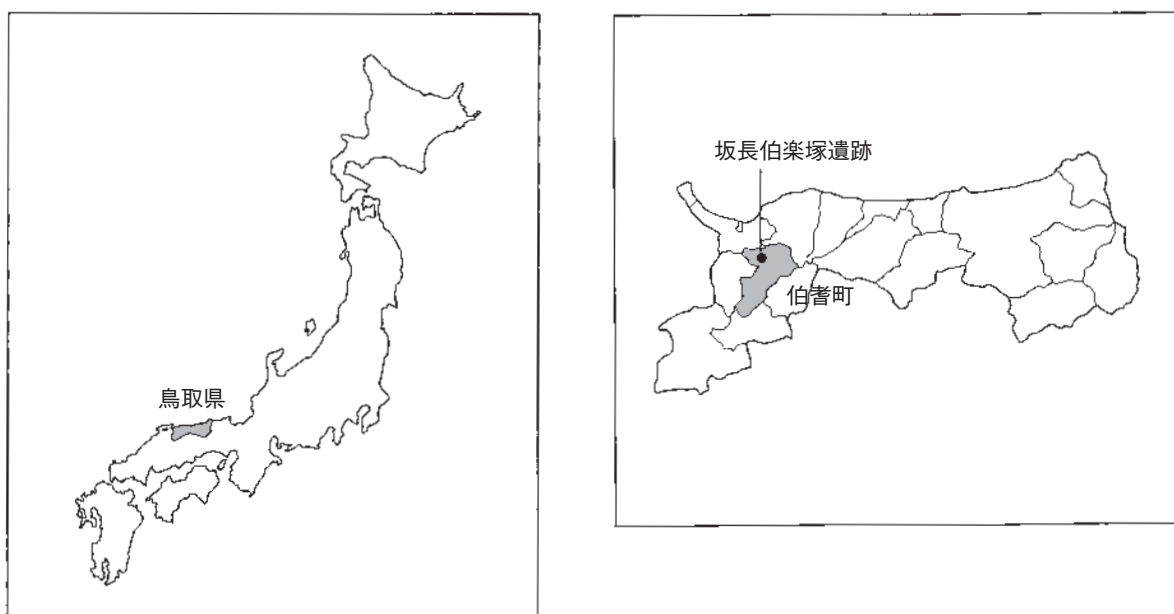
本発掘調査は、西伯郡伯耆町坂長において計画された一般国道181号（岸本バイパス）の道路改良工事予定地内に所在する埋蔵文化財について実施したものである。

今回、発掘調査を実施した坂長伯楽塚遺跡は、16基からなる伯楽塚古墳群の南側に位置しており、さらに調査地のすぐ南側には越敷山112号墳が所在している。遺跡の西側隣接地では、平成8年度に越敷野地区ふるさと農道の建設工事に伴う坂長第5遺跡の発掘調査が行われており、この時の調査で伯楽塚16号墳が確認されるなど、坂長伯楽塚遺跡の周辺には未知の遺跡が多数分布していることが明らかとなっていた。

国道181号（岸本バイパス）は、米子市五千石から伯耆町吉定を結ぶ全長6kmの高規格道路であり、道路区間内では、米子市・諏訪西山ノ後遺跡や伯耆町・長者屋敷遺跡の調査などが実施され、既に米子市五千石～伯耆町坂長区間の一部は供用されている。

今回調査を行った坂長伯楽塚遺跡については、事業主体者である鳥取県と鳥取県教育委員会、伯耆町教育委員会による事前協議が重ねられ、平成22年度には伯耆町教育委員会による試掘調査が実施され、陥穴などの遺構が検出された。この結果を受けて、この工事予定区間における発掘調査日程の調整を行ったが、平成23年度内の伯耆町教育委員会の事業量が多く、年度内の調査実施が困難な状況であったことから、米子市教育文化事業団埋蔵文化財調査室（当時）が本調査を実施することとなり、平成23年1月26日付で文化財保護法第92条の第1項に基づく発掘届を鳥取県教育委員会に提出した。

発掘調査については、平成23年1月28日に鳥取県西部総合事務所と正式に契約を締結し、平成23年3月8日に現地調査着手、平成24年12月28日には全ての調査を完了した。



第1図 遺跡位置図

## 第2節 発掘調査の経過

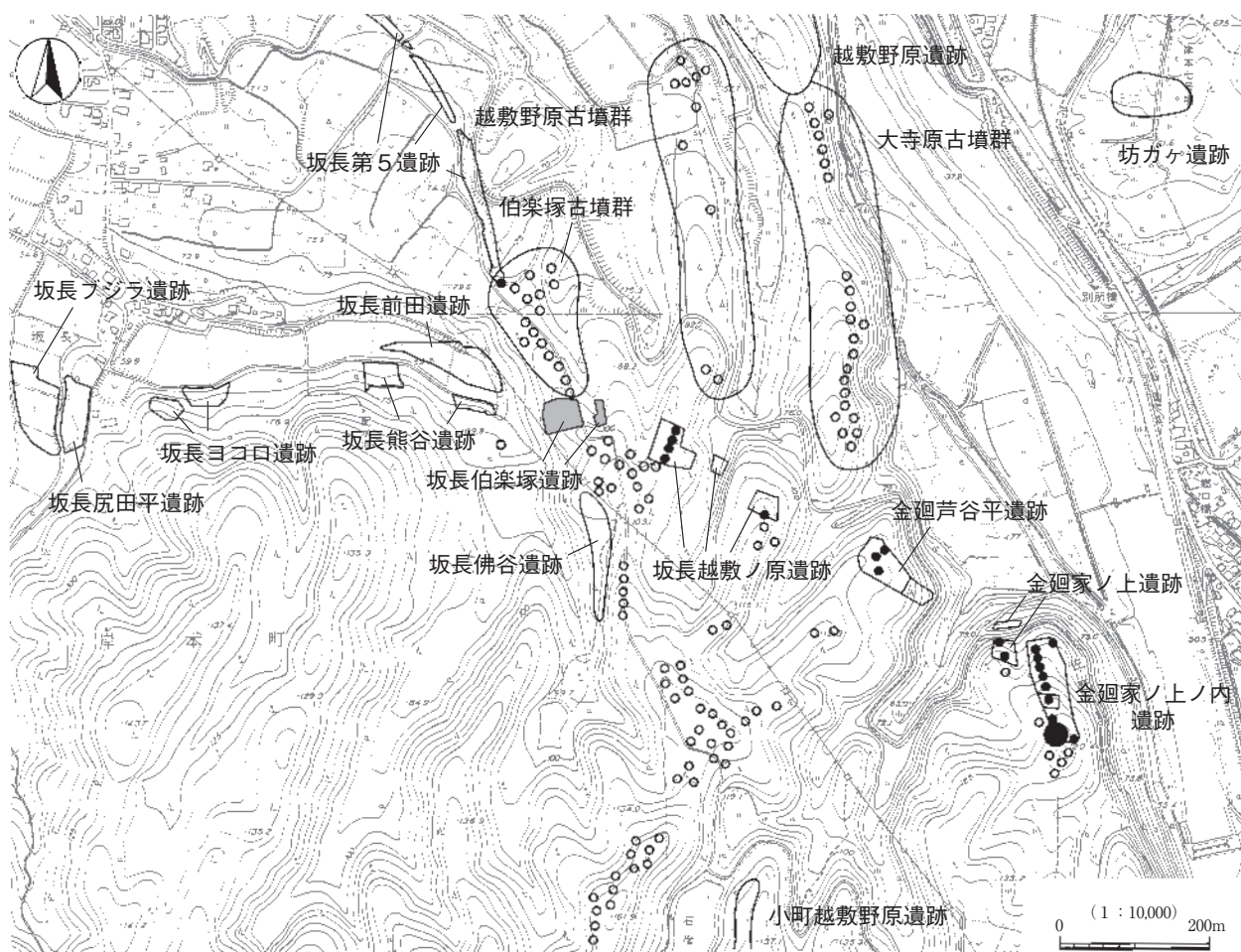
発掘調査は工事対象区間の3,450㎡を対象とし、平成22年3月8日から平成23年12月28日までの期間で現地調査を行った。

現地調査は谷部の調査から始めたが、予想に反して遺構面が2面存在することが明らかとなったため、調査区外に排土置場を確保するために、谷部の東側にある丘陵部の試掘を行い、遺構の有無を確認してから排土置場として利用した。現地調査では、急傾斜地が多く重機の使用が困難であったため、安全性の確保出来る平坦地部分のみ重機を使用し、排土の搬出作業を行った。それ以外の作業は全て人力により、表土掘削、遺構検出を行った。

自然科学分析に関しては、テフラ同定を専門業者に委託した。

## 第3節 整理作業の経過

出土遺物の整理作業は、平成24年度は、出土遺物の洗浄と注記作業を行った。平成25年度には、出土遺物の注記、接合作業を実施した。平成27年度には、出土遺物の接合作業を引き続き行い、遺物の実測、トレース、写真撮影を実施し、年度末までに報告書を刊行した。



第2図 調査地位置図



## 第4節 調査体制

### 平成22年度（2010年度）

事業主体 財団法人米子市教育文化事業団  
理 事 長 杉原弘一郎  
常 務 理 事 中村智至（財団法人米子市教育文化事業団事務局長）  
埋蔵文化財調査室  
室 長 角 昌之（米子市教育委員会文化課長）  
事務長兼調査員 小原貴樹  
統括調査員 平木裕子  
非常勤職員 田中昌子  
事業担当 主任調査員 平木裕子

### 平成23年度（2011年度）

事業主体 財団法人米子市教育文化事業団  
理 事 長 杉原弘一郎  
常 務 理 事 中村智至（財団法人米子市教育文化事業団事務局長）  
埋蔵文化財調査室  
室 長 角 昌之（米子市教育委員会文化課長）  
事務長兼調査員 小原貴樹  
統括調査員 平木裕子  
非常勤職員 田中昌子  
事業担当 主任調査員 佐伯純也

### 平成27年度（2015年度）

事業主体 一般財団法人米子市文化財団（平成25年4月より名称変更）  
理 事 長 杉原弘一郎  
常 務 理 事 先灘達也（一般財団法人米子市文化財団事務局長）  
埋蔵文化財調査室  
室 長 岡 雄一（米子市教育委員会文化課長）平成27年4月30日まで  
室長兼調査員 小原貴樹 平成27年5月1日より  
次長兼統括調査員 平木裕子  
非常勤職員 田中昌子  
事業担当 主任調査員 佐伯純也

調査協力・管理・指導・助言 米子市教育委員会・伯耆町教育委員会・鳥取県教育委員会

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

坂長伯楽塚遺跡は、鳥取県西伯郡伯耆町坂長に所在する集落遺跡・古墳群である。遺跡の立地は、越敷山から北へ長く派生する丘陵上から谷部に位置しており、現況は森林となっている。

遺跡周辺の地形および地質は、日野川を挟んで大きく様相を変える。日野川の右岸地域は、主に第四紀更新世に形成された大山の火山噴出物からなる、緩やかな台地で構成されているが、坂長伯楽塚遺跡の位置する日野川左岸の地域は、標高270mの高塚山と標高226mの越敷山を中心とした南北8km、東西3kmにわたる起伏に富んだ丘陵地帯と、長者原台地と呼ばれる平坦な沖積台地によって構成されている。

前記の丘陵地帯は、第三紀鮮新世の粗面玄武岩を基盤とし、部分的に大山上中部火山灰に覆われている。一方、洪積台地は、南側では安山岩質の砂礫層を、北側では火山砕屑物を主体とする古期扇状地堆積物を基盤としており、上部はやはり大山上中部火山灰に覆われている。また、この他に日野川付近には、低位段丘や扇状地などの地形も見られる。なお、日野川は中世までは岸本集落の北から東北方向に流れて佐陀川に合流していたが、天文19（1550）年と元禄15（1702）年の洪水により、現在のような西寄りの流路に変化している。

### 第2節 歴史的環境

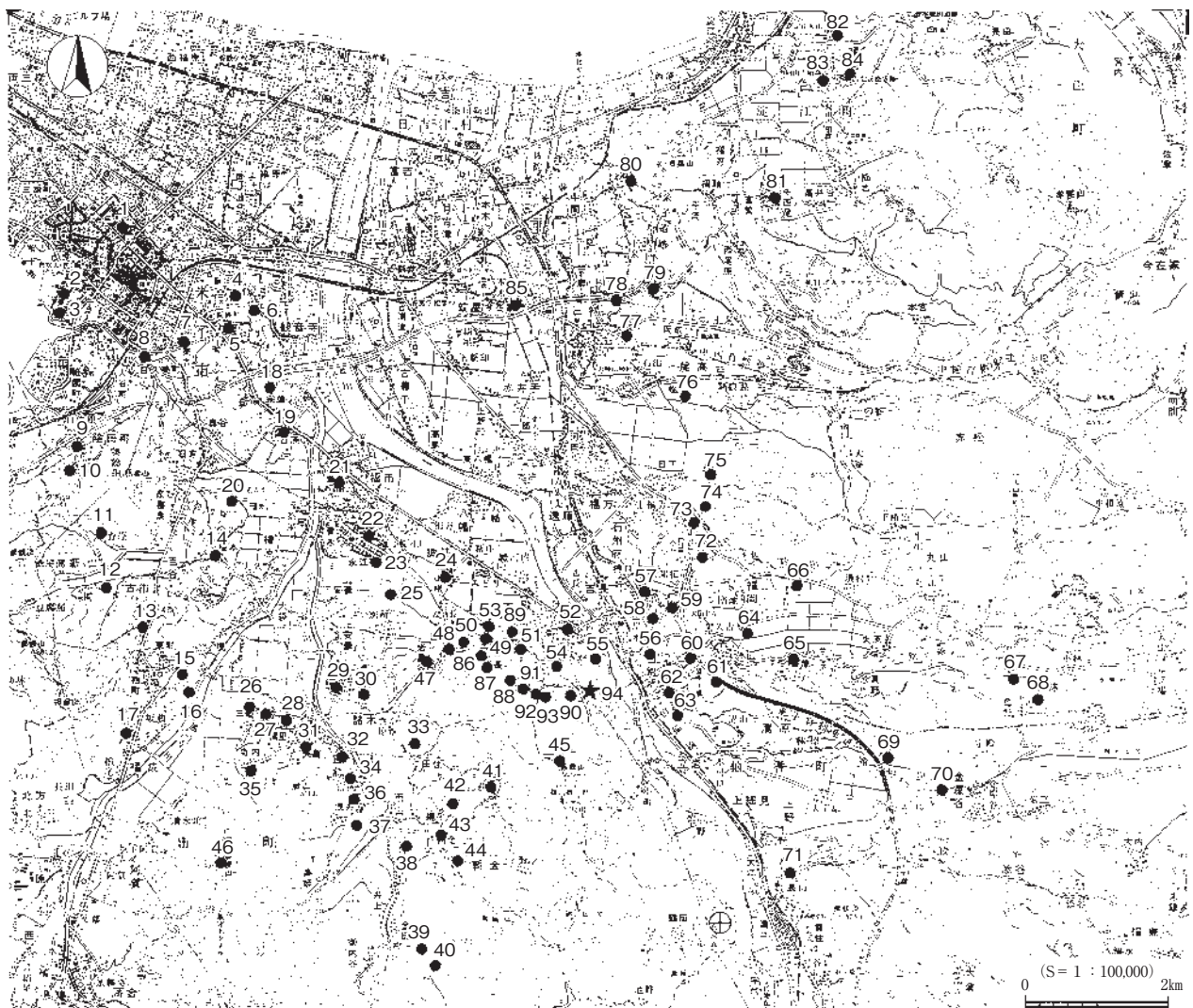
#### 旧石器時代

鳥取県の西部に位置する大山の西麓地方では、旧石器時代の遺跡は検出例が少ない。今回調査した坂長伯楽塚遺跡の周辺では、長者原台地の東端に位置している諏訪西山ノ後遺跡（24）から、珪岩製のナイフ形石器がローム層中から出土した事例がある。また、坂長村上遺跡でも黒曜石製のナイフ形石器が1点出土しているが、ブロックを伴うようなまとまった遺跡の検出例が無く、旧石器時代の様相は不明な点が多い。

#### 縄紋時代

縄紋時代には、草創期のものと見られる尖頭器が坂長村上遺跡からまとまって見つかったり、貝田原遺跡（61）や奈喜良遺跡（20）などでも単独で出土しており、この頃から広範囲に遺跡が広がっているが、土器を伴う集落遺跡の事例はいまだ確認されていない。

続く縄紋時代の早期から、押型紋土器の出土が鳥取県西部の各所で見られ、集落遺跡としてまとまりのある上福万遺跡（73）をはじめとして、林ヶ原遺跡（69）、長山馬籠遺跡などで土器が出土している。ここで出土している押型紋土器は、黄鳥式、高山寺式まであり、上福万遺跡ではこれに後続すると見られる沈線紋土器も出土している。早期の終末には、表裏縄紋で繊維を混入した菱根式土器があり、突帯を持つ福呂式土器へと続くが、坂長伯楽塚遺跡の周辺ではこの段階の様相は明確ではない。



第3図 周辺遺跡分布図

- |            |             |            |            |             |             |
|------------|-------------|------------|------------|-------------|-------------|
| 1 錦町第1遺跡   | 17 清水谷遺跡    | 33 田住古墳群   | 49 坂長下屋敷遺跡 | 65 番原遺跡群    | 81 井出跨遺跡    |
| 2 久米第1遺跡   | 18 東宗像古墳群   | 34 宮前遺跡    | 50 坂長村上遺跡  | 66 須村遺跡     | 82 晩田遺跡     |
| 3 米子城跡     | 19 日原古墳群    | 35 普段寺1号墳  | 51 坂中廃寺跡   | 67 真野ブヤ遺跡   | 83 向山古墳群    |
| 4 長砂第1・2遺跡 | 20 奈喜良遺跡    | 36 浅井11号墳  | 52 大寺廃寺跡   | 68 藍野遺跡     | 84 上淀廃寺跡    |
| 5 長砂第3遺跡   | 21 福市遺跡     | 37 浅井土井敷遺跡 | 53 長者原古墳群  | 69 林ヶ原遺跡    | 85 今在家下井上遺跡 |
| 6 水道山古墳    | 22 青木遺跡     | 38 天王原遺跡   | 54 坂中第5遺跡  | 70 下山南遺跡    | 86 坂長第7遺跡   |
| 7 池ノ内遺跡    | 23 樋ノ口第4遺跡  | 39 金田瓦窯    | 55 岸本大成遺跡  | 71 長山馬籠遺跡   | 87 坂長第8遺跡   |
| 8 目久美遺跡    | 24 諏訪西山ノ後遺跡 | 40 両部太郎窯   | 56 岸本古墳群   | 72 石州府古墳群   | 88 坂長下門前遺跡  |
| 9 陰田遺跡群    | 25 別所新田遺跡   | 41 荻名遺跡群   | 57 岸本遺跡    | 73 上福万遺跡    | 89 大殿狐谷遺跡   |
| 10 奥陰田遺跡群  | 26 三崎殿山古墳   | 42 田住松尾平遺跡 | 58 岸本要害跡   | 74 日下寺山遺跡   | 90 坂長前田遺跡   |
| 11 新山遺跡群   | 27 天萬土居前遺跡  | 43 朝金古墳群   | 59 岸本下の原遺跡 | 75 日下古墳群    | 91 坂長武寿羅遺跡  |
| 12 古市遺跡群   | 28 宮尾遺跡     | 44 朝金小チャ遺跡 | 60 久古第3遺跡  | 76 尾高浅山遺跡   | 92 坂長ブジラ遺跡  |
| 13 吉谷遺跡群   | 29 諸木遺跡     | 45 越敷山遺跡群  | 61 貝田原遺跡   | 77 尾高城跡     | 93 坂長尻田平遺跡  |
| 14 橋本遺跡群   | 30 後塔山古墳    | 46 手間要害跡   | 62 口別所古墳群  | 78 尾高御建山遺跡  | 94 坂長伯楽塚遺跡  |
| 15 福成石佛前遺跡 | 31 天万遺跡     | 47 荒神上遺跡   | 63 吉定1号墳   | 79 泉中峰・前田遺跡 |             |
| 16 福成早里遺跡  | 32 宮前3号墳    | 48 長者屋敷遺跡  | 64 久古北田山遺跡 | 80 小波原畑遺跡   |             |

縄紋時代前期には、西川津式土器、北白川下層式土器が広範囲に認められ、目久美遺跡（8）などの遺跡が集中する中海沿岸の地域で集落活動が活発化し、周辺にも影響を及ぼしていたようである。

伯耆町内では、長山馬籠遺跡（71）から西川津式土器が出土しており、縄紋時代前期の様相が窺える。中期には、鳥取県西部地方全体で集落活動が低下したものと考えられ、特に中期中頃から後半期の遺跡の検出数が激減するが、この原因はよくわかっていない。

縄紋時代の後期後半以降には、目久美遺跡などの中海周辺の遺跡で土器の出土が見られるようになり、再び集落活動が活況を呈するようになる。

縄紋時代晩期には、米子市古市の河原田遺跡（12）や井出勝遺跡（81）などでまとまった資料が得られているが、特に内陸部の河川周辺域での活動が活発になっている。

## 弥生時代

弥生時代前期には、目久美遺跡をはじめ、米子市近郊の低湿地とそれに面する微高地上に集落が形成されているものと見られ、縄紋時代晩期から継続する遺跡も多い。これらの遺跡は初期の農耕集落と推測されるが、明確な建物跡などが見つかる事例は少なく、弥生時代前期の集落像を描くことは難しい。南部町の清水谷遺跡（17）や諸木遺跡（29）では前期の環濠が見つかったが、これらの環濠でも建物などは見つかっていない。

伯耆町内における弥生時代の集落遺跡は、久古第3遺跡において前期の土器の出土が知られているが、この段階の遺構は確認されていない。中期には、下山南通遺跡（70）において中期中葉から後葉の竪穴建物、掘立柱建物、貯蔵穴が見つかった。また、長山馬籠遺跡でも大型の掘立柱建物のほか、中期後葉段階の良好な土器資料が得られている。後期には、代遺跡において竪穴建物が見つかったほか、父原地区では四隅突出型墳丘墓が確認されており、伯耆町内の各所に遺跡が分布している。

## 古墳時代

伯耆町周辺における古墳時代の様相は、付近に古墳時代前期の首長墓として三角縁神獣鏡が出土した南部町の普段寺古墳群（35）があり、画紋帯神獣鏡が出土した浅井11号墳（36）など、鏡を副葬する首長墓の系譜が辿れる。特に、中期には全長108mの前方後円墳である三崎殿山古墳（26）が造られており、鳥取県西部地方における最大首長の墓と目されている。

越敷山周辺では、明確な前期古墳は見られないが、中期に至ってようやく越敷山古墳群が群集墳を形成し始める。これらの群集墳を造った人々の集落は確認されていないが、越敷山から見える範囲に点在しているものと考えられる。越敷山古墳群は、調査された事例が少ないため、不明な部分が多いが、直径10～20mクラスの円墳が主体的であり、規模や副葬品の上で突出した古墳は少ない。これまでに調査された中で最大規模の越敷山51号墳でも、直径25mの円墳であり、中心部の埋葬主体は箱式石棺を用いており、副葬品も鉄器と玉類・竪櫛が出土したのみで、鏡を持たないなどの特徴がある。

後期には、初期の横穴式石室が細見神社で見られるが、数は少なく、石州府古墳群（72）のような横穴式石室を主体とする大規模な群集墳を形成する動きは見られない。越敷山古墳群でも80号墳で横穴式石室が確認されているが、石室の規模が小さく終末期に近い段階のものと考えられている。

終末期には、鳥取県西部地方では横穴墓が一般化し、各地で盛んに造られているが、伯耆町内では検出例が少ないことから、横穴墓があまり積極的に導入されていなかった地域と見られる。

## 古 代

古代の坂長地区には会見郡の郡衙が置かれていたと推測されており、近くには駅家も設置されていた。これまでの調査で、会見郡衙跡とみられる大型の掘立柱建物が長者屋敷遺跡（48）において確認されており、周辺の遺跡からも会見郡衙関連の建物と見られる遺構がたくさん見ついている。こうしたことから、長者原台地とその周辺に会見郡の郡衙が位置していたことは間違いないと考えられる。

白鳳期には、大殿地区に大寺廃寺（52）が建立される。この寺は、東向きの法起寺式伽藍配置で、瓦積基壇の金堂と舍利孔を持つ塔心礎が確認されている。また、大寺廃寺の瓦は4タイプの八葉複弁蓮華紋軒丸瓦と2タイプの均整唐草紋軒平瓦、重弧紋軒平瓦で構成されている。また、福寿寺の境内に保管されている石製の鴟尾は、大山山麓に産出する安山岩を加工したもので、大寺廃寺の金堂の屋根に置かれていたとされる。また、平安期には長者原台地上に坂中廃寺（51）が建立されるが、正確な位置など詳細はよくわかっていない。

## 中 世

平安時代の終わりから鎌倉時代の初めには、長者原台地一帯において紀成盛が活躍していた。紀成盛は、承安元（1171）年に焼失した大山寺の本堂を再建し、本尊の仏像とそれを納める鉄製の厨子を奉納した人物である。これについては、鉄製厨子の由来を記した鍛造の鉄板3枚が現存しており、当時の様子が分かる。

南北朝時代には、大寺地区に安国寺という六十もの僧坊を持つ三千石を領する大寺院が所在したと伝わるが、永禄8（1565）年に杉原盛重により焼き討ちにされたという。また、伯耆町内では三部地区で野上城跡の調査が行われているほか、代遺跡において中世の城郭遺構が調査されている。

## 近 世

中世末期の西伯耆地方は、尼子氏と毛利氏の覇権争いの場となり、しばしば合戦が行われていたが、永禄9（1566）年には月山富田城が開城し、山陰地方の多くが毛利氏の支配下となった。天正19（1591）年からは吉川広家が隠岐国と出雲・伯耆三郡の領主となり、この地を統治していた。関ヶ原戦後の慶長5（1600）年には、中村一忠が伯耆国の領主となり、米子に城を構えたが、慶長15（1610）年に断絶となり、続く加藤貞泰、池田光政（1617～）の統治を経て、寛永9（1632）年に池田光仲の治世となると、池田家家老の荒尾氏による自分手政治が行われ、明治2（1878）年まで存続した。

坂長地区では、佐野川用水の開削事業が開始された。この工事は元和元（1615）年から中断を経ながら約250年間継続し、文久元（1861）年によりようやく開通した。この佐野川用水の完成により、長者原台地上において水田耕作が可能となり、現在の田園風景が広がる景観の礎となった。

## 近現代

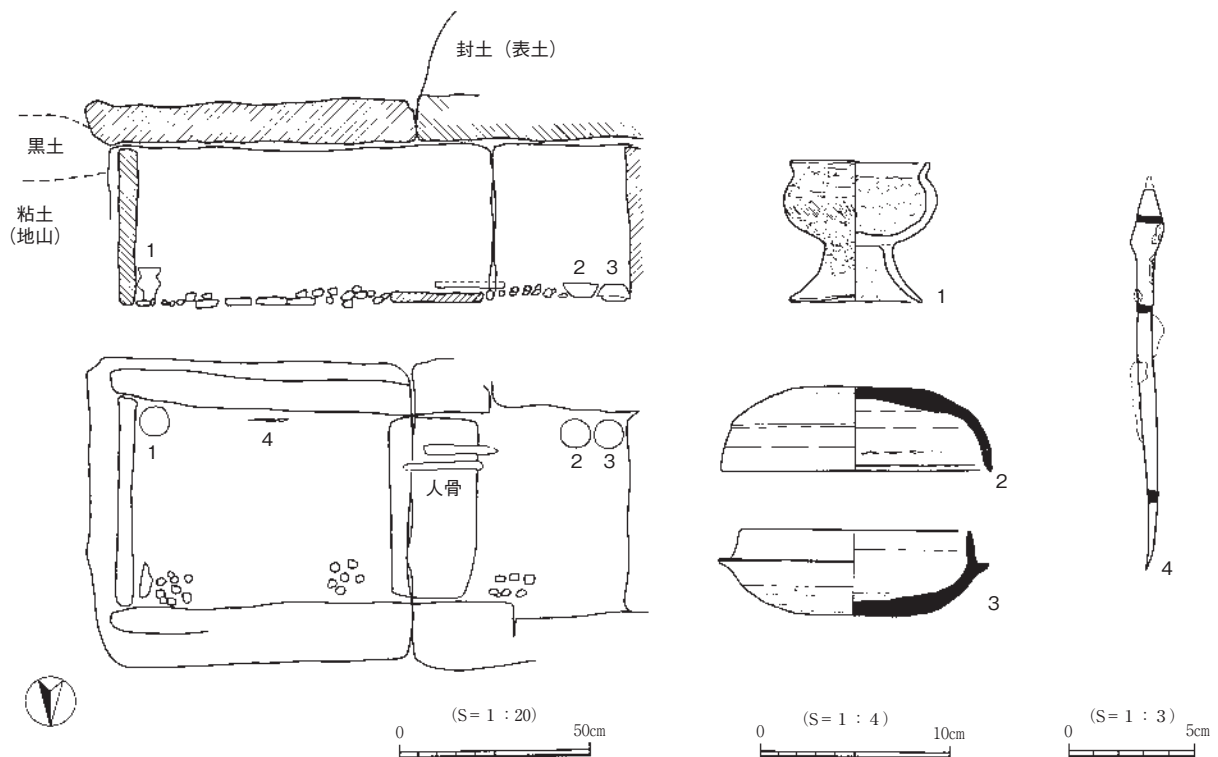
アジア・太平洋戦争の敗色が濃くなった昭和20年5月から、鳥取県内の各所において市民を動員した「チ号演習」が始まった。この「チ号演習」とは、連合軍の上陸を想定して行われた陣地構築作戦の名称であり、いわゆる「本土決戦」に備えたものであった。この越敷山一帯でも塹壕の掘削が各所で行われており、主に日野郡の義勇隊が動員されて作業が進められたという。

### 第3節 既往の調査

坂長伯楽塚遺跡における既往の調査は、平成8年度に行われた坂中第5遺跡の発掘調査により、伯楽塚16号墳が確認されている。坂中第5遺跡は、坂長伯楽塚遺跡の西側を南北に通る、ふるさと農道の建設工事に伴い調査された遺跡で、古墳のほかにも縄文時代の陥穴9基、古墳時代前期の建物跡を検出している。伯楽塚16号墳は標高80mの丘陵上に位置しており、周溝を含めた直径19mの円墳である。墳丘上の埋葬施設は削平されていたが、周溝内から4個体分の甕を使用した土器棺が検出されている。古墳の時期は、出土した土師器長頸壺から古墳時代中期のものと考えられる。また、16号墳の周辺からは木棺墓や石蓋土壙墓が確認されており、伯楽塚16号墳の周辺には周溝を持たない埋葬施設が点在することが明らかとなっている。

昭和34年4月には、同じく伯楽塚地内で果樹林の開墾中に石棺が見つかり、中から人骨とともに土師器壺、須恵器の坏、鉄鏃が出土している。土師器は口径7.2cm、器高7.4cmの台付無頸壺で、全体に橙褐色を呈する泥土が掛けられており、体部の側面には黒斑が残る。須恵器の坏蓋は、口径14.1cm、高さ4.4cmで、天井部は回転ヘラケズリ後にナデ調整される。須恵器の坏身は、口径12.1cm、高さ4.6cmで、底部は回転ヘラケズリ後、ヘラ起こしの痕をナデ調整する。この石棺の時期は、出土した須恵器から6世紀第3四半期頃のものと考えられる。

以上の成果から、坂長伯楽塚遺跡の周辺は、縄文時代には陥穴を用いた狩猟の場であり、弥生時代中期後葉から古墳時代前期には集落として利用され、古墳時代中期から後期に古墳群へと変化したことが推測される。



※石棺と4は「ひすい」より再トレース。

第4図 昭和34年発見の石棺



# 第3章 坂長伯楽塚遺跡丘陵部の調査

## 第1節 調査の方法

本発掘調査は、鳥取県西伯郡伯耆町坂長において計画された一般国道181号（岸本バイパス）の道路改良工事の予定地内に所在する埋蔵文化財について実施したものである。

今回、発掘調査を実施した坂長伯楽塚遺跡は、周知の遺跡である伯楽塚古墳群の南側に位置しており、さらに遺跡の南側の尾根上には、全部で123基からなる越敷山古墳群が連なっている。

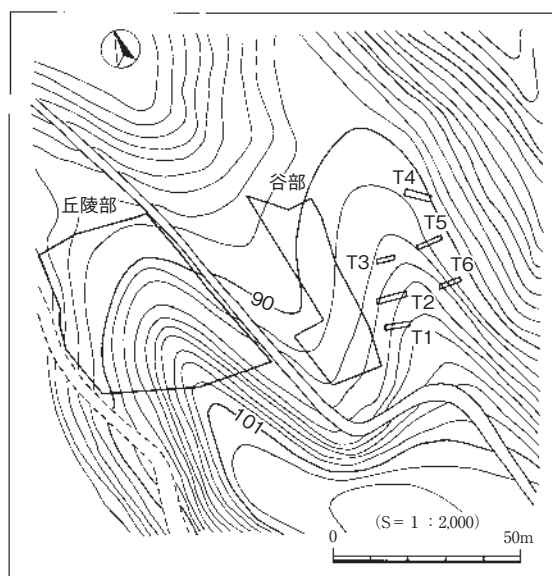
調査範囲は、標高94mの丘陵部から標高82mまでの谷部に分かれており、丘陵部と谷部との境には南北方向に未舗装の道路が通っている。狭小な調査範囲の中で排土置場を確保する必要があったことから、最初に谷部の調査から着手し、排土置場を確保しつつ丘陵部へと移る予定であった。

調査区の設定方法は、北から南へアルファベット表記、西から東へ数字表記の10mグリッドを設定し、主に包含層からの遺物の取上げに利用した。

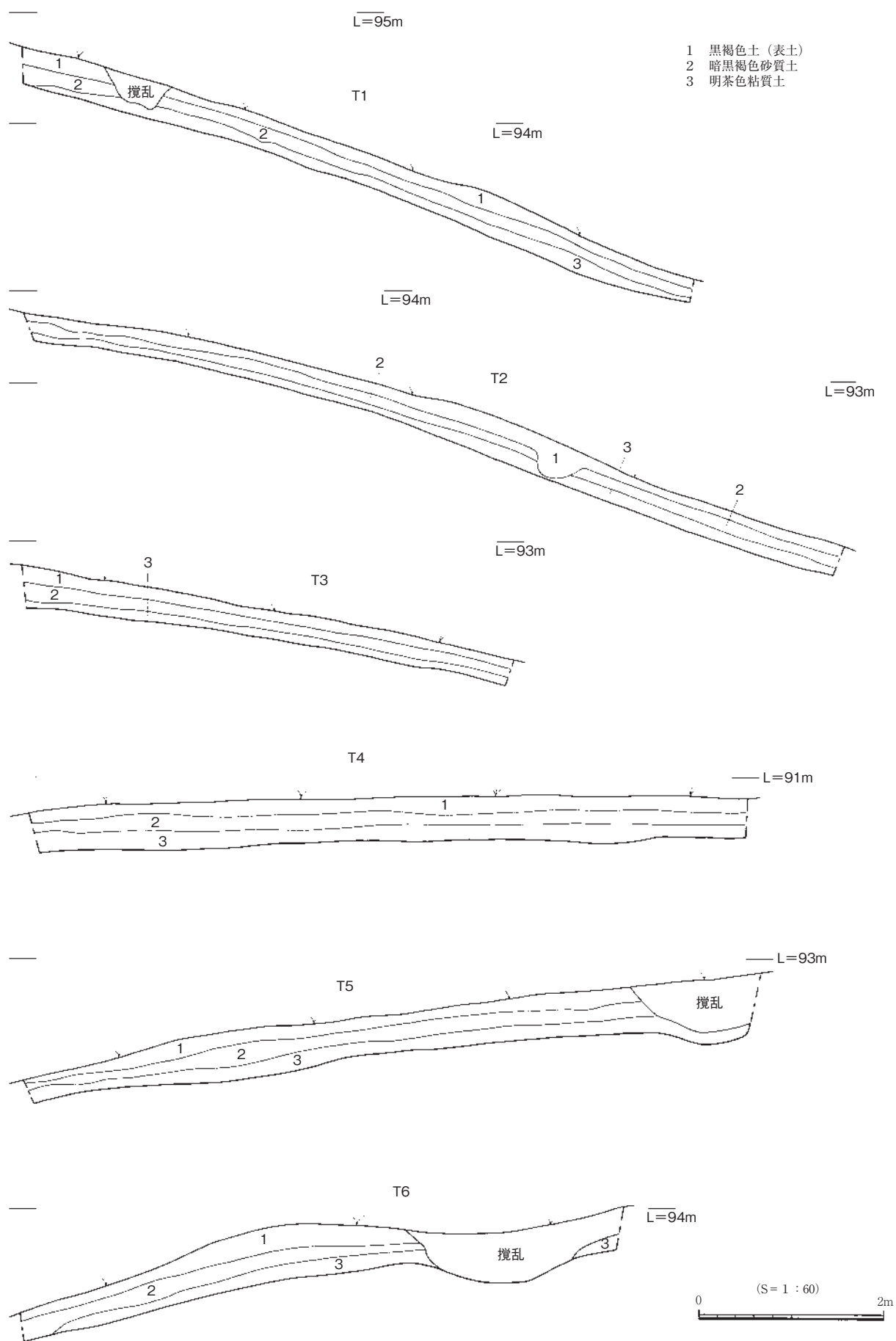
発掘調査は、重機を用いて表土層を除去した後、人力にて包含層を掘削して遺構を検出した。また、排土の処理は、一輪車と人力により運搬し、重機により調査区内の排土置場へと移動させた。人力による掘削には鍬とジョレンを用い、遺構の精査にはガリと移植鍬を使用した。

現場での遺物の取上げは、遺物取上台帳を作成して出土地点と層位を記録して管理した。検出した遺構名については、調査段階では仮の略号を用いているが、本報告書作成段階で変更している。遺構番号については遺構の性格にこだわらず、続き番号で検出した順に登録した。

検出した遺構、遺物の記録には平板とオートレベル、トータルステーションを用い、座標値を記録した。また、写真撮影は、現地では35mmの一眼レフカメラと4×5インチカメラを使用し、白黒、リバーサルフィルムで撮影した。また、サブカメラとして、カラーフィルム、コンパクトデジタルカメラも使用した。遺物撮影は、一眼レフのデジタルカメラを主に使用したほか、35mmの一眼レフカメラによる白黒、リバーサルフィルム撮影も行った。



第5図 調査範囲図



第6図 試掘トレンチ断面図



## 第2節 東側丘陵の試掘調査

谷部の調査に先立ち、排出した土砂の一部を仮置きするために、調査区の東側に隣接する丘陵部を土砂置場に定めた。このため、新たに6箇所の試掘トレンチを設定し、遺構の有無を確認したが、遺物・遺構とも検出することが出来なかったため、この丘陵部には遺跡は無いものと判断した。調査したトレンチは、6箇所とも地形に沿って土砂が堆積していることから、人為的な地形改変などは行われていないと推測される。

## 第3節 遺跡の立地と丘陵部の層位

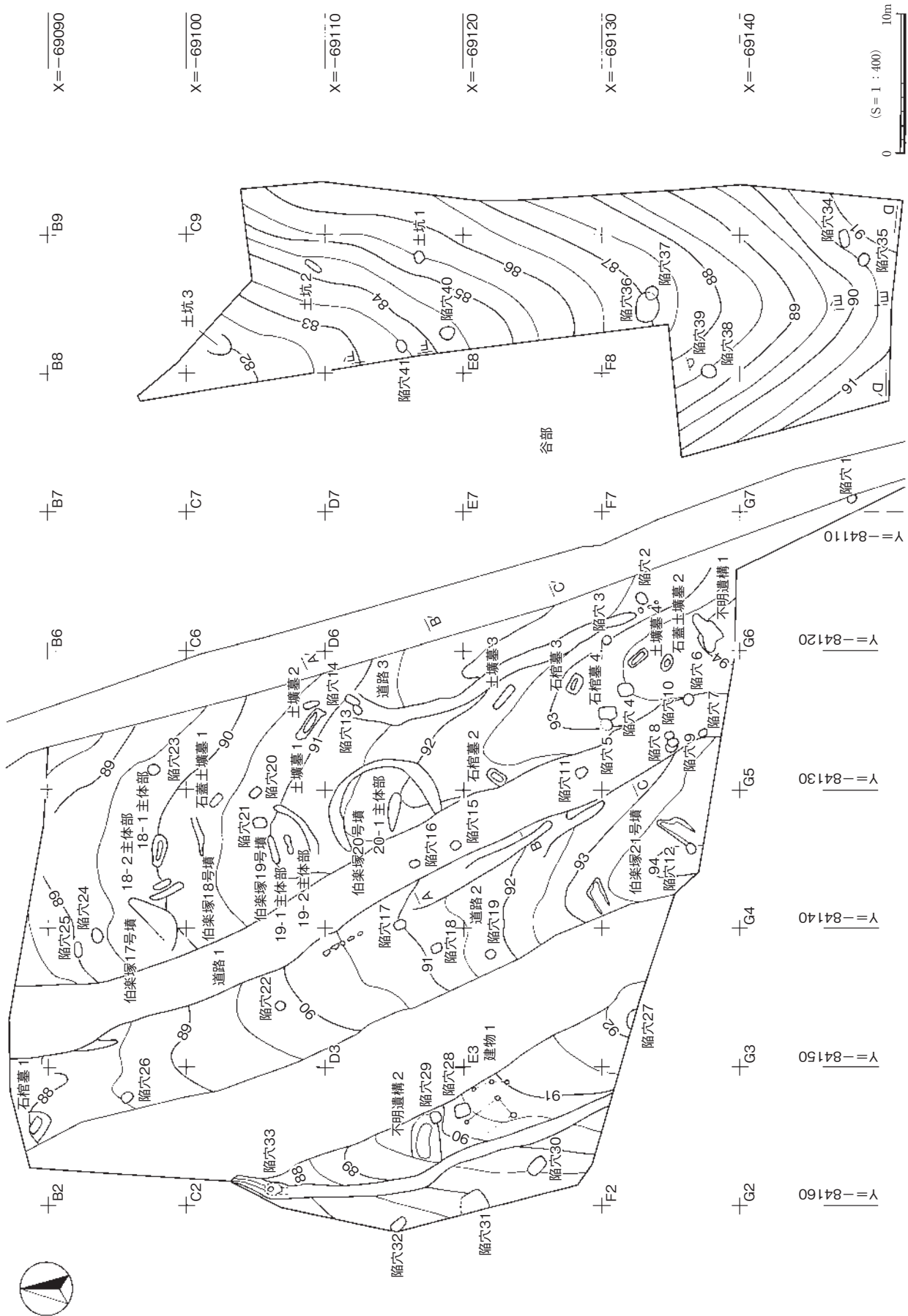
坂長伯楽塚遺跡は、越敷山から北へ伸びる丘陵と谷部に位置している。越敷山から伸びる丘陵は山頂部からタコ足状に周囲に細長く広がっており、丘陵上は平坦な地形が続いている。この丘陵の端部には、坂長伯楽塚遺跡の北に所在する長者原台地との境に谷が形成されており、これまでに実施された国道181号線関連の発掘調査により、縄紋時代から近世までの遺跡の存在が明らかになっているが、中心となるのは会見郡の郡衙が置かれていた古代であろう。

調査地点の現況はスギを中心とする山林であり、調査前に行われた樹木伐採により、地形の変化が明瞭に読み取れる状況であった。丘陵部の中央には土塁状の高まりが南北方向に続いており、土塁上には石棺と見られる石材が露出している状況であったことから、伯楽塚古墳群と同様の古墳が作られているものと考えられた。

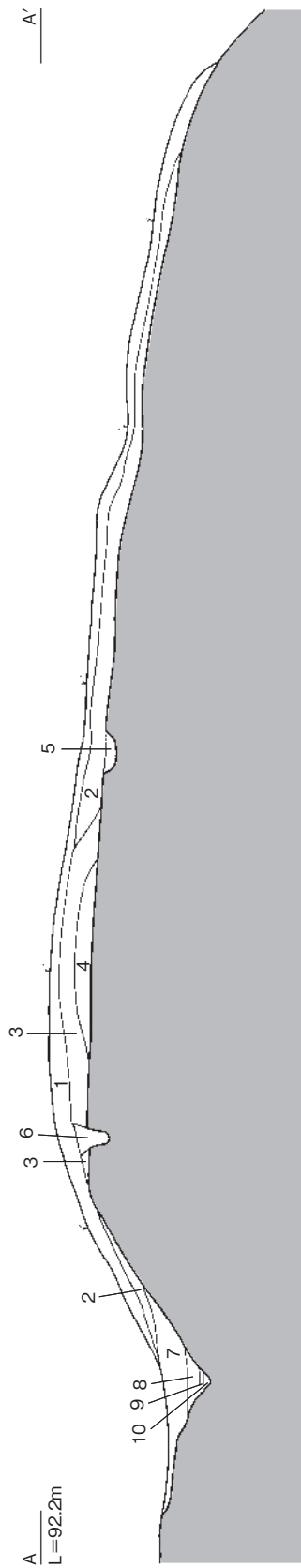
丘陵部の堆積状況は、表土が腐植を多く含む灰茶色の砂質土であり、この土が10～20cmの厚さで調査区の全面を覆っている。また、石棺などは一部が調査前から露出しているものがあったことから、古墳時代の包含層は大半が流出しているものと考えられた。表土を除去すると、道路1の東側は古墳時代の遺物を含む暗茶色の砂質土が堆積しており、この暗茶色砂質土を除去した地山のローム層直上で縄紋時代の陥穴群を検出したことから、陥穴群の形成期から古墳時代頃までの堆積土が一部残っているものと推測された。

道路1の西側は、表土の直下が地山であり、ほとんど遺物包含層が残っていない状況であった。この付近で検出した陥穴19などを見ると、遺構の上面が大きく削平されていることから、道路1・2の建設時に地形が大きく改変されたと考えられる。

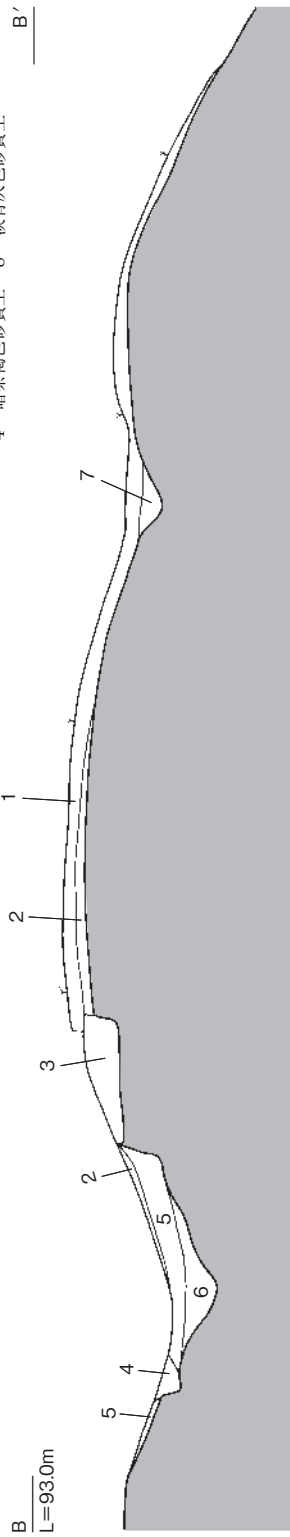
昭和20年代には、越敷山山麓一帯で行われた「チ号演習」により、調査地周辺で塹壕の掘削などの大規模な土地改変が行われている。今回の調査でも大型の塹壕を確認しているが、この遺構内にはほとんど土砂が堆積していない状況であったことから、新しい時期の遺構であることはすぐに理解できた。



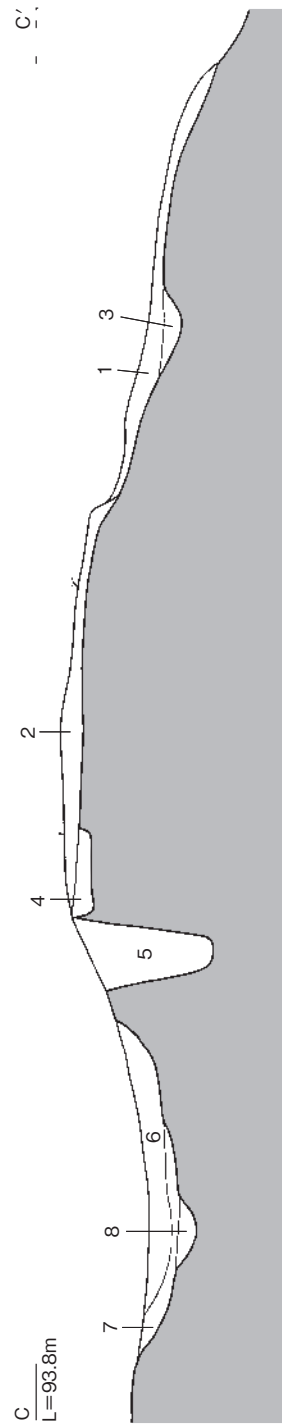
第7図 第2遺構面平面図



- 1 灰茶色砂質土
- 2 暗茶色砂質土
- 3 黒色砂質土
- 4 暗茶褐色砂質土
- 5 黒灰色砂質土
- 6 暗黒色砂質土
- 7 黒褐色砂質土
- 8 淡青灰色砂質土
- 9 明黄灰色砂質土
- 10 青灰色砂質土



- 1 灰茶色砂質土
- 2 淡茶色砂質土
- 3 石積
- 4 暗黒色砂質土
- 5 黒色砂質土
- 6 灰褐色砂質土
- 7 淡灰褐色砂質土



- 1 淡灰茶色砂質土
- 2 黒色砂質土
- 3 淡灰褐色砂質土
- 4 石積
- 5 陥穴5
- 6 濃黒色砂質土
- 7 暗茶灰色砂質土
- 8 灰褐色砂質土



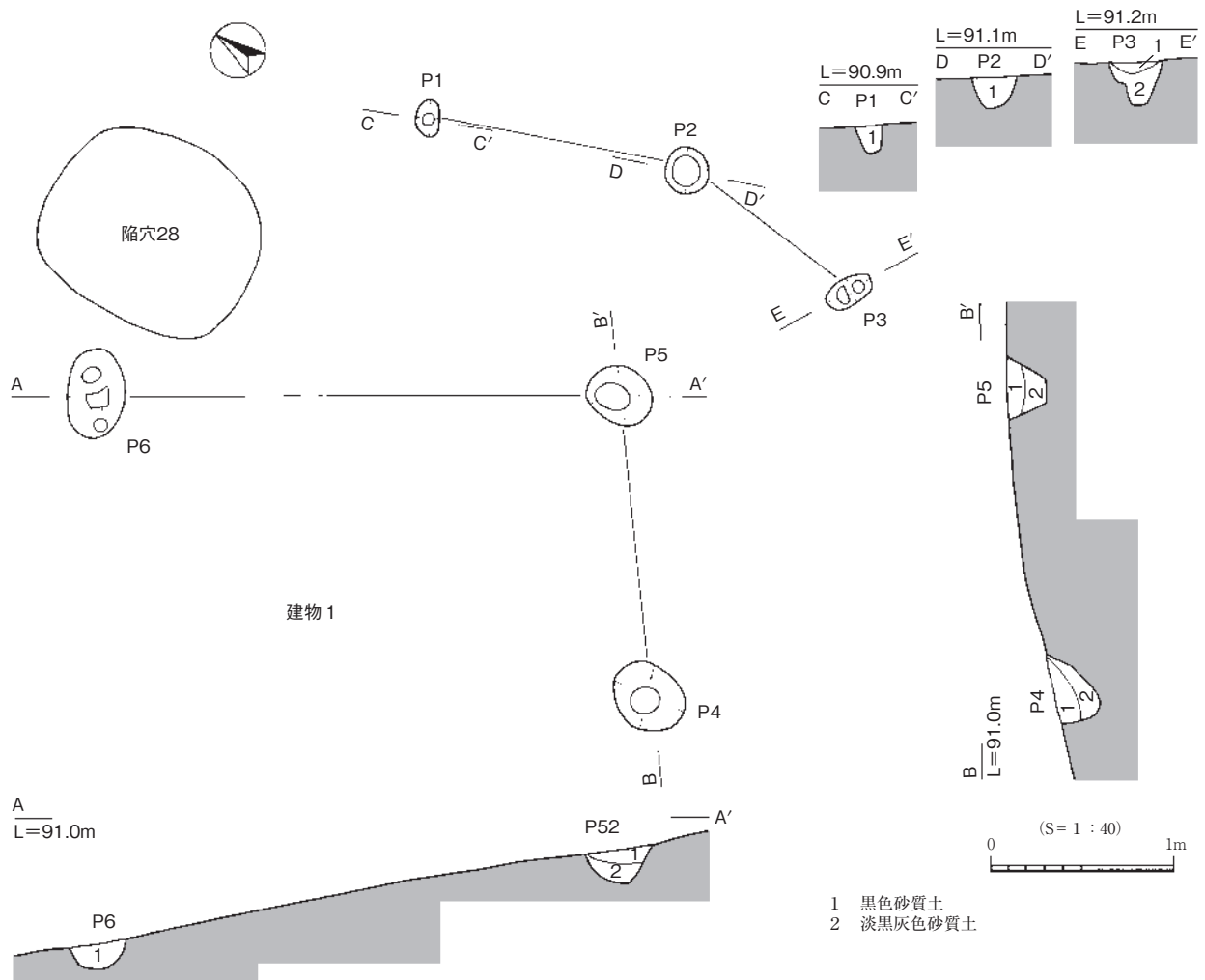
第8図 丘陵部の断面図

## 第4節 古墳時代以前の遺構

丘陵部では、交通壕の西側で建物跡としてまとまりそうな柱穴群と、陥穴状の遺構を多数検出した。全ての遺構で土器を伴うものが無いため、これらの遺構の時期は決し難いが、古墳群が形成された後の遺物が含まれていないことを重視すれば、古墳時代以前に掘削された遺構の可能性が高いと判断される。

### 建物1 (第9図)

E-2区の交通壕西側で検出した柱穴群である。この遺構は全体的に削平が著しいが、支柱穴3基を確認し、東南部に3基の小柱穴が並ぶ。当初は縄紋時代の平地式住居を想定していたが、柱穴の底面レベルが柱穴を検出した面の傾斜に沿っていることから、建物跡では無い可能性が高いが、坂長伯楽塚遺跡では柱穴のまとまりがほとんど見られないことから、何らかの構造物があったものと考えられる。



第9図 建物1遺構図

### 陥穴 1 (第10図)

G-7区の西側、道路沿いの斜面で検出した楕円形の土坑である。遺構検出面の東半分は、道路によって削られている。土坑の規模は、長径75cm、短径55cm、深さ1mを測る。土坑内の埋土は、上層が淡黄褐色砂質土、下層が淡灰褐色砂質土で、土坑の底面に小穴などは見られなかったが、形態的な特徴から陥穴と推測した。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

### 陥穴 2 (第10図)

F-6区の中央北寄りで検出した楕円形の土坑である。土坑の規模は、長径80cm、短径68cm、深さ45cmを測る。土坑の底面には、直径10cm、深さ8cmの小穴が掘られている。遺構内の埋土は、上層が淡黒褐色砂質土、底面付近に明茶褐色土が堆積している。陥穴としては浅すぎるが、遺構の上面が大きく削平されているためと考えられる。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

### 陥穴 3 (第10図)

F-6杭の南東部で検出した、楕円形の土坑である。土坑の規模は、検出面の長径82cm、短径70cm、深さ1.5mを測る。土坑の断面は、「く」字形に屈曲している。土坑の底面には小穴などは見られなかったが、形態的な特徴から陥穴と推測した。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

### 陥穴 4 (第10図)

5区のFライン付近で検出した楕円形の土坑である。土坑の規模は、長径1.2m、短径90cm、深さ60cmを測る。土坑の底面は、ほぼ平坦で小穴などは見られない。遺構内の埋土は、淡褐色の砂質土が堆積している。陥穴としてはやや浅い上に、断面形が楕円状を呈していることから、陥穴では無い可能性もある。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

### 陥穴 5 (第10図)

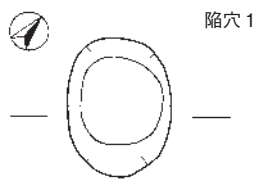
陥穴4の西側で検出した、円形の土坑である。遺構の西半分は、道路1の断割トレンチによって削られている。検出面の規模は、直径1m程度と推測され、深さは80cmである。土坑内の埋土は、上層が淡灰褐色砂質土、底面付近が淡黒褐色砂質土である。土坑の底面には小穴などは見られなかったが、形態的な特徴から陥穴と推測される。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

### 陥穴 6 (第10図)

F-5区の中央部で検出した、円形の土坑である。遺構の上面は、道路1によって削られている。検出面の規模は、直径80cm、深さは1.2mである。土坑内の埋土は、上層が淡黒色砂質土、下層が淡茶灰色砂質土である。土坑の底面には小穴などは見られなかったが、形態的な特徴から陥穴と推測される。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

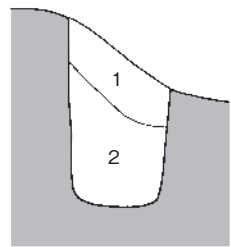
### 陥穴 7 (第11図)

F-5区の中央部、道路1の底面で検出した楕円形の土坑である。遺構の上半分は、道路1によって削られている。検出面の規模は、長径70cm、短径60cm、深さは40cmである。土坑内の埋土は、上層

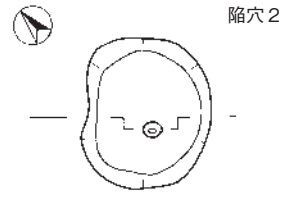


陥穴 1

L=94.1m

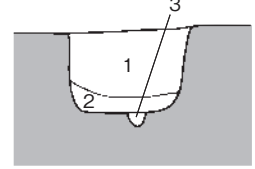


- 1 淡黄褐色砂質土
- 2 淡灰褐色砂質土

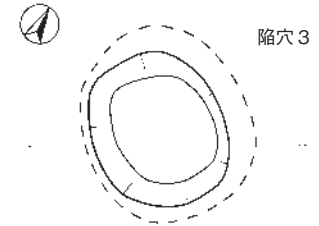


陥穴 2

L=91.8m

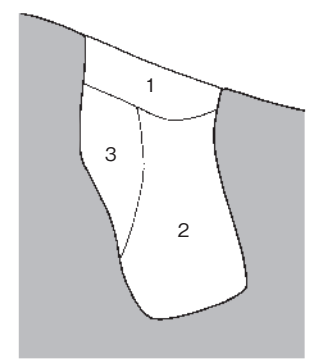


- 1 淡黑褐色砂質土
- 2 明茶褐色土
- 3 黑色褐色土

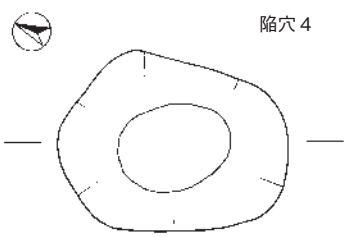


陥穴 3

L=93.2m

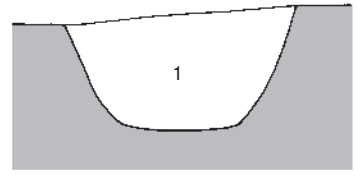


- 1 黑色砂質土
- 2 黑褐色砂質土
- 3 淡黑茶色砂質土

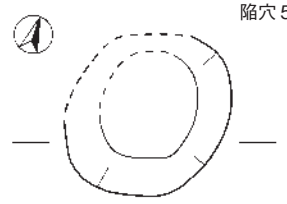


陥穴 4

L=93.5m

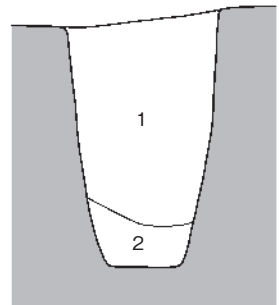


- 1 淡褐色砂質土

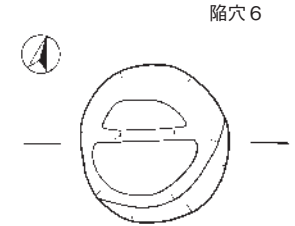


陥穴 5

L=93.2m

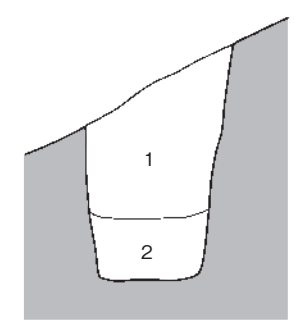


- 1 灰褐色砂質土
- 2 淡黑褐色砂質土

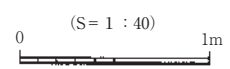


陥穴 6

L=93.8m



- 1 淡黑色砂質土
- 2 淡茶灰色砂質土



第10図 陥穴 1 ~ 6 遺構図

が淡黒茶色砂質土、底面付近が黒褐色砂質土である。土坑の底面には直径10cm、深さ10cmの小穴が掘られている。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

#### **陥穴8**（第11図）

F-5区の中央部西寄り、道路1の底面で検出した長方形の土坑と推測される。遺構の上半分は、道路1によって削られており、土坑9を切っている。検出面の規模は、長辺80cm、短辺70cm、深さは40cmである。土坑の底面には、小穴などは見られない。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

#### **陥穴9**（第11図）

陥穴8によって切られる、円形の土坑と推測される。遺構の上半分は、道路1によって削られており、東側にある土坑10を切っている。検出面の規模は、直径60cm程度と推測され、深さは50cmである。土坑の底面には、小穴などは見られない。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

#### **陥穴10**（第11図）

陥穴9によって切られる、楕円形の土坑と推測される。遺構の上半分は、道路1によって削られている。検出面の規模は、長径80cm、短径50cm、深さは30cmである。土坑の底面、やや東寄りに直径10cm、深さ15cmの小穴が掘られている。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

#### **陥穴11**（第11図）

E-5区西寄りで検出した長方形の土坑である。遺構の上半分は、道路1によって削られている。検出面の規模は、長辺85cm、短辺70cm、残存する深さは20cmである。土坑底面の中央に、直径20cm、深さ18cmの小穴が掘られている。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

#### **陥穴12**（第11図）

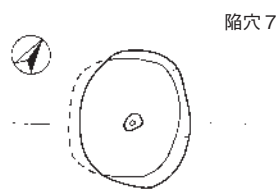
伯楽塚21号墳の南周溝によって切られる、楕円形の土坑と推測される。検出面の規模は、長径70cm、短径60cm、深さは70cmである。土坑の底面はほぼ平坦だが、小穴などは見られない。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

#### **陥穴13**（第11図）

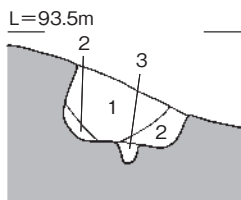
陥穴14を切る、楕円形の土坑である。遺構の上半分は、道路1によって削られている。検出面の規模は、長辺80cm、短辺65cm、深さは1mである。土坑の底面、やや北寄りに直径15cm、深さ20cmの小穴が掘られている。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

#### **陥穴14**（第11図）

D-5区の北部、道路3の北側で検出した長方形の土坑である。検出面の規模は、長辺1.2m、短辺60cm、深さは70cmである。土坑の底面はほぼ平坦だが、小穴などは見られない。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

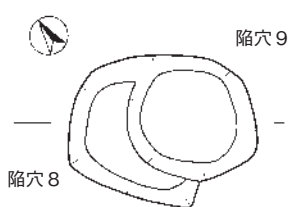


陥穴7



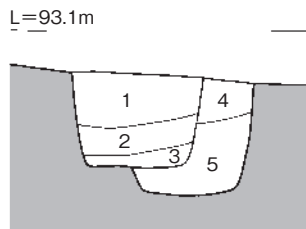
L=93.5m

- 1 淡黒茶色砂質土
- 2 明茶色砂質土
- 3 黒褐色砂質土



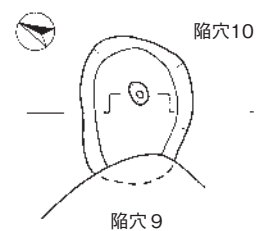
陥穴9

陥穴8

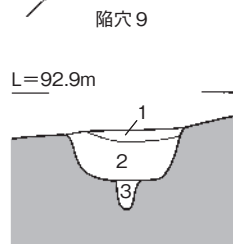


L=93.1m

- 1 灰黒色砂質土
- 2 明茶色砂質土
- 3 暗黒色砂質土
- 4 淡褐色砂質土
- 5 暗黒灰色砂質土

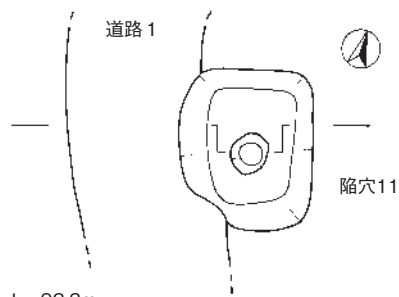


陥穴10

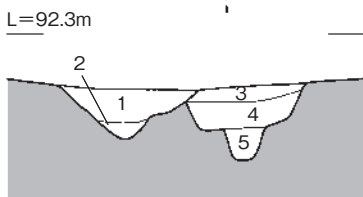


L=92.9m

- 1 褐色砂質土
- 2 暗褐色砂質土
- 3 黒色砂質土

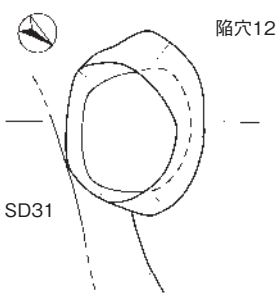


陥穴11



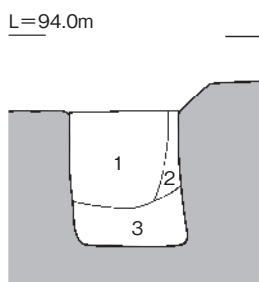
L=92.3m

- 1 淡灰褐色砂質土
- 2 灰色砂質土
- 3 茶褐色砂質土
- 4 明茶色砂質土
- 5 黒褐色砂質土



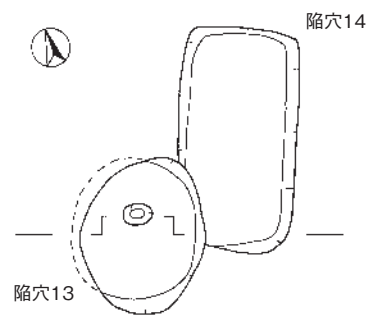
陥穴12

SD31



L=94.0m

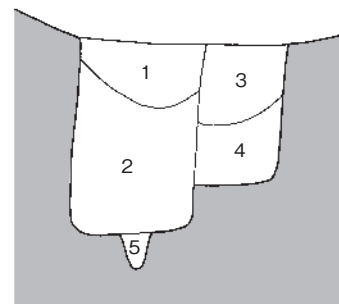
- 1 淡黒灰色砂質土
- 2 淡茶灰色砂質土
- 3 明茶灰色砂質土



陥穴14

陥穴13

L=91.4m



- 1 淡黄茶色砂質土
- 2 黒灰色砂質土
- 3 明茶色砂質土
- 4 暗茶色砂質土
- 5 黒色砂質土

(S=1:40)  
0 1m

第11図 陥穴7~14遺構図



#### 陥穴15 (第12図)

4区のEライン北側で検出した楕円形の土坑である。遺構上面は道路1によって大きく削平されているが、形態的な特徴から陥穴と推測される。検出面の規模は、長辺70cm、短辺60cm、深さは28cmである。土坑の底面には、直径15cm、深さ30cmの小穴が掘られている。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

#### 陥穴16 (第12図)

D-4区の中央で検出した長方形の土坑である。遺構の大半は道路1によって大きく削平されているが、形態的な特徴から陥穴と推測される。検出面の規模は、長辺65cm、短辺50cm、深さは10cmである。土坑の底面には、直径18cm、深さ35cmの小穴が掘られている。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

#### 陥穴17 (第12図)

D区の4ライン中央部で検出した長方形の土坑である。検出面の規模は、長辺90cm、短辺60cm、深さは40cmで、底面まで真っすぐに掘り込まれている。土坑の底面には、直径20cmの穴が掘られており、さらにその内部には複数の杭を刺したと思われる3つの小穴が掘られている。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

#### 陥穴18 (第12図)

D-3区の南東部で検出した長方形の土坑である。検出面の規模は、長辺76cm、短辺56cm、深さは40cmである。土坑の底面中央には、直径19cm、深さ8cmの小穴が掘られている。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

#### 陥穴19 (第12図)

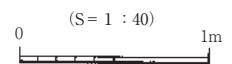
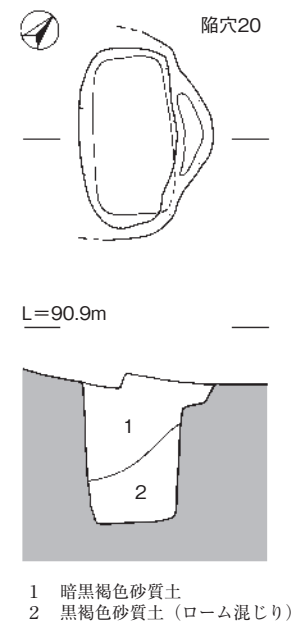
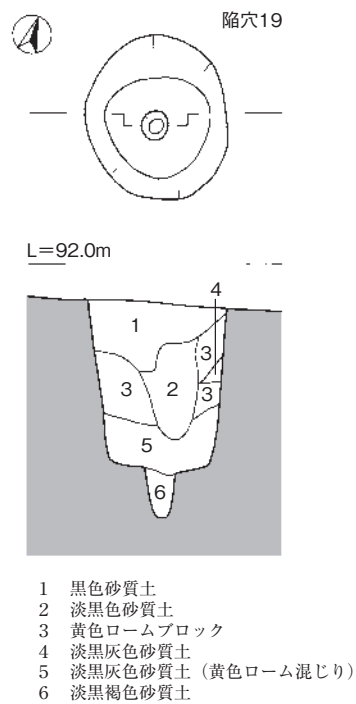
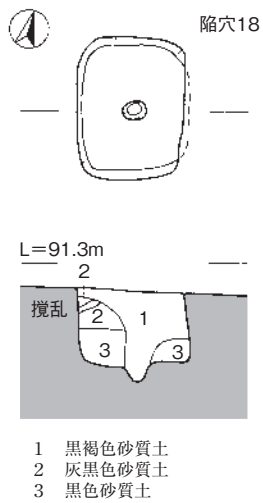
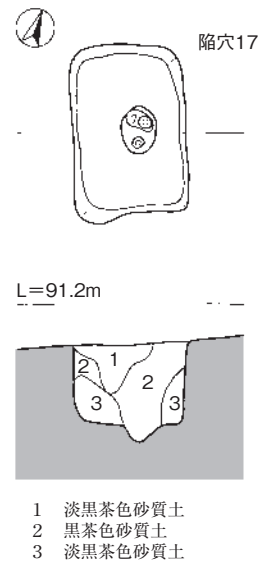
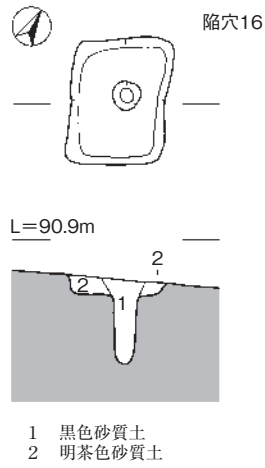
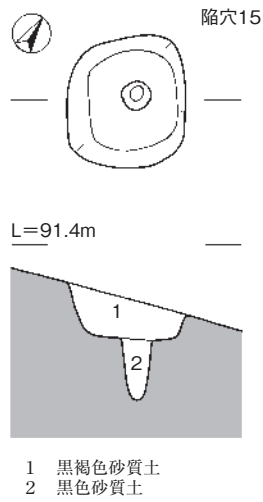
E-3区の北東部で検出した楕円形の土坑である。検出面の規模は、長径90cm、短径72cm、深さは90cmである。土坑の底面中央には、直径15cm、深さ30cmの小穴が掘られている。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

#### 陥穴20 (第12図)

C区の5ラインで検出した長方形の土坑である。遺構検出面は地山のローム層直上であるが、一部にクロボク状の黒色土が堆積しており、クロボク層を切って掘り込まれていた可能性がある。検出面の規模は、長辺1m、短辺50cm、深さは80cmである。土坑の底面は平坦だが、小穴などは見られない。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

#### 陥穴21 (第13図)

伯楽塚19号墳の墳丘を除去した下層から見つかった長方形の土坑である。検出面の規模は、長辺95cm、短辺70cm、深さは1.05mである。土坑の底面には小穴などは見られない。出土遺物は、埋土中から黒曜石製の石鏃(S.1)が1点出土した。



第12図 陥穴15~20遺構図

#### 陥穴22 (第13図)

C-3区の中央部で検出した不整円形の土坑である。検出面の規模は、長辺60cm、短辺45cm、深さは30cmである。土坑の底面は直径50cm程度と小型だが、断面形が袋状を呈しており、一見すると貯蔵穴のようにも見えるが、今回の調査区では集落遺跡に関わる遺構がほとんど検出されていないことから陥穴の可能性が高いと考えられる。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

#### 陥穴23 (第13図)

B-5区の南西部で検出した円形の土坑である。検出面の規模は、直径80cm、深さは1.2mである。土坑の底面、中央からやや北寄りの場所に直径18cm、深さ32cmの小穴が掘られている。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

#### 陥穴24 (第13図)

B区の4ラインで検出した楕円形の土坑である。検出面の規模は、長径1m、短径70cm、深さは1.1mであるが、土坑の断面形は底面に向かって細くなっている。底面の形状は、直径50cmの円形でやや小型であるが、土坑の底面には小穴などは見られなかった。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

#### 陥穴25 (第13図)

B-3区の北東部で検出した長方形の土坑である。検出面の規模は、長辺1m、短辺50cm、深さは80cmである。土坑の底面には直径15cm、深さ40cmの小穴が掘られている。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

#### 陥穴26 (第14図)

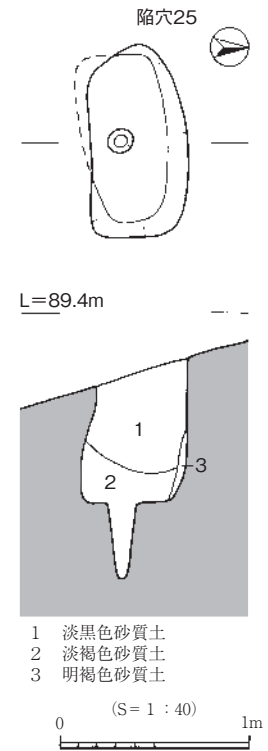
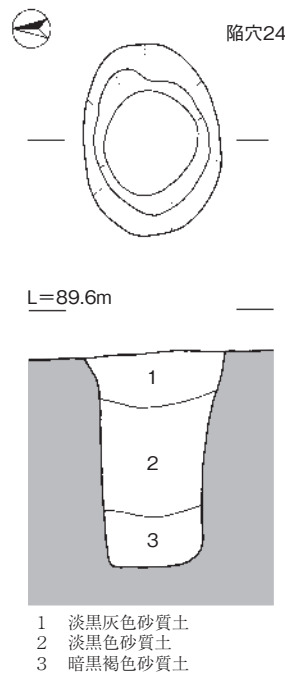
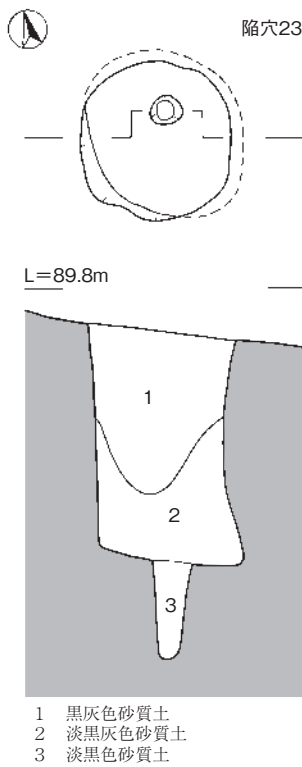
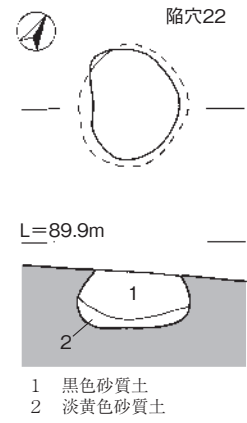
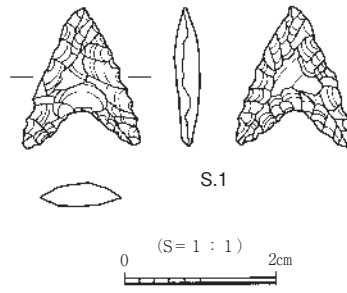
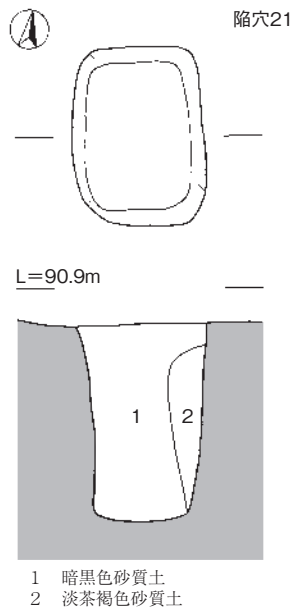
B-2区の東側で検出した楕円形の土坑である。検出面の規模は長径78cm、短径60cm、深さ60cmを測り、土坑の断面形は逆台形を呈する。土坑の底面には小穴などは見られない。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

#### 陥穴27 (第14図)

F-3区の東側、調査区の南端で検出した楕円形の土坑と推測される。検出した長さ1.4m、深さ1.3mを測るが、遺構の大半は土層の観察用に掘削したトレンチのため消滅した。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

#### 陥穴28 (第14図)

2区のEラインで検出した楕円形の土坑である。検出面の規模は、長径1.2m、短径1m、深さ1.3mを測る。断面形は、下に向かって細くなっている。底面は長方形を呈するが、小穴は掘られていない。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。



第13図 陷穴21~25遺構・遺物図

### 陥穴29 (第14図)

D-2区の不詳遺構2によって切られる、不整形の土坑である。検出面の規模は、長径80cm、短径60cm、深さ50cmを測り、底面には段状の掘り込みが残る。一見すると、杭を刺した穴のようにも見えるが、周辺から見つかった陥穴と比較すると形態的な差異が大きいため、陥穴では無い可能性がある。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

### 陥穴30 (第14図)

E-2区の中央部西寄りで見出した長方形の土坑である。検出面の規模は、長さ1.5m、幅1m、深さ1.2mで、底面の規模は長さ80cm、幅50cmで検出面よりも一回り小さくなっている。底面に長径30cm、短径20cm、深さ35cmの小穴が掘られていることから、陥穴と推測される。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

### 陥穴31 (第15図)

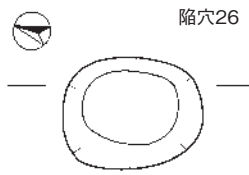
E-2杭付近の調査区西端で見出した、長方形の土坑である。東側の検出面が大きく掘り込まれているが、土坑の西側が調査開始前に大きく削平されているため、旧状を復元し得なかった。東側の遺構検出面から底面までの深さが1.9mにもなるため、遺構の上面が攪乱されている可能性がある。土坑底面の長さは1.2m、幅60cmで、底面に小穴は掘られていない。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

### 陥穴32 (第15図)

D-1区の東側で見出した楕円形の土坑である。検出面の規模は長径1.3m、短径70cm、深さ90cmで、底面の規模は長径80cm、短径50cm、底面の小穴は直径15cm、深さ35cmを測る。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

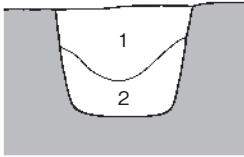
### 陥穴33 (第15図)

交通壕1の西側に平行する溝状の攪乱によって削平された土坑である。現存する長さ1.3m、深さ80cmを測る。検出面の大半が失われているため、平面の形態はよく分からないが、楕円形の土坑と推測される。底面は、遺構上面と比較して直径40cm程度と狭いが、底面に直径12cm、深さ20cmの小穴が掘られていることから、陥穴の可能性が高いと考えられる。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

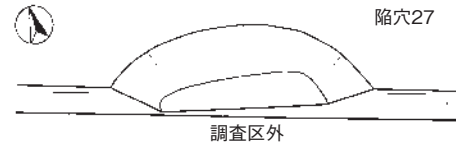


陥穴26

L=88.8m



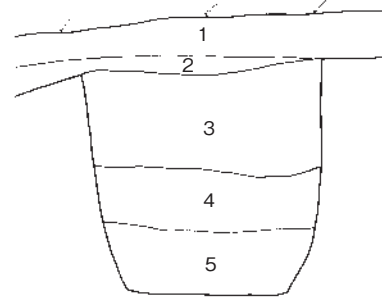
- 1 淡黒灰色砂質土
- 2 淡黄褐色砂質土



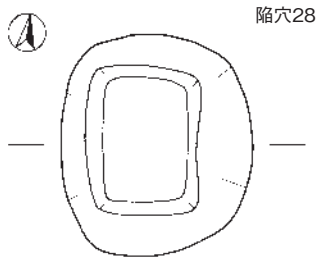
陥穴27

調査区外

L=92.7m

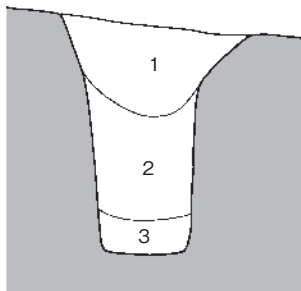


- 1 暗褐色砂質土
- 2 明茶褐色砂質土
- 3 淡黒褐色砂質土
- 4 黒褐色砂質土
- 5 黒色砂質土



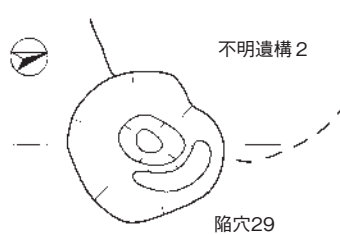
陥穴28

L=90.7m



- 1 淡黒灰色砂質土
- 2 暗茶褐色砂質土
- 3 茶褐色砂質土

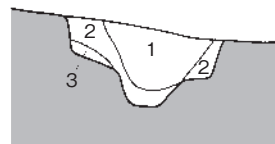
(S=1:40)  
0 1m



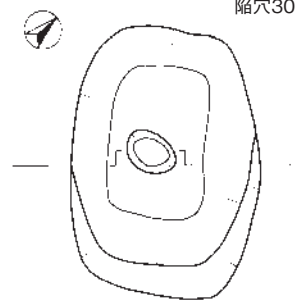
不明遺構2

陥穴29

L=90.1m

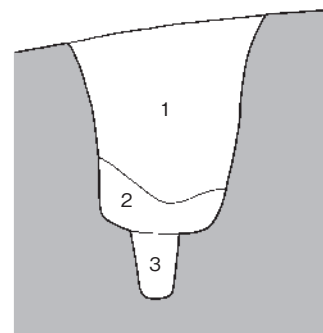


- 1 淡黒褐色砂質土
- 2 淡黒色砂質土
- 3 灰茶色砂質土



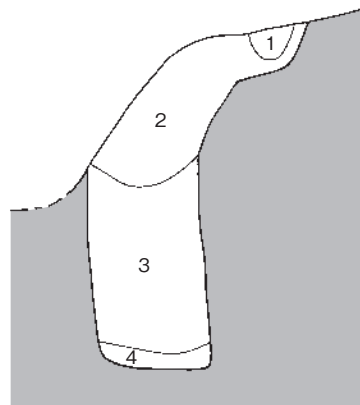
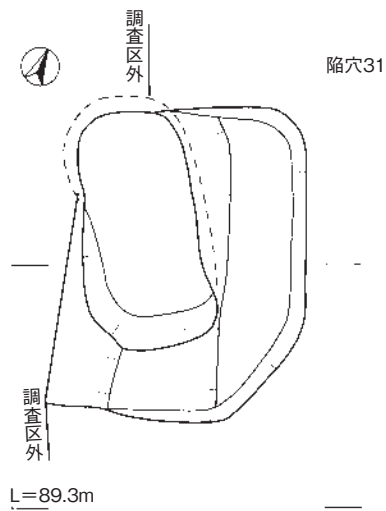
陥穴30

L=90.0m



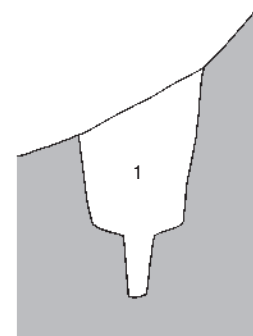
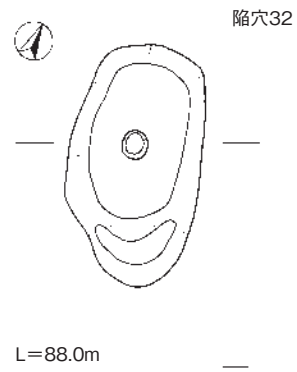
- 1 淡黒灰色砂質土
- 2 淡茶灰色砂質土
- 3 黒色砂質土

第14図 陥穴26~30遺構図

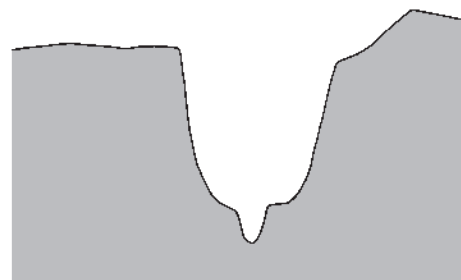
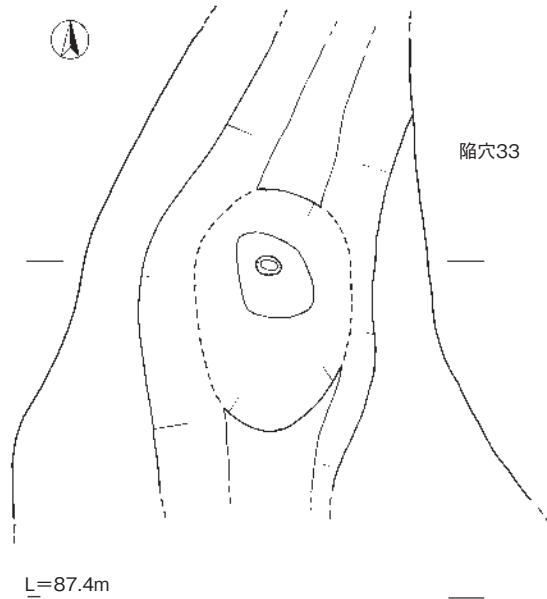


- 1 淡黒色砂質土
- 2 明灰色砂質土
- 3 淡灰色砂質土
- 4 淡黒灰色砂質土

(S=1:40)  
0 1m



1 淡黒色砂質土



第15図 陥穴31~33遺構図

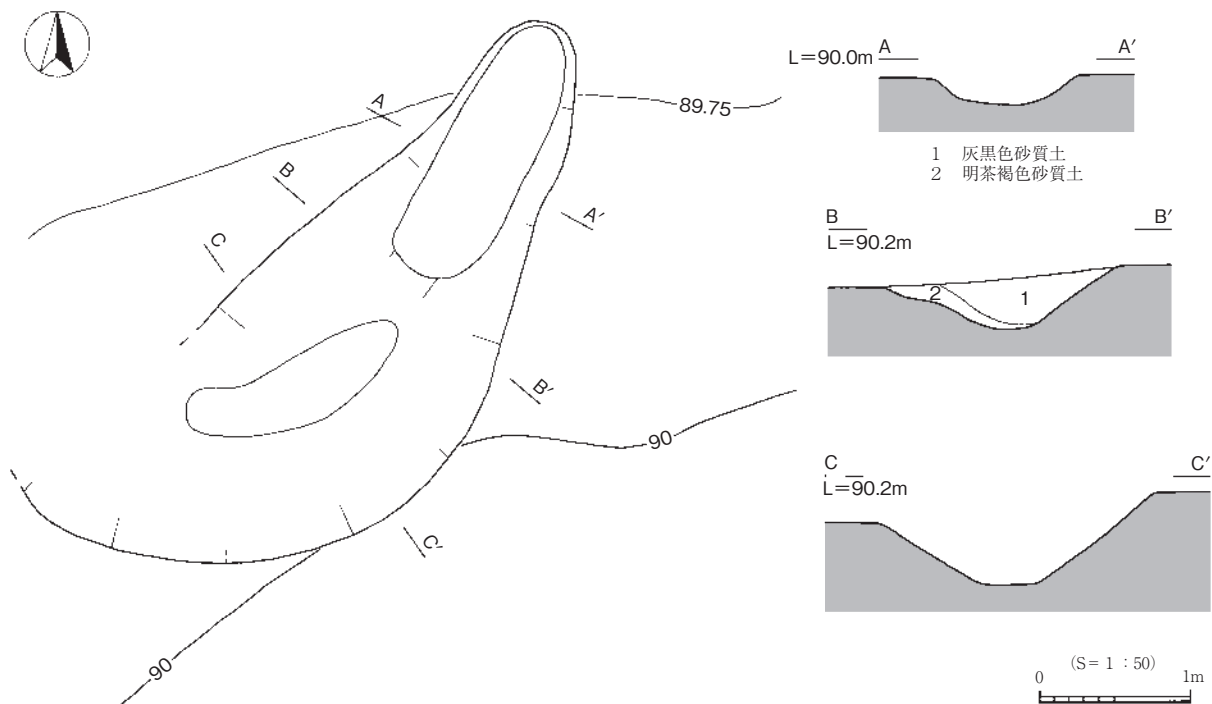
## 第5節 古墳時代の遺構

古墳時代の遺構は、丘陵部で円墳5基と石棺墓4基、石蓋土壙墓2基、土壙墓4基を確認した。伯楽塚古墳群は、調査地北側の尾根上に分布している15基の円墳群である。どの古墳も、直径10m前後、高さ1～2mほどの墳丘が残存しており、容易に存在を確認することが出来る。しかし、平成8年に実施された坂中第5遺跡の調査では、墳丘が削平された円墳（伯楽塚16号墳）が確認されているほか、昭和35年にも石棺の発見例があることから、周知の古墳以外にも墳丘が消滅した古墳が相当数分布していると考えられる。

### 伯楽塚17号墳（第16図）

伯楽塚17号墳は、B-3区の東側で確認した周溝の残欠である。墳丘の西側は道路1によって削平されており、北側は調査前の樹木伐採時に一部が削平されたものと考えられる。残存している周溝の幅は最大で1.8mあり、深さは60cmを測る。正確な規模は分からないが、直径10m程度の円墳と推測される。周溝内には、灰黒色砂質土が堆積しており、南側では一段深く掘り込まれていたが、周溝内埋葬の痕跡を見つけることは出来なかった。

この古墳の時期については、周溝内から遺物が出土しなかったため不明だが、周囲の古墳から出土した遺物から、6世紀前半代に造られたものと考えられる。



第16図 伯楽塚17号墳遺構図



### 伯楽塚18号墳（第17図）

伯楽塚17号墳の南東部に隣接する、周溝を持つ古墳である。北側と東側の周溝が消滅しているので全体の規模は不明だが、後述する18号墳1主体部を中心埋葬施設と仮定すると、一辺6mほどの方墳と推測される。調査前には墳丘の痕跡は認められなかったが、表土除去後に埋葬施設と周溝を検出した。このことから、調査前には墳丘の北東部分が流出していたものと考えられる。

南側の周溝は、検出した長さ3m、幅30～50cm、深さ15cmで、周溝内は黒色の砂質土が堆積している。西側の周溝は長さ2.6m、幅30～60cm、深さ15cmを測り、周溝のすぐ東側に18号墳2主体部が並列している。

この古墳から出土した遺物は、南側周溝内から土師器の甕（Po.1）が正立した状態で出土した。周溝内に埋葬された土器棺墓の可能性も考えられるが、周辺古墳では古墳の南東側周溝内に供献土器を置く事例が多いことから、この甕も供献土器であった可能性が高いと判断する。Po.1は、口径13.7cm、器高23cm、胴部径22cmを測る。色調は橙褐色を呈し、外面の底部下半には円周状に煤が厚く付着している。煤の付着した状況から、実際の煮炊きに使用されたものと考えられる。口縁は「く」字形を呈し、体部は球形に近い。外面はハケ調整し、内面は全面をケズリ調整している。

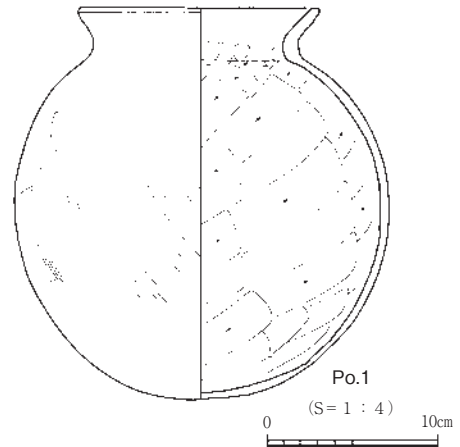
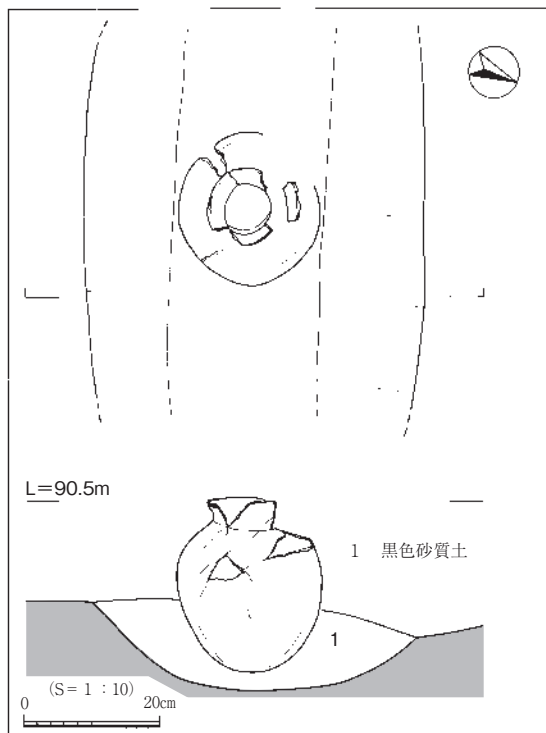
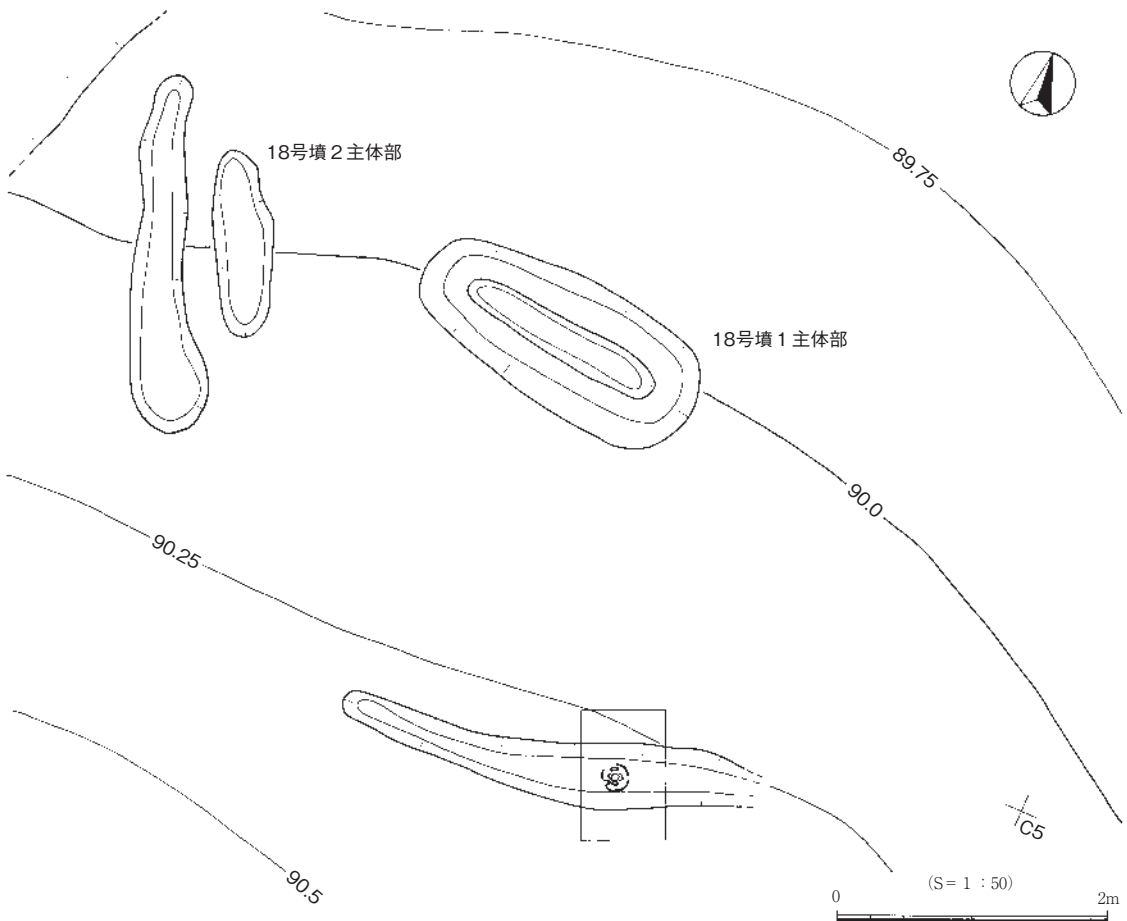
### 伯楽塚18号墳1主体部（第18図）

伯楽塚18号墳の中央部と推測される地点で確認した埋葬施設である。墓壙の掘形は東側が幅広く、西側は狭くなっている。このため、検出面では舟形状の掘形を確認することが出来た。墓壙は二段墓壙形となるが、下段の墓壙内底面には木棺痕跡が見られないことから土壙墓と考えられる。木製の蓋があったかどうかは分からない。墓壙内には副葬品は見られず、枕石も用いられていなかった。

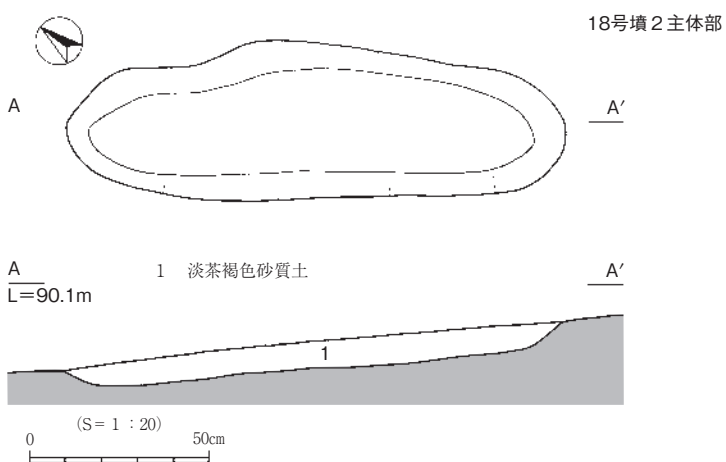
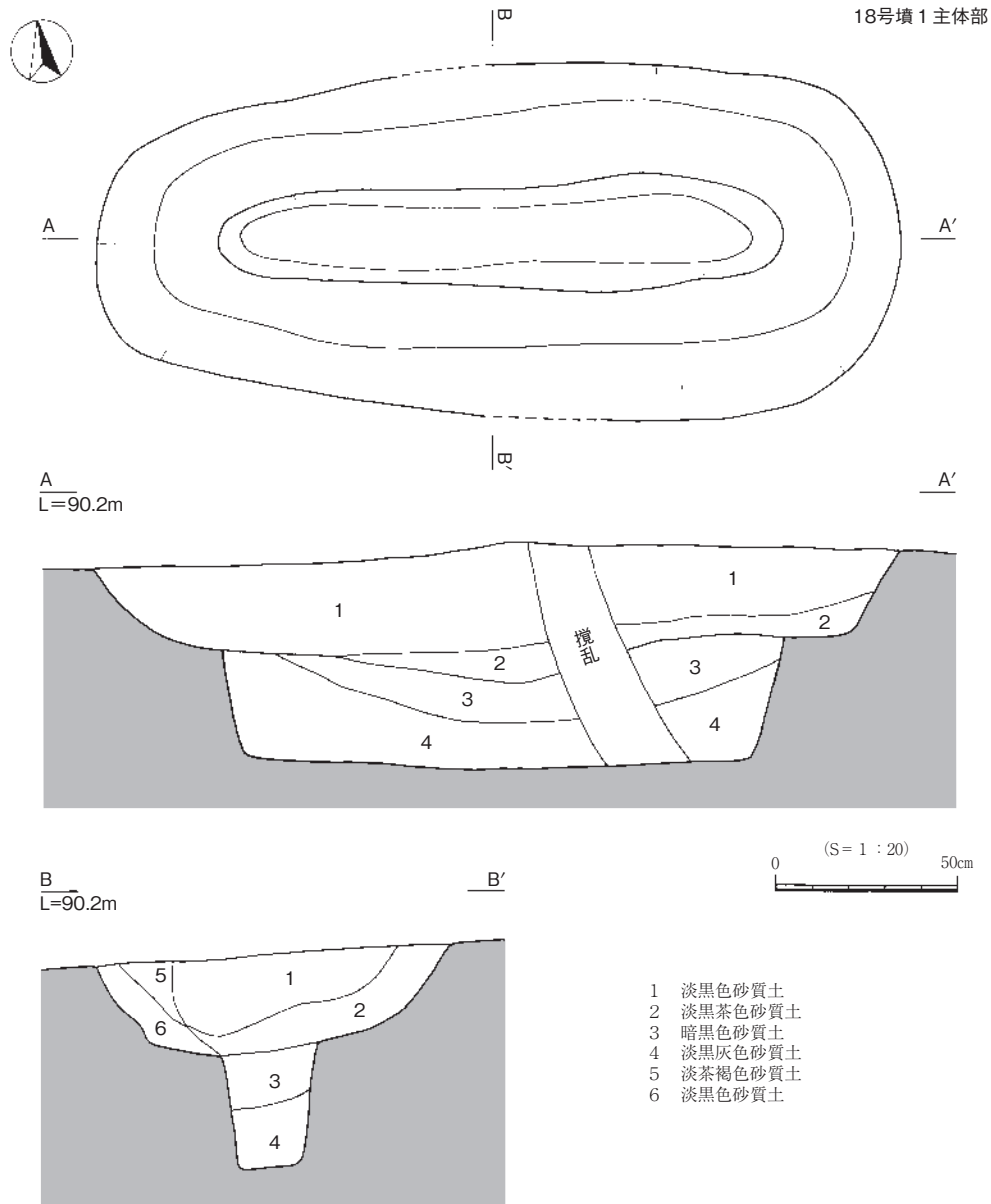
墓壙の規模は、検出面が長さ2.2m、幅60～90cmで、二段目の墓壙検出面が長さ1.55m、幅30cmである。深さは一段目が25cm、二段目の墓壙内が35cmである。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

### 伯楽塚18号墳2主体部（第18図）

伯楽塚18号墳の西側、周溝に隣接する位置で検出した、長径1.4m、短径45cm、深さ8cmの楕円形の土壙である。遺構の底面は、北側に向かって緩やかに傾斜している。18号墳の墳丘内から見つかったことから埋葬施設と推測した。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。



第17図 伯楽塚18号墳遺構・遺物図



第18図 伯楽塚18号墳1・2主体部遺構図

### 伯楽塚19号墳（第19図）

C-4区で確認した2基の埋葬施設を持つ古墳である。墳丘は調査前から失われており、地山面で周溝の一部と主体部を検出した。古墳の周溝は南東部のみ、長さ5mほどが残存しており、周溝の幅は30~60cm、深さ10cmである。恐らく、直径7~8mほどの円墳であったと推測される。埋葬施設は、周溝の北側に2基の土壙墓が並列している。

この古墳に伴う遺物は、南側周溝内の埋土中から土師器の坏身が2点出土した。Po. 2は、口径10cm、高さ5.4cmあり、口縁部は内彎する。底部は、ヘラケズリした後にナデ調整される。Po. 3は、口径12.6cm、高さ4.7cmを測り、口縁部が内彎気味に立ち上がる。底部は、ヘラ切り後に粗くナデ調整される。

### 19号墳 1 主体部（第19図）

伯楽塚19号墳の中心埋葬施設と推測される、長楕円形の土壙墓である。主体部の規模は、長さ2m、幅40cm、深さ15cmで、墓壙内には淡茶褐色の砂質土が堆積している。底面に明確な掘り込みが見られず、断面観察でも木棺の痕跡が見つけられなかったことから、伯楽塚18号墳の1主体部と同様の土壙墓と推測される。この遺構内からの出土遺物は見られなかった。

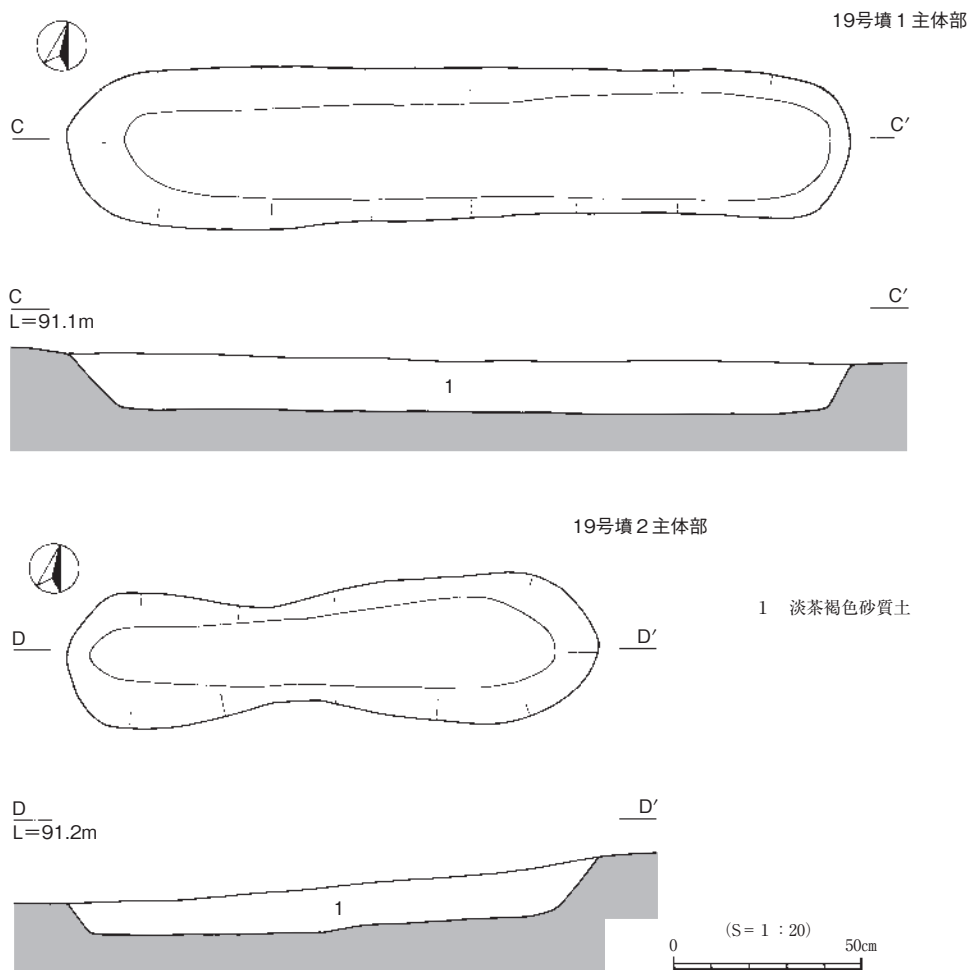
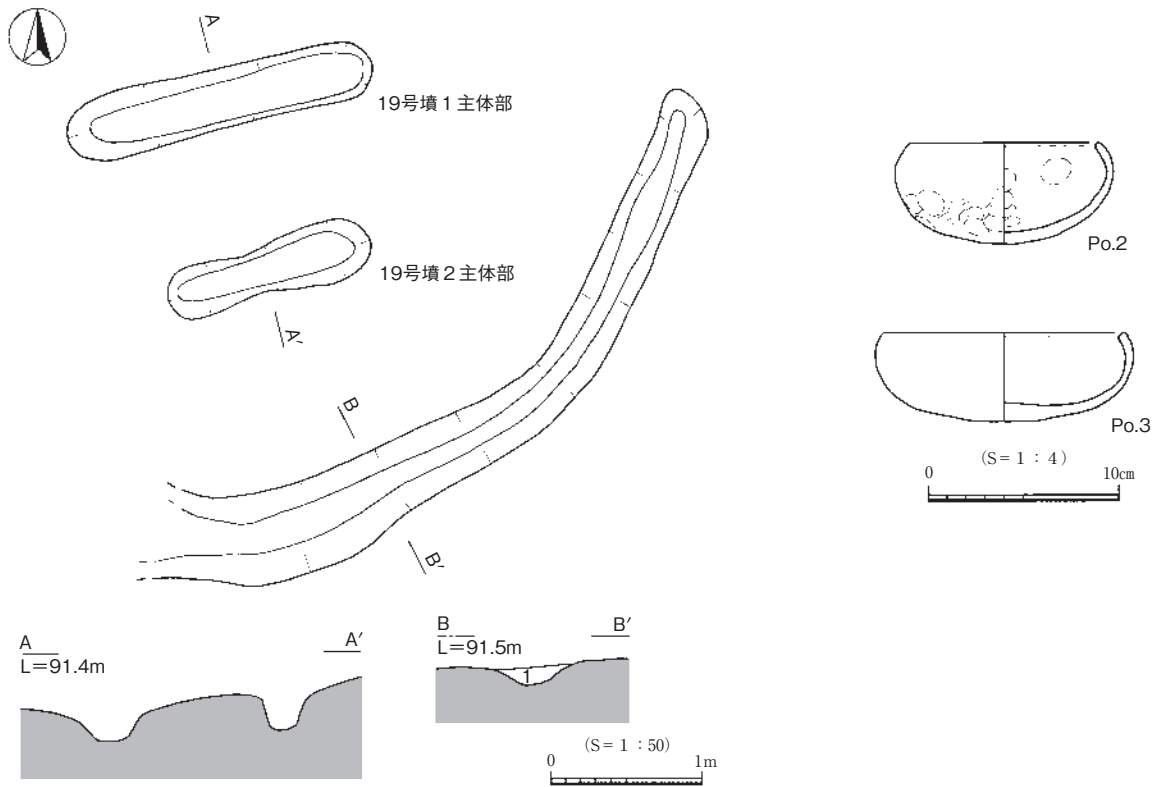
### 19号墳 2 主体部（第19図）

1主体部の南側に平行して配置された土壙墓である。主体部の規模は、長さ1.4m、幅25~40cm、深さ12cmで、墓壙内の埋土は19号墳1主体部と同様の砂質土であった。石枕は置かれていなかったが、墓壙東側の幅が広がっており、底面のレベルも東側が高くなっていることから、東頭位で埋葬された可能性が考えられる。この遺構内からの出土遺物は見られなかった。

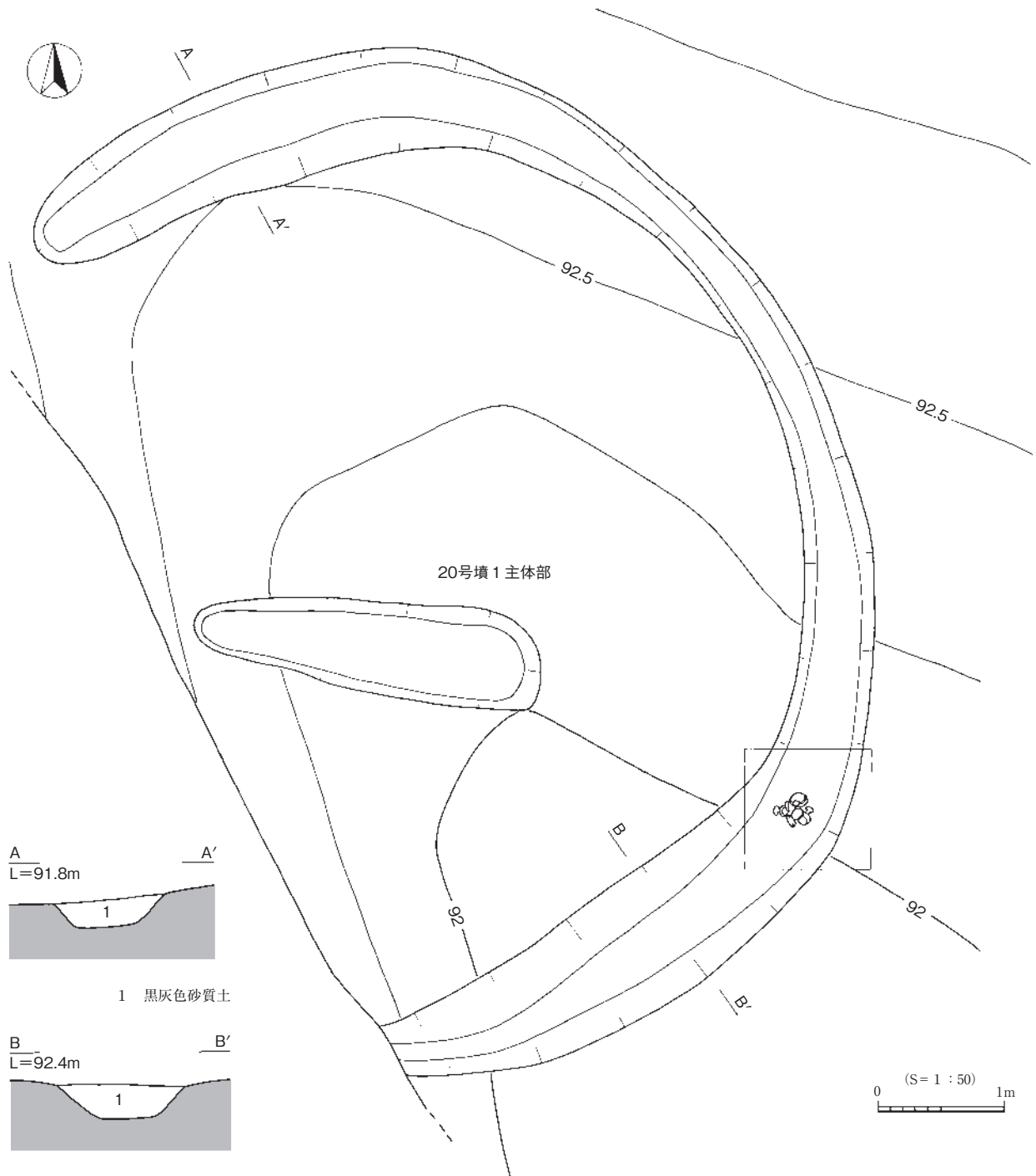
### 伯楽塚20号墳（第20図）

D-4区の東側で確認した円墳である。古墳の規模は、周溝を含めた直径が8m、周溝の幅0.4~1m、深さ30cmあり、墳丘の西側は3分1ほどが道路1によって削られている。墳丘は中心部分で20cmほど残存していたが、埋葬施設の掘形は地山面まで掘り下げた所で検出した。

出土遺物は、周溝の南東部から土師器の甕1点と高坏3点がまとまった状態で出土した。また、墳丘の埋土中から石斧の断片が1点出土している。Po. 4は土師器の甕である。口径12cm、高さ11.5cmで、口縁は「く」字形を呈し、外面はハケ、内面はケズリ調整する。Po. 5~7は土師器の高坏である。3点とも色調は橙褐色を呈し、胎土は全て精良な土を用いている。Po. 5は、口径14cm、高さ10.7cmで、脚部は内面に指押さえの痕跡が残る。Po. 6は、口径13.6cm、高さ10.8cmで、脚部の造りはPo. 5と同様である。Po. 7は、口径13.6cm、高さ10.3cmで、坏部の側面には黒斑が残る。高坏は3点とも坏部が丁寧にナデ調整されるのに対して、脚部の造作は粗く、全体に指押さえの痕跡が残る。S. 2は、自然石の一端を研磨して刃部を作る石斧である。



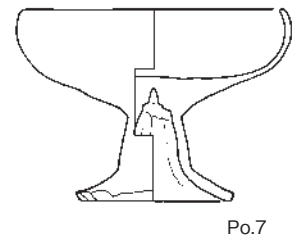
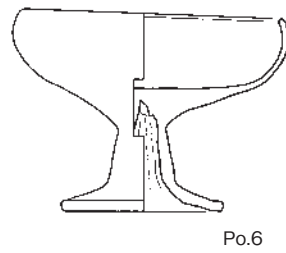
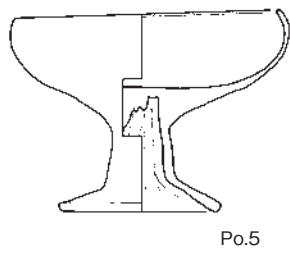
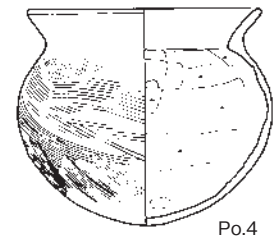
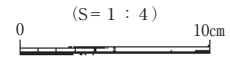
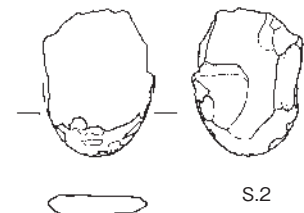
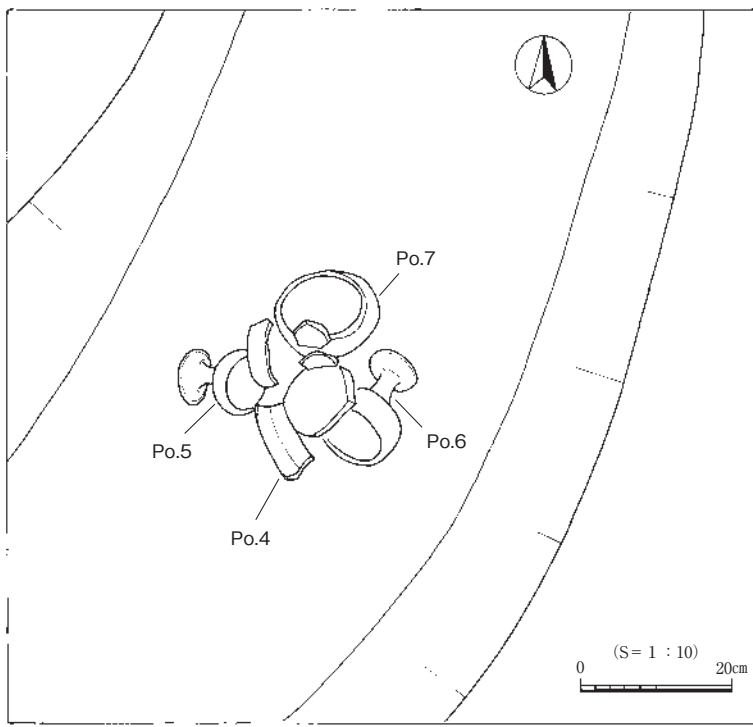
第19図 伯楽塚19号墳遺構・遺物図



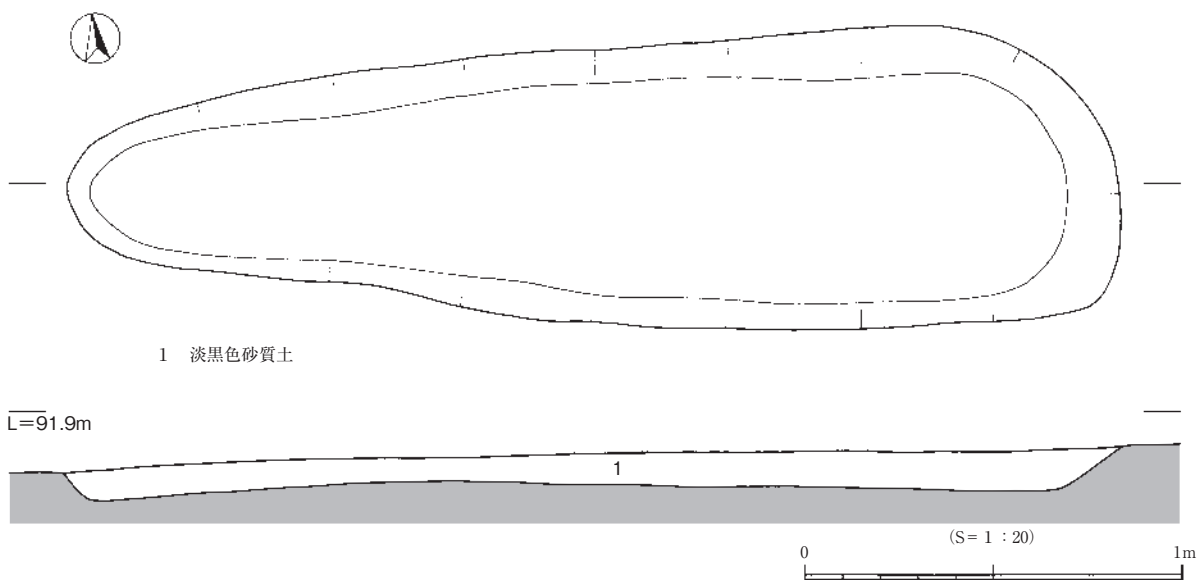
第20図 伯楽塚20号墳遺構図

### 20号墳1主体部 (第21図)

伯楽塚20号墳のほぼ中央部に位置する、長辺2.8m、幅30～80cm、深さ10cmの舟形を呈する土壙墓である。墓壙内には淡黒色砂質土が堆積していたが、副葬品や枕石などは見られなかった。墓壙の底面には明確な掘り込みが無く、断面観察でも木棺の痕跡が見つけられなかったことから、土壙墓と推測される。この遺構内から遺物は出土しなかった。



20号墳1 主体部



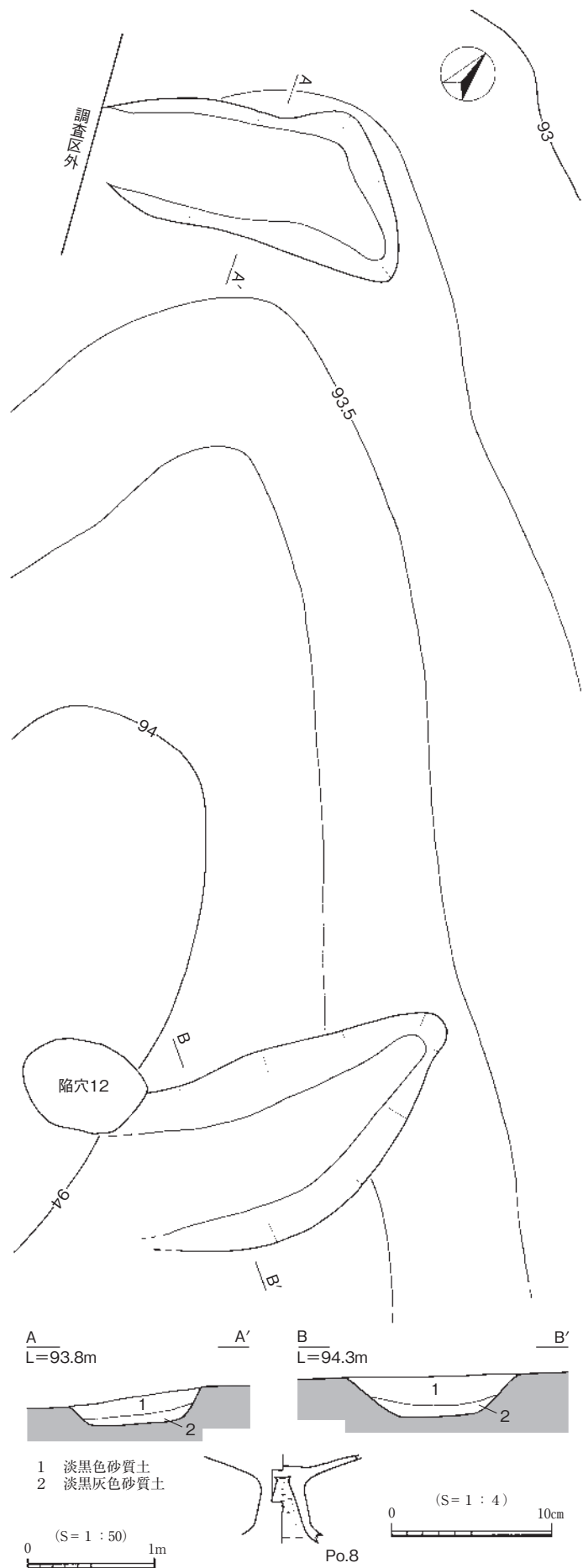
1 淡黒色砂質土

第21図 伯楽塚20号墳遺構・遺物図

伯楽塚21号墳（第22図）

F-4区で検出した古墳の周溝である。西側の周溝を交通壕によって、東側を道路1によって削平されているため、南北の周溝が遺存しているに過ぎないが、直径7～8mの円墳と推測される。南側の周溝は、幅1.2m、深さ30cmで、北側は幅80cm、深さ20cmを測る。この古墳の墳丘内からは、埋葬施設を確認することが出来なかった。

この古墳に伴う遺物は、南側の周溝内から土師器の高坏脚部（Po.8）が出土した。色調は淡い橙褐色を呈しており、胎土の特徴は伯楽塚20号墳から出土した高坏に類似している。坏部の内面は、風化しているため調整が不明だが、外面は脚部との接合面に指押さえの痕跡が読み取れる。



第22図 伯楽塚21号墳遺構・遺物図

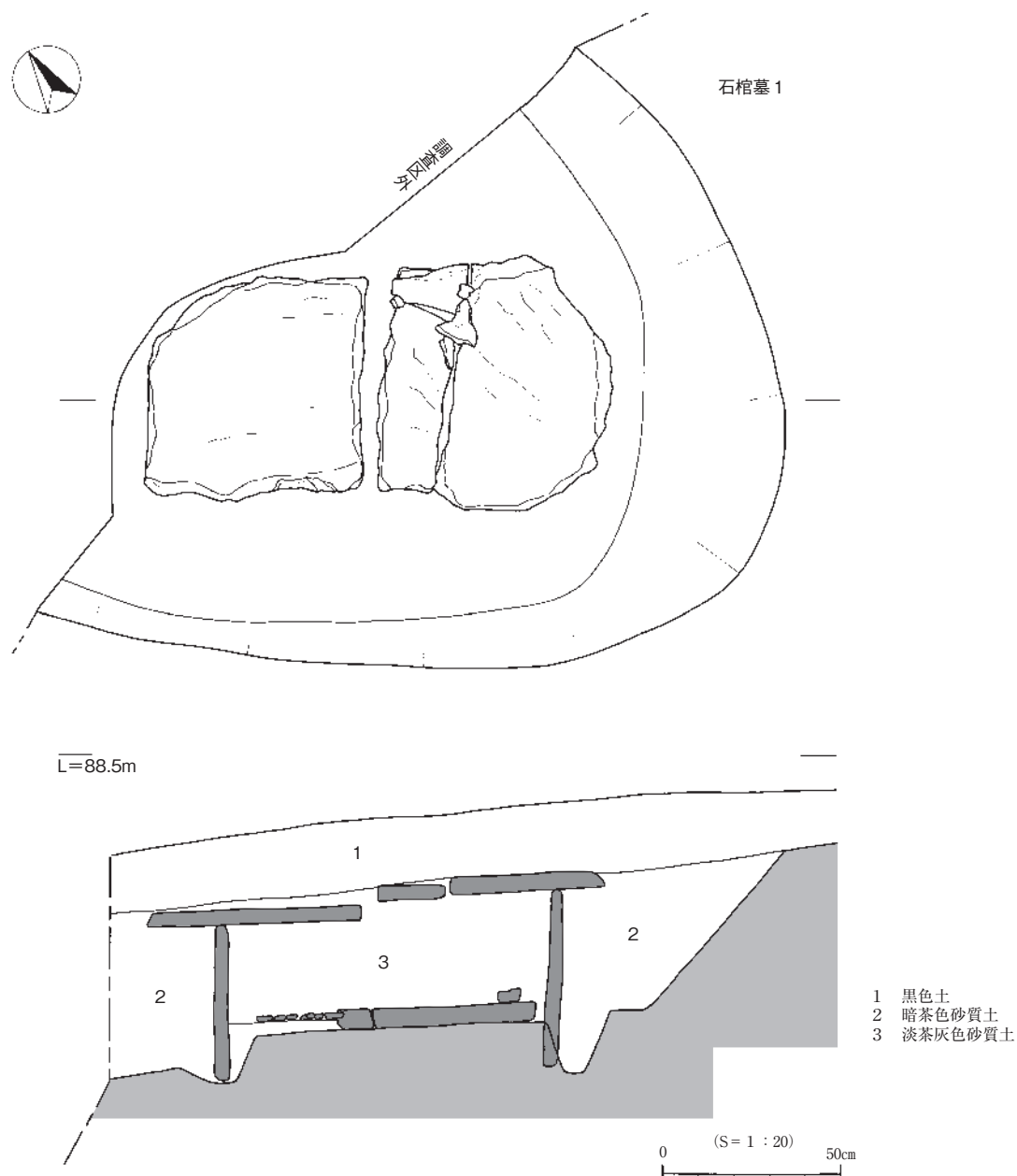


## 石棺墓 1 (第23~25図)

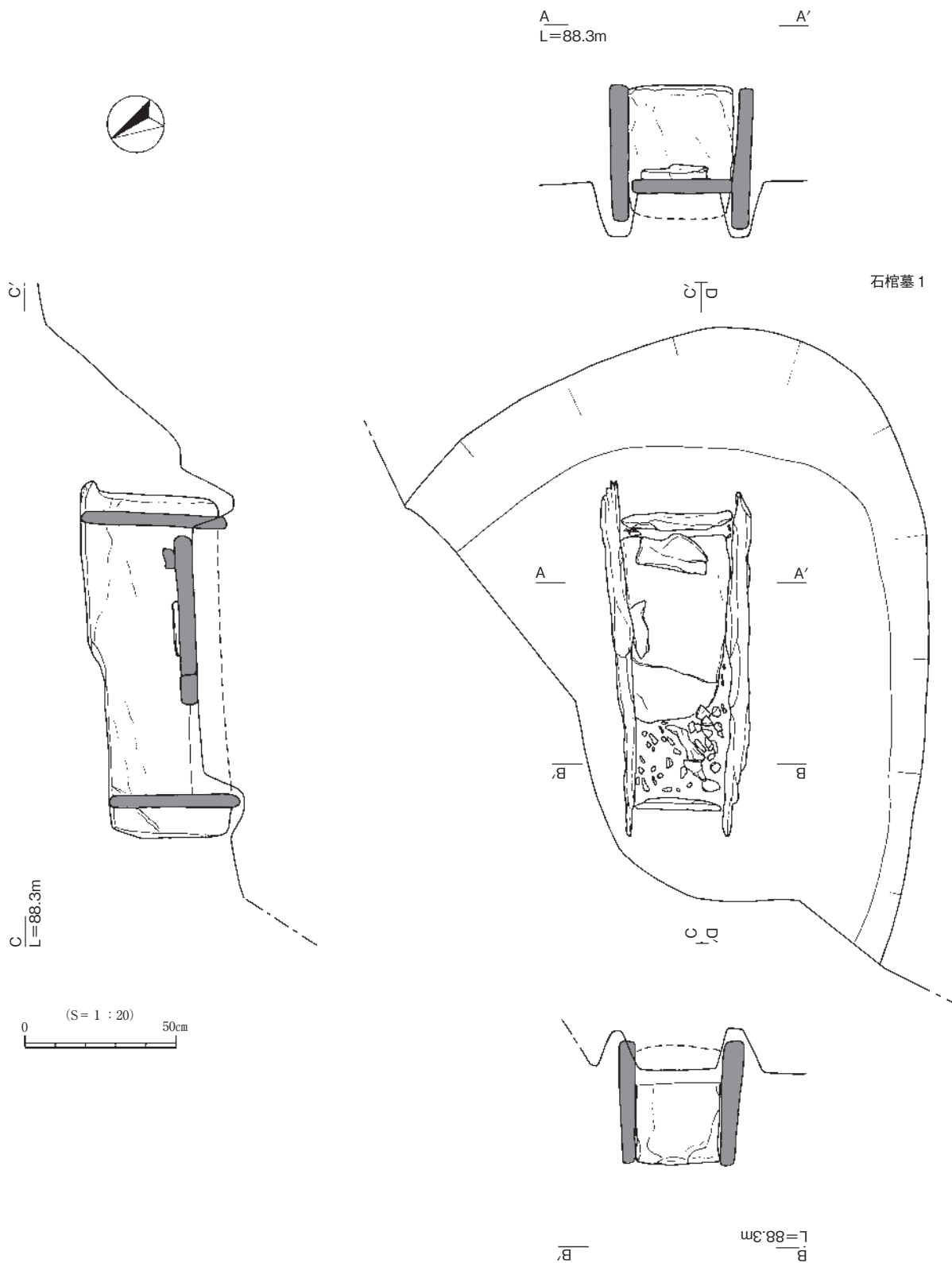
石棺墓 1 はA-2 区の南側、調査区の端部で検出した。石棺の周囲には周溝が確認できなかったことから、単独で造られた埋葬施設と考えられる。石棺の蓋石は 3 枚の平石を用いており、側板は四面とも一枚の平石を用いている。石棺の長側板の大きさは、北東側が長さ 1.2m、高さ 45cm、南西側が 1.15m、高さ 45cm で、二枚ともほぼ同じサイズの石材が用いられている。短側板は南東部が長さ 38cm、北西部が 28cm であり、南東部側の幅が広がっている。後述する枕石の存在から、頭位側の幅を広く造る意図があったものと考えられる。

石棺の床面には平石を敷き、北側の隙間には角礫を敷き詰めている。この角礫は、石棺の石材と同じ石であることから、石棺を組み立てる際に生じた石屑を用いたものか。棺内からは副葬品は見つからなかったが、南東部の端に長さ 25cm、幅 12cm、厚さ 3cm の長方形の枕石が置かれていた。

墓壙の掘形は、北側が調査区外に広がるため正確な規模は不明だが、長さ 2m、幅 1.5m 以上の楕

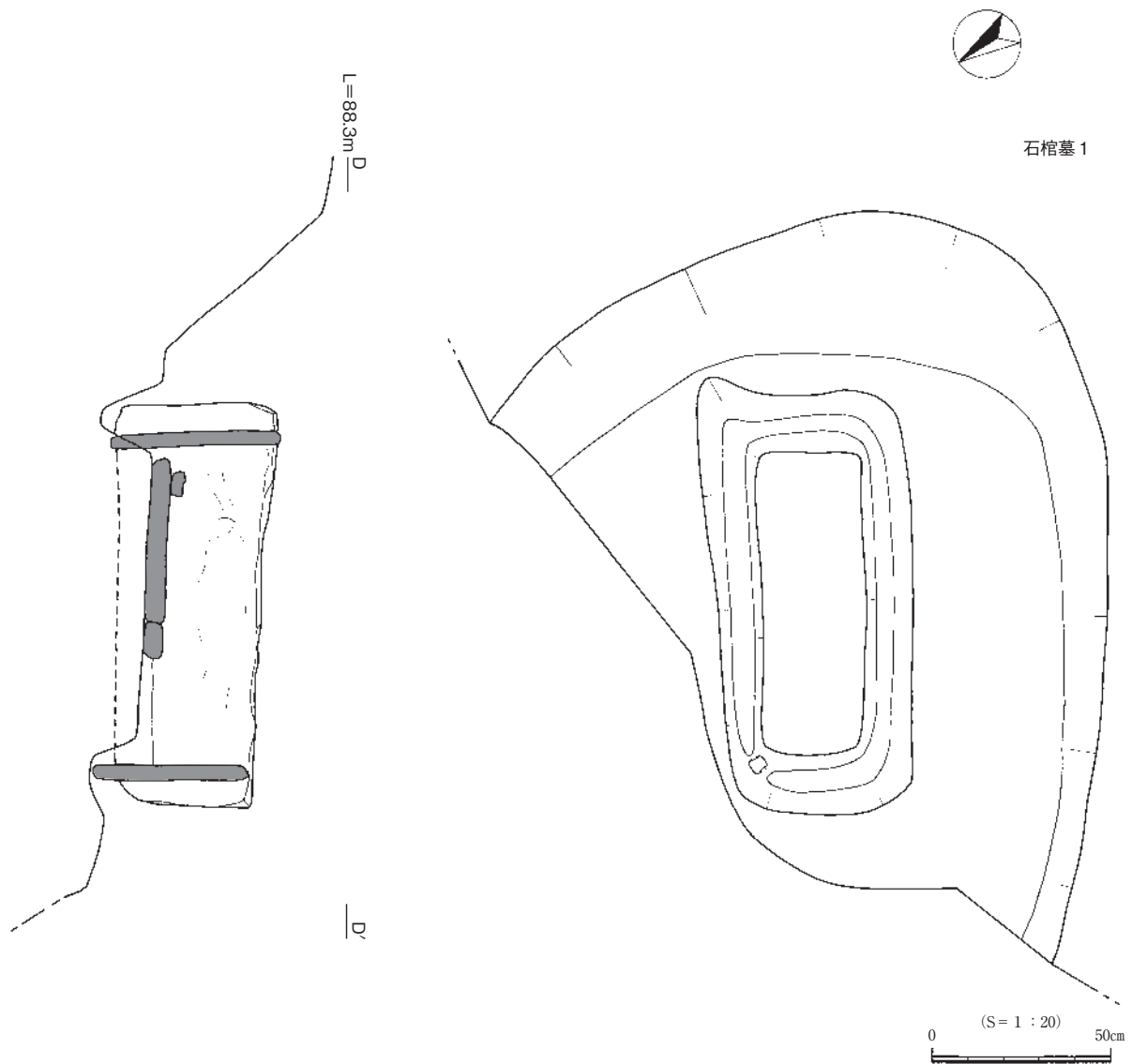


第23図 石棺墓 1 遺構図 (蓋石・断面)



第24図 石棺墓1 遺構図（平面・立面図）

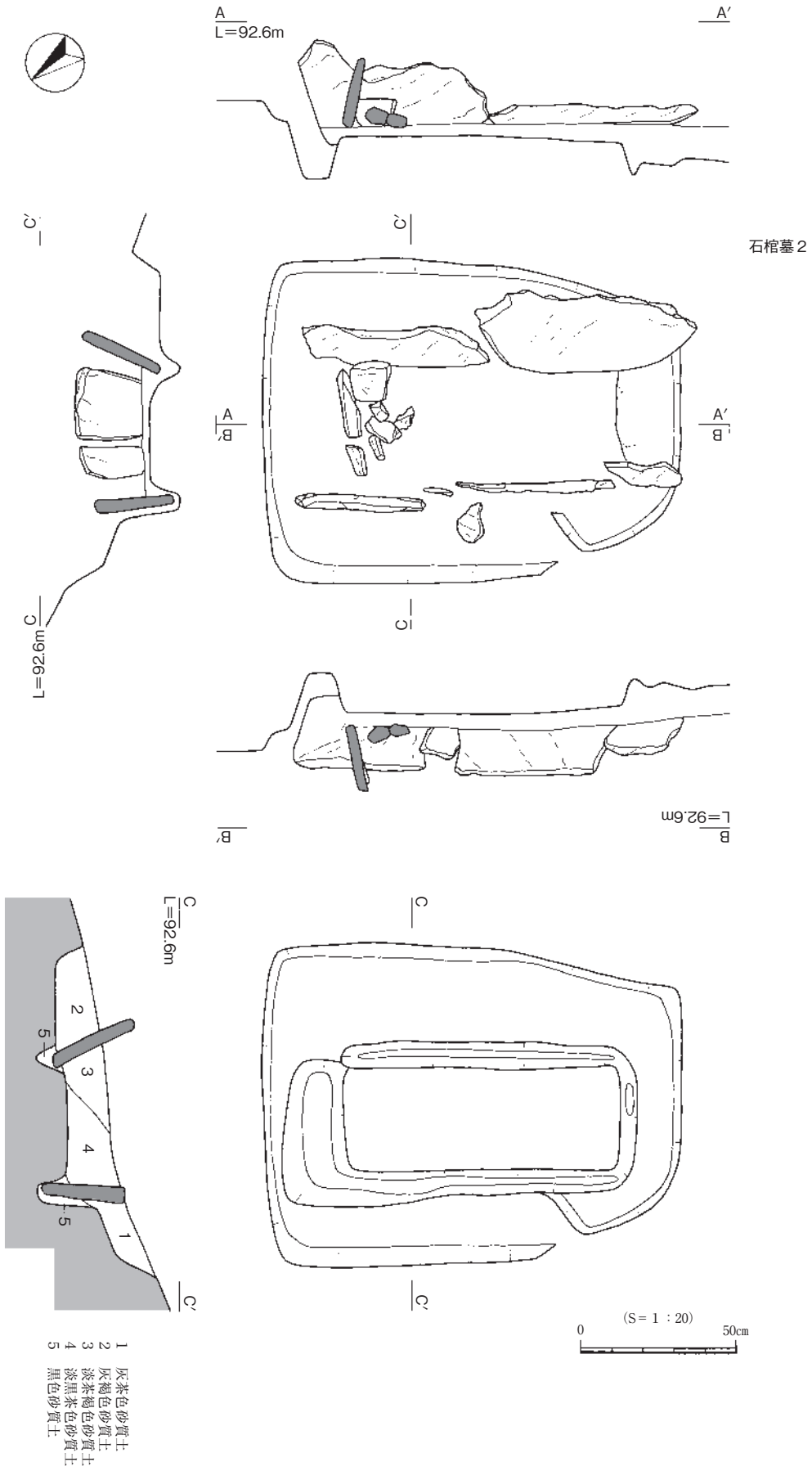
円形と考えられる。墓壙の掘形内は暗茶色の砂質土によって埋められていたが、掘形内からは石棺材の石屑や土器等の出土は見られなかった。石棺を固定するための掘り込みは、深さ30~40cmの「口」字形に掘られている。この石棺については、調査終了後に米子市埋蔵文化財センターの敷地内に移築復元している（写真図版31-3）。



第25図 石棺墓1 遺構図（掘形・立面図）

### 石棺墓2（第26図）

石棺墓2は、E-5区の北東部、道路1の掘形上面で検出した。この石棺墓は、道路1によって南側が削り取られており、検出した時には蓋石が無く、南東部の長側板が外側に向かって倒れている状態であった。石棺材が動かされているため正確な規模は分からないが、石棺材の掘形から、長さ1m前後、幅40cmと推測される。石棺の高さについては、石棺材が打ち割られているため分からないが20～30cm程度と考えられる。棺内からの出土遺物は見られなかったが、北東部に石棺材に立てかけられた枕石があり、その西側には礫が散乱しているが、石棺が露出した際に動かされた可能性があるため、当初からこのような形状の枕であったかどうかは分からない。



第26図 石棺墓2遺構図

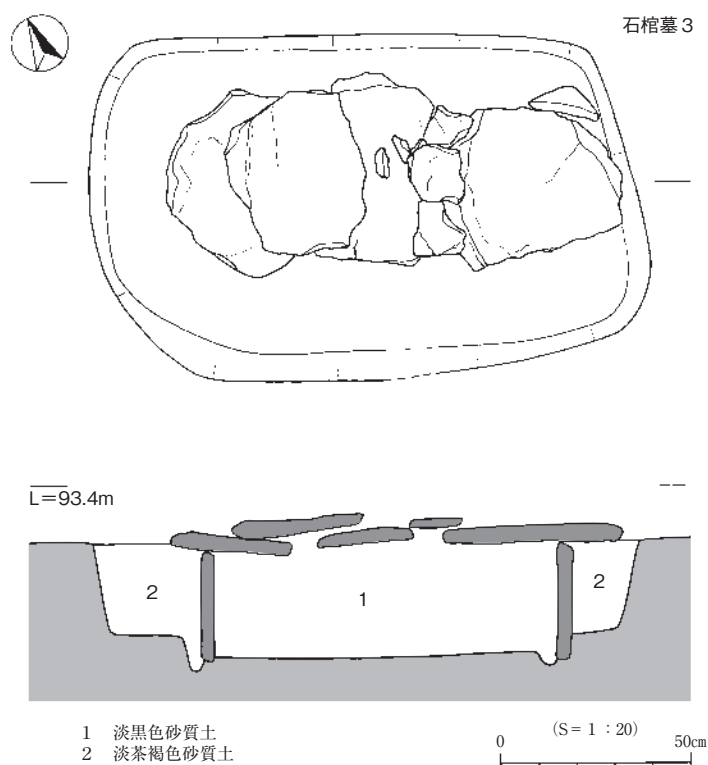
### 石棺墓3 (第27・28図)

石棺墓3は、E-5区の南東部で検出した。蓋石は、三枚の平石を用いており、合わせ目の上面に更に平石を被せて閉塞している。石棺の長側板は北側が3石、南側も3石だが、短側板との接合が甘く、平行四辺形状を呈しているが、意識的に「H」型の石棺を造っていると考えられる。石棺の埋土は淡黒色砂質土で、石棺の底面はほぼ水平に整えられており、所々に小礫が散在するが、副葬品や枕石などは見られなかった。石棺の掘形は、長さ1.4m、幅90cm、深さ25cmで、掘形の埋土は淡茶褐色の砂質土である。石棺を固定するための掘り込みは、深さ20cm程の「口」字形に掘られている。墓壙掘形内からの遺物の出土は見られなかった。

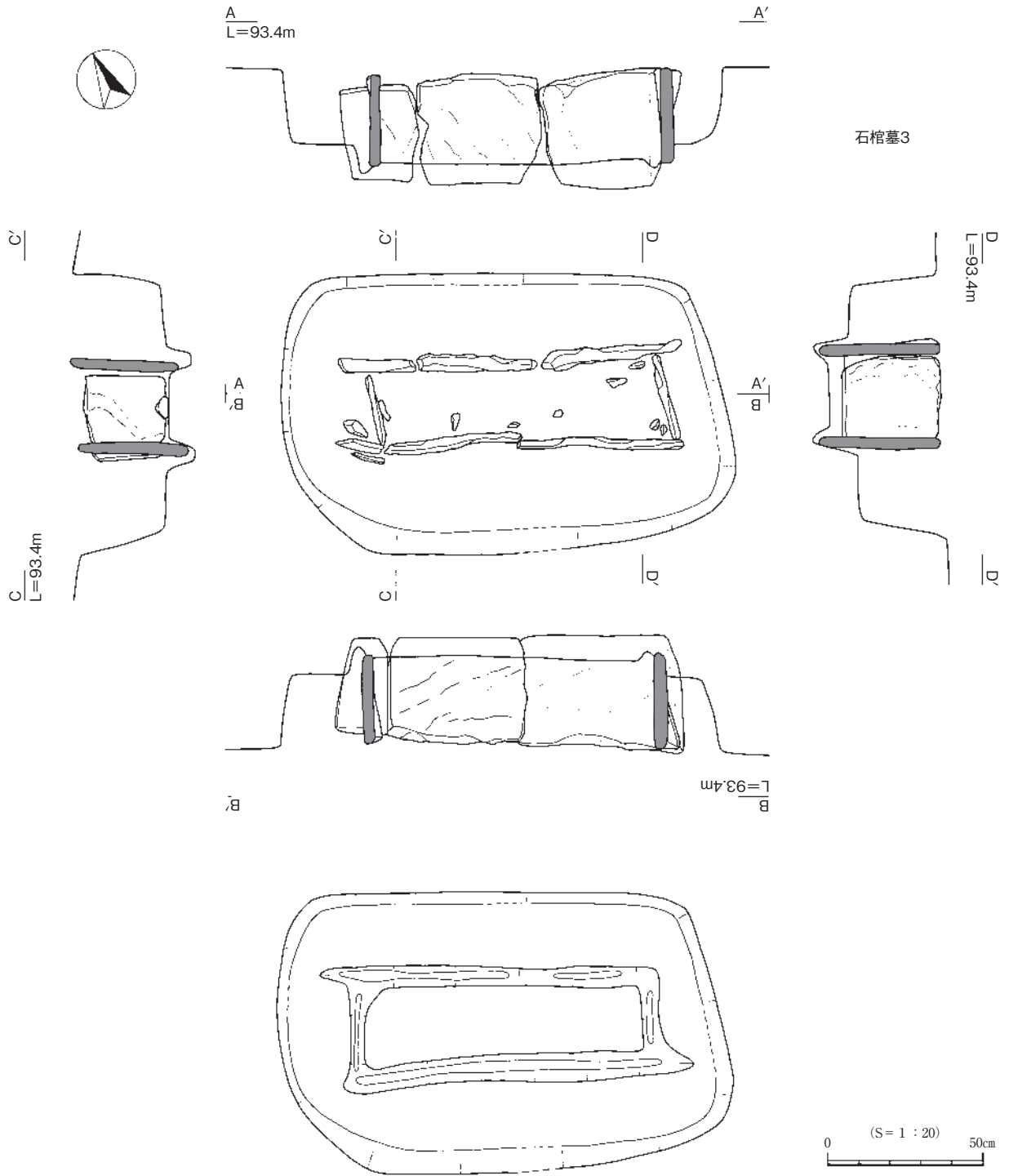
### 石棺墓4 (第29図)

石棺墓4は、F-5区の北側で検出した。この石棺墓は表土掘削前から側板の上面が地表面に露出しており、その時点ですでに蓋石が失われ、側板が外側に向けて傾いている状態であった。

石棺の構造は、長側板に3枚の平石を用い、短側板は1枚の平石で組み立てられた、「H」型の構造と考えられる。石棺の規模は、内法が長さ80cm、幅25～35cmで、南側の間隔がやや広がっている。石棺内の高さは20cm程度と推測される。墓壙の掘形は、長さ1.25m、幅80cmで、底面には「口」字状に溝が掘られているが、石棺の寸法よりも一回り大きく掘られている。

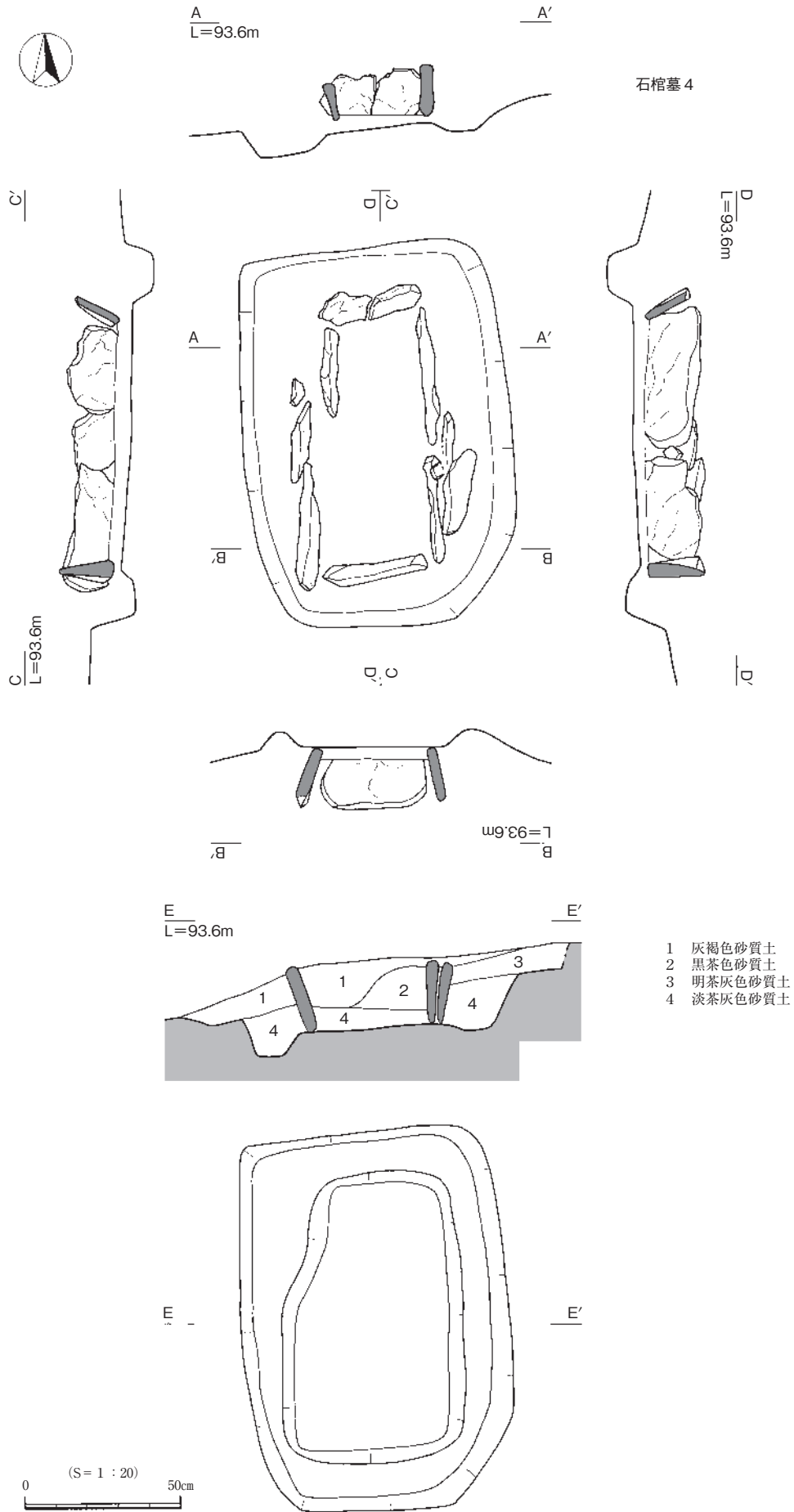


第27図 石棺墓3遺構図 (蓋石・断面図)



石棺墓3

第28図 石棺墓3遺構図(掘形・立面図)



第29図 石棺墓4遺構図

### 石蓋土壙墓 1 (第30図)

F-5区の東部で検出した石蓋土壙墓である。蓋石は、三枚の平石を置き、石の接合面の上に小さな平石を置くことで合わせ目を塞いでいるが、目張り用の粘土等是用いられていなかった。土壙内は、長さ1.2m、幅35～45cm、深さ30cmで、堆積土は上下2層に分かれている。頭部と推測される場所に三角形の平石が置かれていることから、枕石と推測される。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

### 石蓋土壙墓 2 (第31図)

C-4区の北東部で検出した石蓋土壙墓である。この埋葬施設は、調査前から蓋石の一部が露出した状態であった。蓋石は、墓壙上面に長さ70cm、幅35cm、厚さ5cmの平石を置き、さらにその上面に4個の角礫を並べて蓋石の押さえとしている。墓壙の掘形は、蓋石のレベルまでは搦鉢状を呈し、埋葬部は真っすぐに掘り込まれている。墓壙内は、しまりのない淡黒色砂質土が堆積している状態であったことから、雨水などで土砂が溜まったものと考えられる。埋葬部の規模が、長さ70cm、幅30cm、深さ25cmと小型であることから、子供用の埋葬施設と考えられる。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

### 土壙墓 1 (第32図)

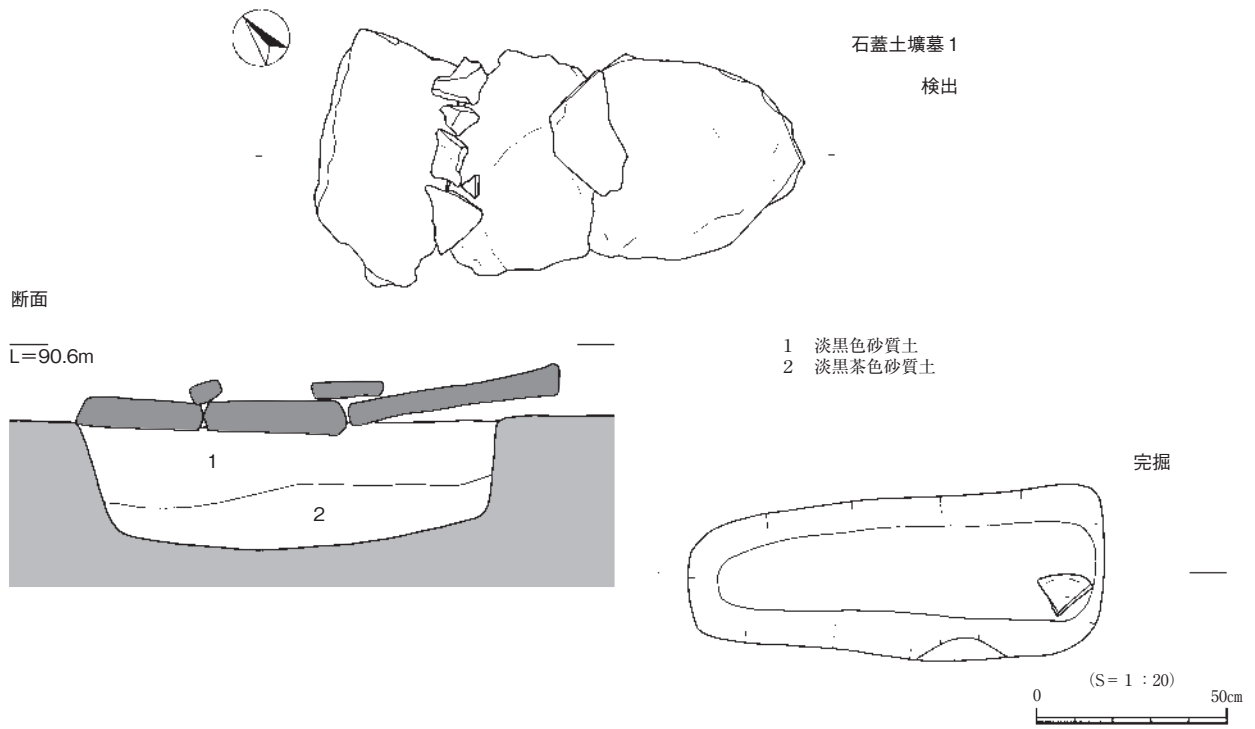
C-5区の南側で検出した土壙墓である。墓壙の規模は、長さ2.2m、幅75cm、深さ30cmを測る。墓壙内の底面は平坦に整えられており、土層観察でも木棺の痕跡は認められなかった。墓壙内の埋土は、上層に黒褐色砂質土、下層に茶褐色砂質土が堆積しているが、墓壙底面には、副葬品や枕石は見られなかった。

この遺構の北西部には性格不明の柱穴状の掘り込みが見られるが、縦方向にセクションを設定していなかったため、この土壙墓との前後関係については不明である。

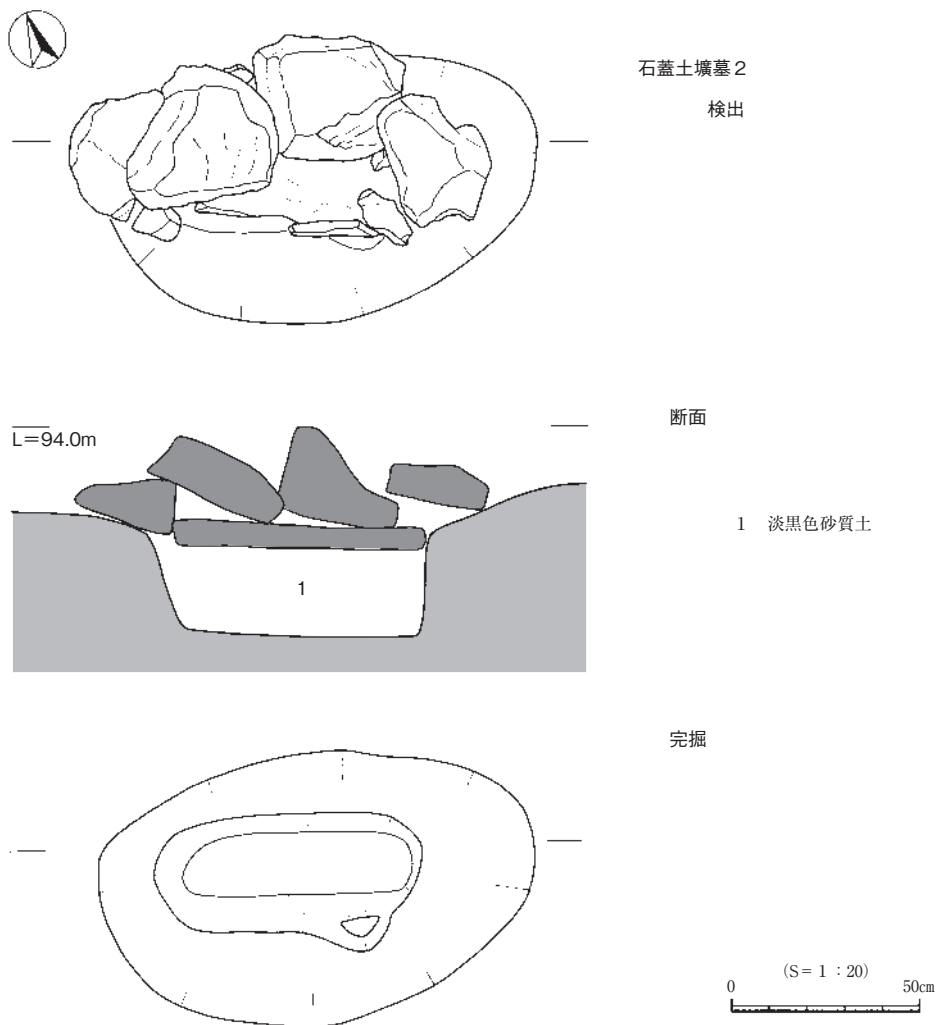
### 土壙墓 2 (第32図)

土壙墓 1の北東部に隣接する舟形の土壙である。土壙の規模は、長さ1.1m、幅20～40cm、深さ15cmを測る。土壙の南側には、長さ15cm程の角礫が置かれているが、底面からは遊離した状態のため、枕石とは断定できなかった。規模が小さいことから、子供用の埋葬施設と推測される。この遺構内からは遺物は出土しなかった。

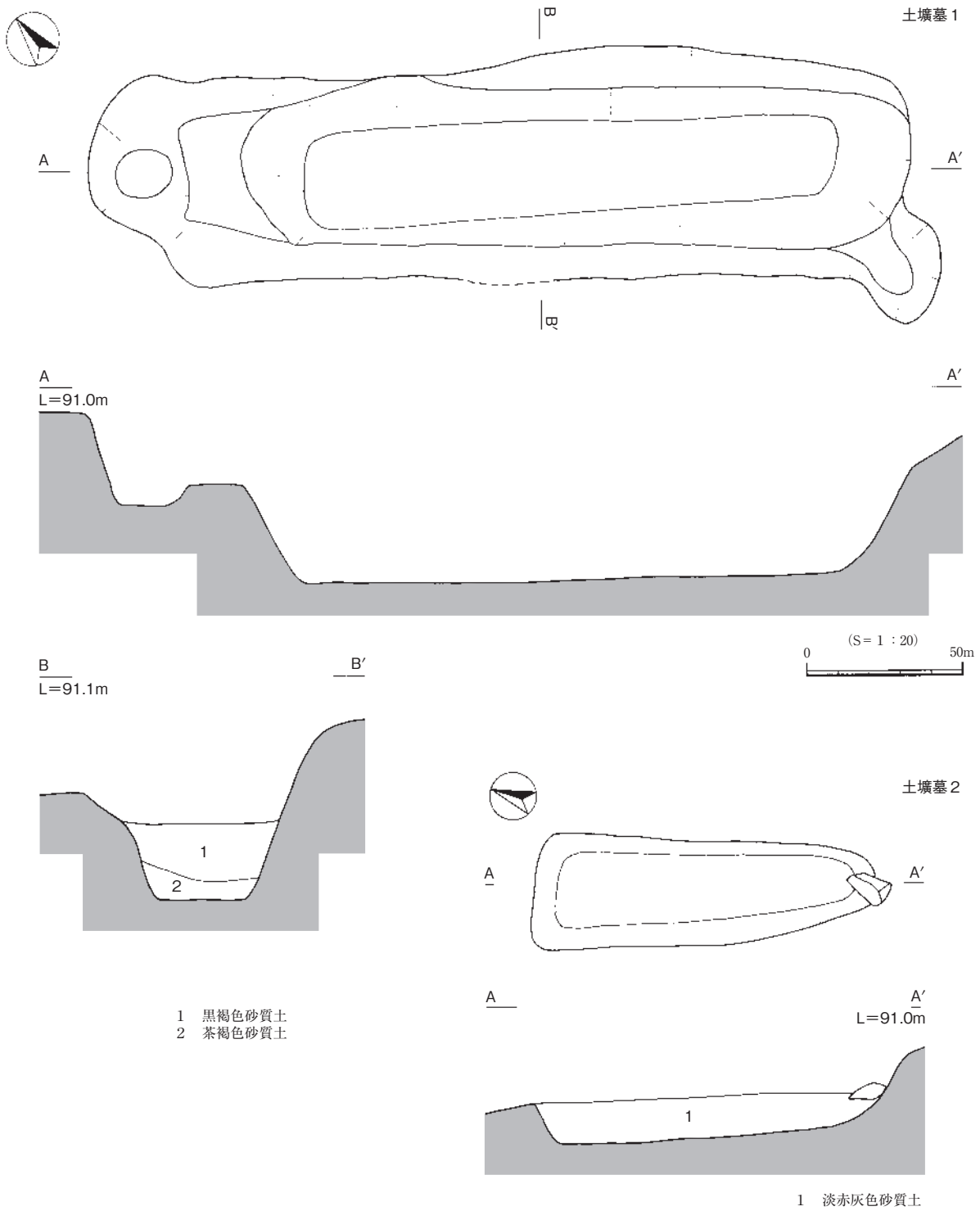




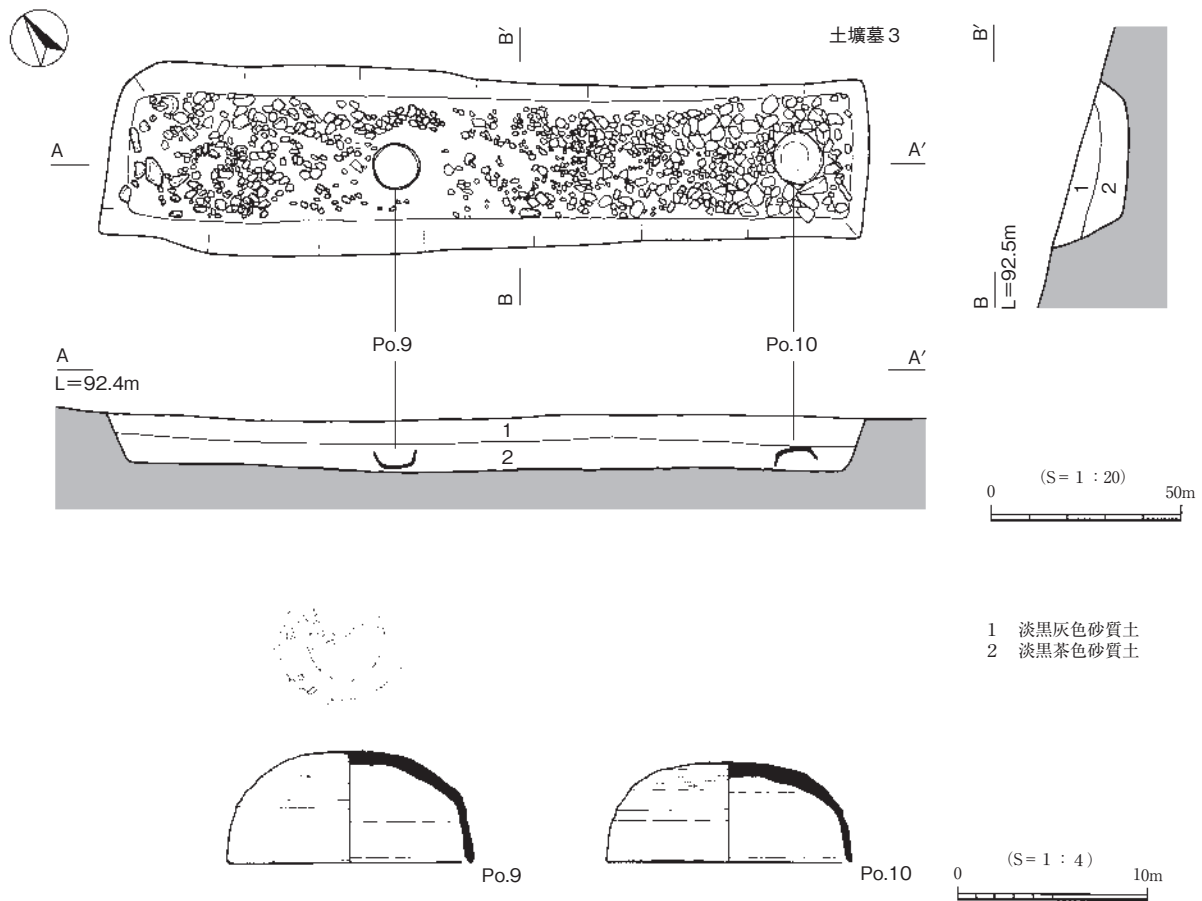
第30図 石蓋土墳墓 1 遺構図



第31図 石蓋土墳墓 2 遺構図



第32図 土墳墓 1・2 遺構図



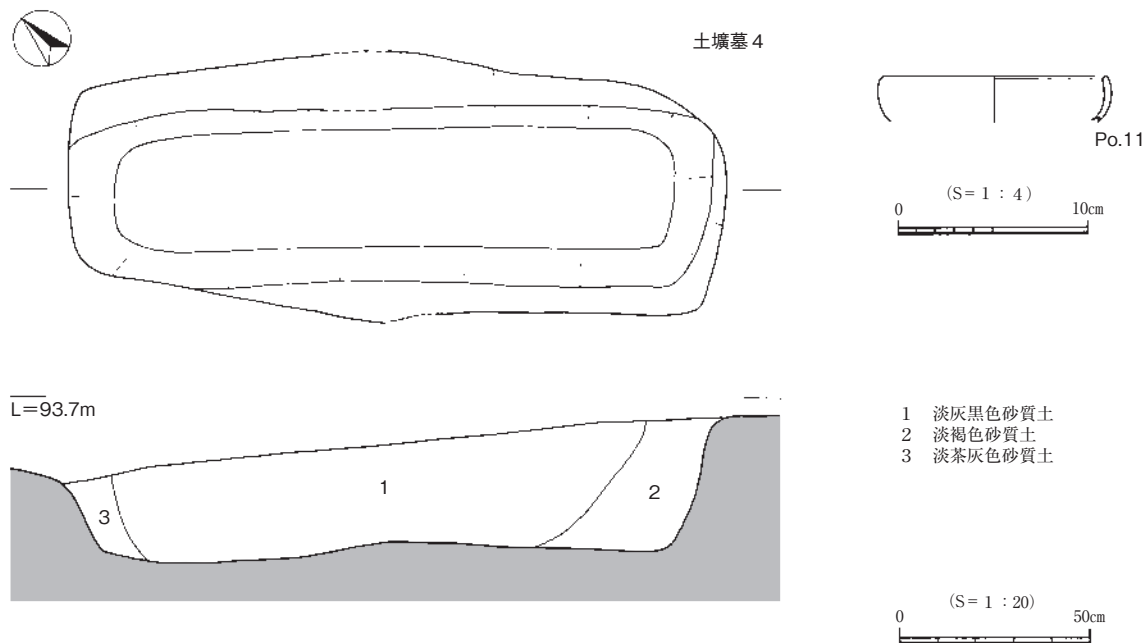
第33図 土壙墓3遺構・遺物図

### 土壙墓3 (第33図)

F-5区の北東部で検出した土壙墓である。検出面の規模は長さ2m、幅50cm、深さ15cmで、底面には直径1cmから5cm程度の円礫が敷き詰められていた。礫が墓壙の掘形の範囲一杯にまで敷き詰められていることから、木棺墓の可能性は低いと考えられる。

出土遺物は、須恵器の坏蓋2点が礫の直上面から出土した。Po.9は口縁を上に向けた状態で出土しているが、Po.10は口縁部を下に向けて置かれており、枕として使用された可能性もある。Po.9は、口径12.9cm、高さ6cmの須恵器坏蓋である。焼成はやや不良で、色調が灰色を呈している。天井部には回転ヘラケズリを施し、「×」状のヘラ記号が描かれる。Po.10は、口径12.9cm、高さ5.3cmあり、天井部は回転ヘラケズリされる。焼成は良好で、天井部の上面には焼成時の重ね焼きの痕跡が残る。

この土壙墓の時期は、出土した遺物から6世紀前半から中頃にかけてのものと考えられる。



第34図 土壙墓 4 遺構・遺物図

#### 土壙墓 4 (第34図)

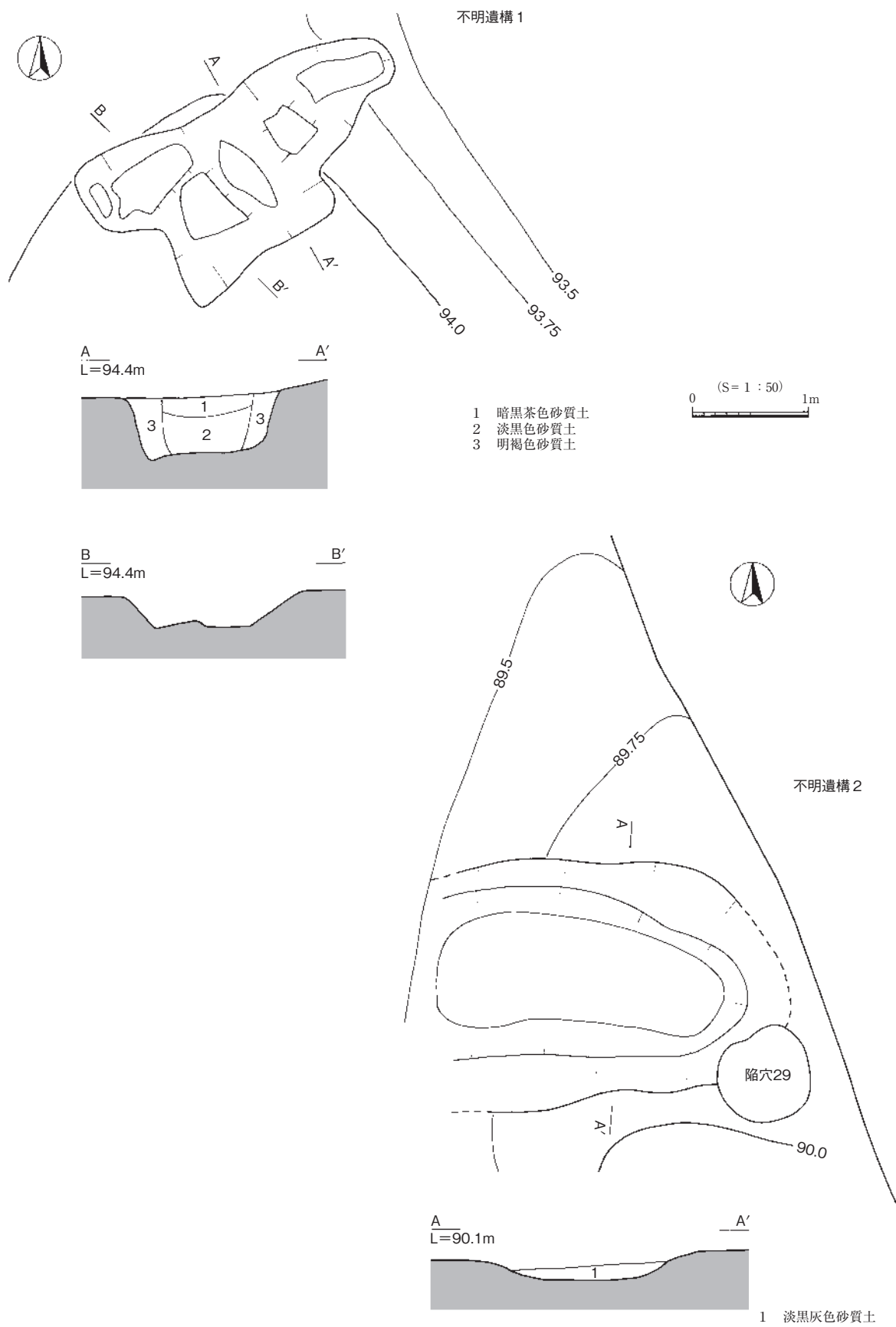
F-5 区の東側で確認した、長さ1.75m、幅70cm、深さ35cmの土壙墓である。遺物は、埋土中から土師器坏身の小破片が1点だけ出土している。Po. 11は復元口径が11.6cmと推測される、口縁端部が内彎する坏身の口縁部片である。

#### 不明遺構 1 (第35図)

不明遺構 1 は、F-6 区の南西部で検出した溝状の遺構である。当初は古墳の周溝と考えていたが、遺構の底面に不自然な段差があることから、古墳周溝の可能性は低いと考えた。遺構の規模は、長さ3m、幅1.3m、深さ30~50cmである。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

#### 不明遺構 2 (第35図)

不明遺構 2 は、交通壕の西側で検出した溝状の遺構である。検出した長さ3.3m、幅2.1m、深さ20cmを測るが、遺構内からは出土遺物は見られなかった。古墳周溝の可能性もあるが、残存状況が悪く、断定する根拠に欠けるため不明遺構とした。



第35図 不明遺構 1・2 遺構図

## 第6節 奈良時代以降の遺構

奈良時代以降の遺構は、丘陵の中央部を南北方向に貫く道路状の遺構を3条確認した。道路以外の遺構がほとんど見られなかったことから、調査地内では奈良時代以降に地形改変を伴うような大規模な土地利用がなされていなかったと考えられる。

### 道路1（第36～38図）

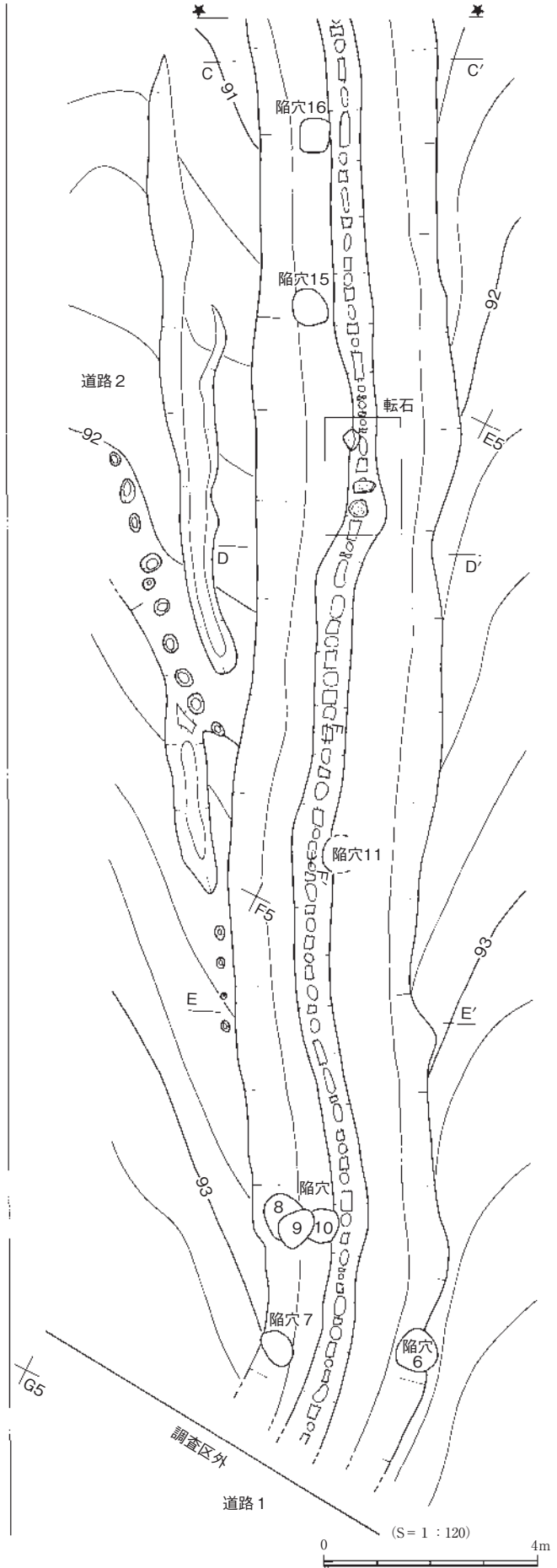
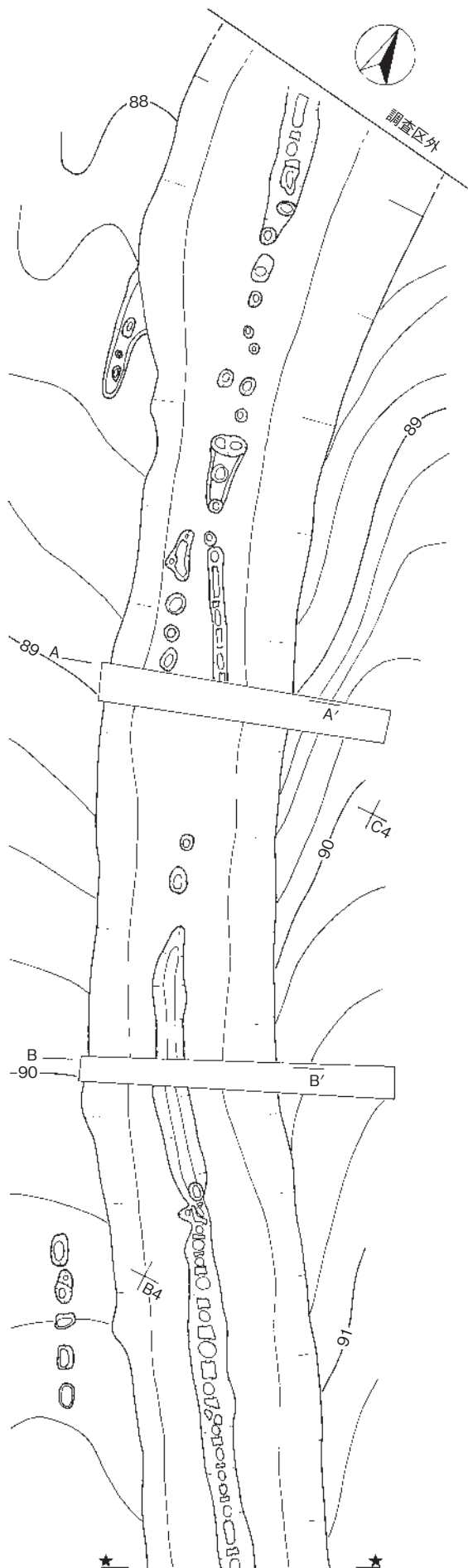
検出した長さ56m、幅3.2～5mの断面「U」字形の溝状に掘られた遺構である。溝の深さは東西で異なるが、西側の最も深いところで60cm程度である。この遺構は二段構造で、溝の底面中央部には幅50cmの溝が掘られており、底面には凹凸状の穴が連続して掘られている。穴の深さは一定していないが、20～30cm程度のものが中心である。中央の凹凸溝の埋土は、上層が黒色土と灰色砂が互層状に堆積しており、移植鋤では容易に掘れないほど硬くしまった土であった。こうした状況から、二段目の溝の上面が道路の硬化面と考えられる。中央凹凸溝の下層は小礫を多く含む淡青灰色の砂質土で、含水率が高いため全体にグライ化しており、上層と比べると土は柔らかい。このため、この遺構は溝状に掘られた道路に水が溜まらないよう、道路の中央部に掘られた暗渠式の排水溝と考えられる。通常の道路であれば水が溜まらないように道路敷を高く設定するが、丘陵を登る際の勾配を緩やかにするためにわざと溝状に掘り込んだためにこのような構造になったと考えられる。そのため、道路1の東側は伯楽塚古墳群の丘陵であるが、調査前には崖上のくぼ地となっており、道路1の建設によって古墳の墳丘を含めた、かなりの範囲が削られていることが分かった。

この遺構から出土した遺物は、須恵器、土師器、石器である。Po. 12は、須恵器大甕の口縁部片である。凹線で区画された中に細かく波状紋が施されている。Po. 13は口縁部が短く屈曲し、底部を糸切する須恵器の坏身である。Po. 14は口縁端部外面を強くナデ調整する土師器の坏身で、古墳時代のものと考えられる。Po. 15は内外面を赤彩する土師器の坏身で、奈良時代のものと考えられる。Po. 16は、口縁部が「く」字形に屈曲する土師器の甕で、外面には左上がりのタタキの痕跡が残る。S. 3は円礫の両端部を打ち欠く、花崗岩製の石錘である。S. 4は黒曜石製の鏃である。

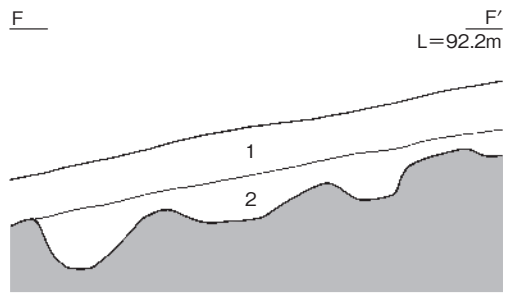
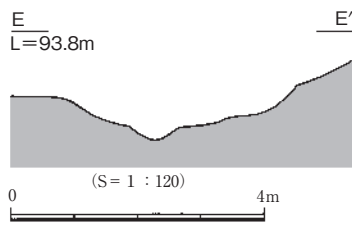
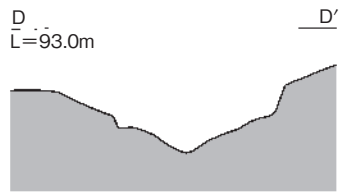
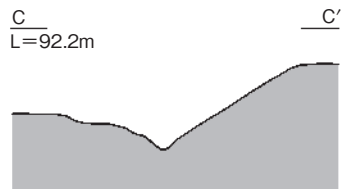
E-4区の北東部では道路上に平石が3点ほど散乱していたが、これは道路1が埋没する過程で石棺墓2から滑り落ちた石棺材の一部と考えられる。また、この石棺墓2付近の斜面から須恵器(Po. 13)の破片が出土している。特に根拠は無いが、道路1を造る際に偶然露出した石棺に対して、お供えをした跡のような印象を受けた。この遺構が埋没した年代は、Po. 13から奈良時代前半以降と考えられる。

### 道路2（第36図）

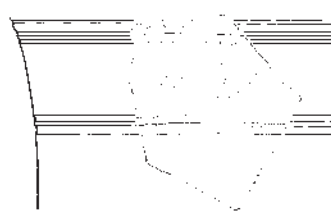
北側の一部が途切れているが、道路1の西側に平行するように造られた道路状の遺構である。道路1のような明確な掘形は無いが、溝状の遺構と凹凸状の遺構が不連続に掘り込まれていることから道路遺構と推測される。南側では道路1によって切られているように見えることから、道路1に先行する遺構であった可能性が考えられる。また、F-5杭の北西部で道が二又に分かれるようであり、この道路2でも造り替えなどが行われている可能性がある。この遺構に伴う出土遺物は見られなかった。



第36図 道路1・2遺構図



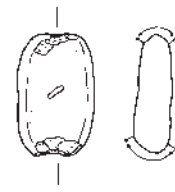
- 1 灰褐色砂質土 (ラミナ)
- 2 灰色砂 (粗砂)



Po.12



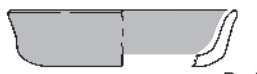
Po.13



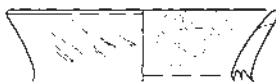
S.3



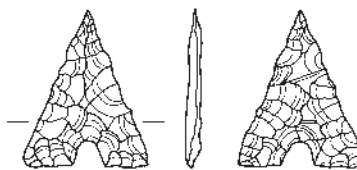
Po.14



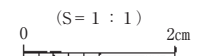
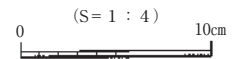
Po.15



Po.16



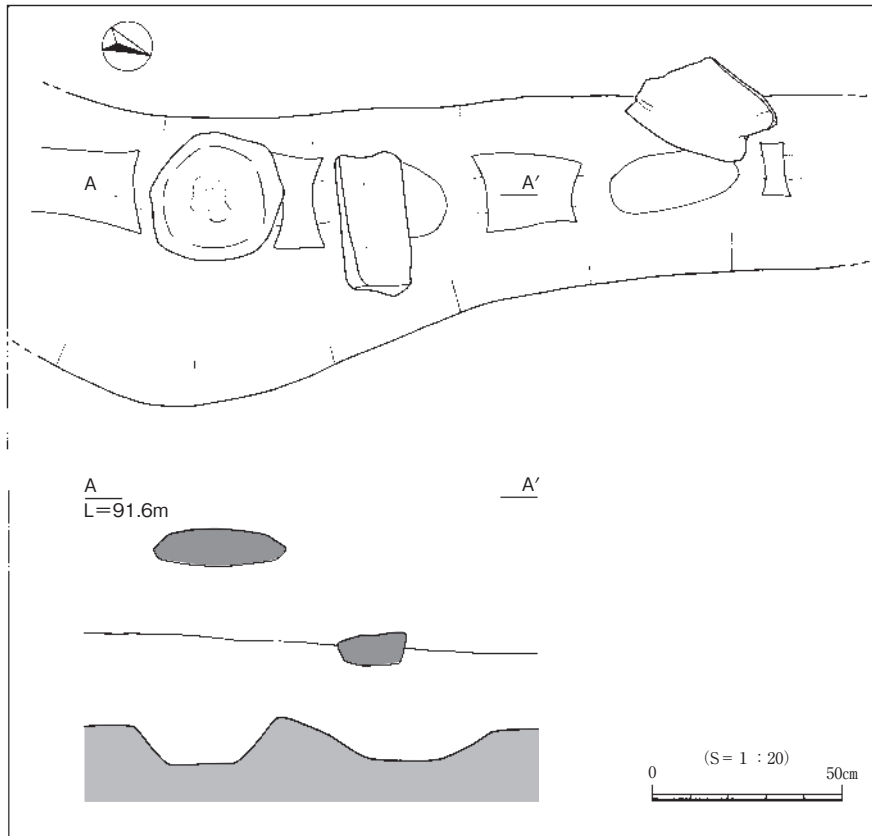
S.4



(S.4のみ)

第37図 道路1断面・遺物図

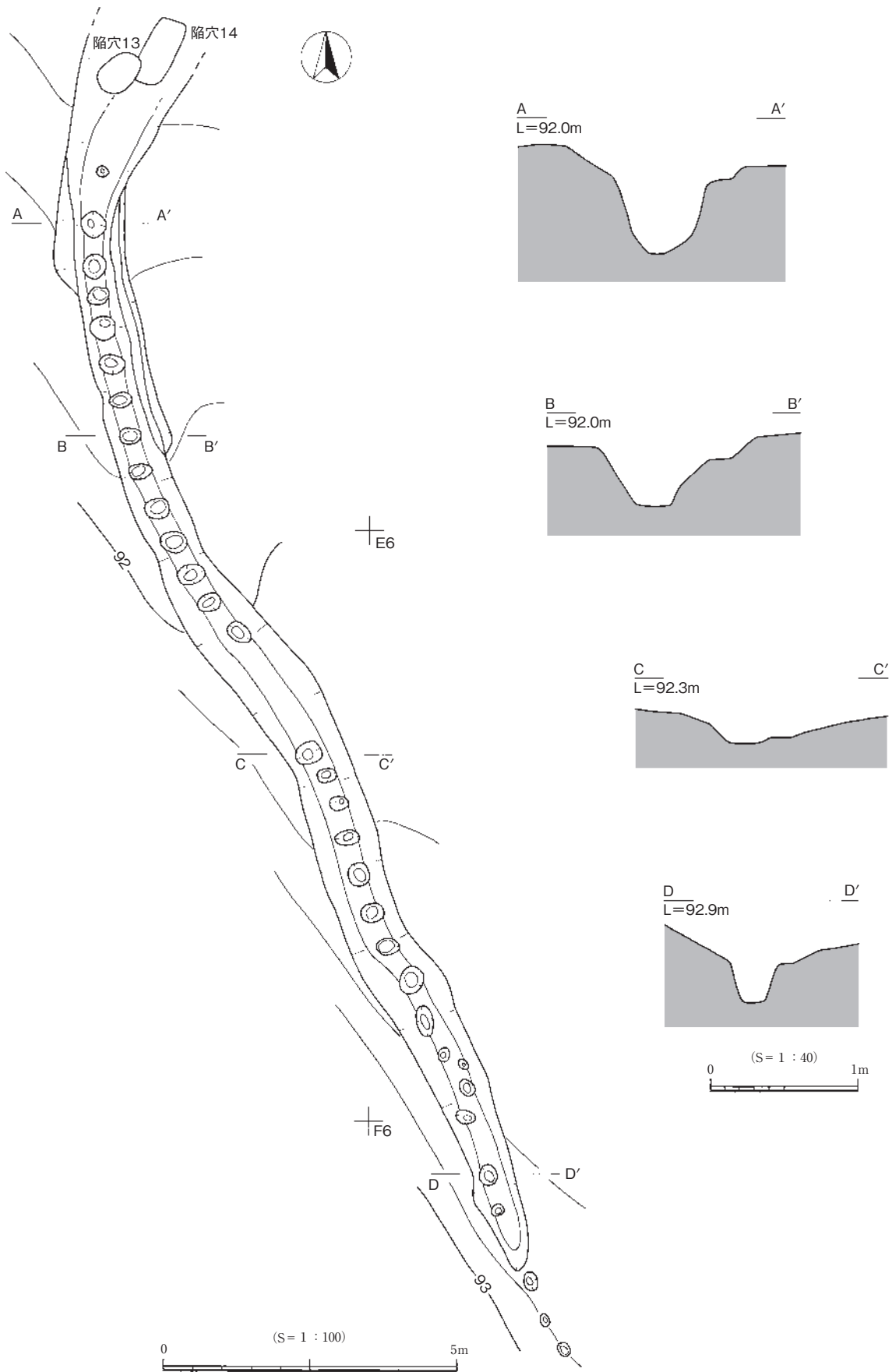




第38図 道路1 転石出土図

### 道路3 (第39図)

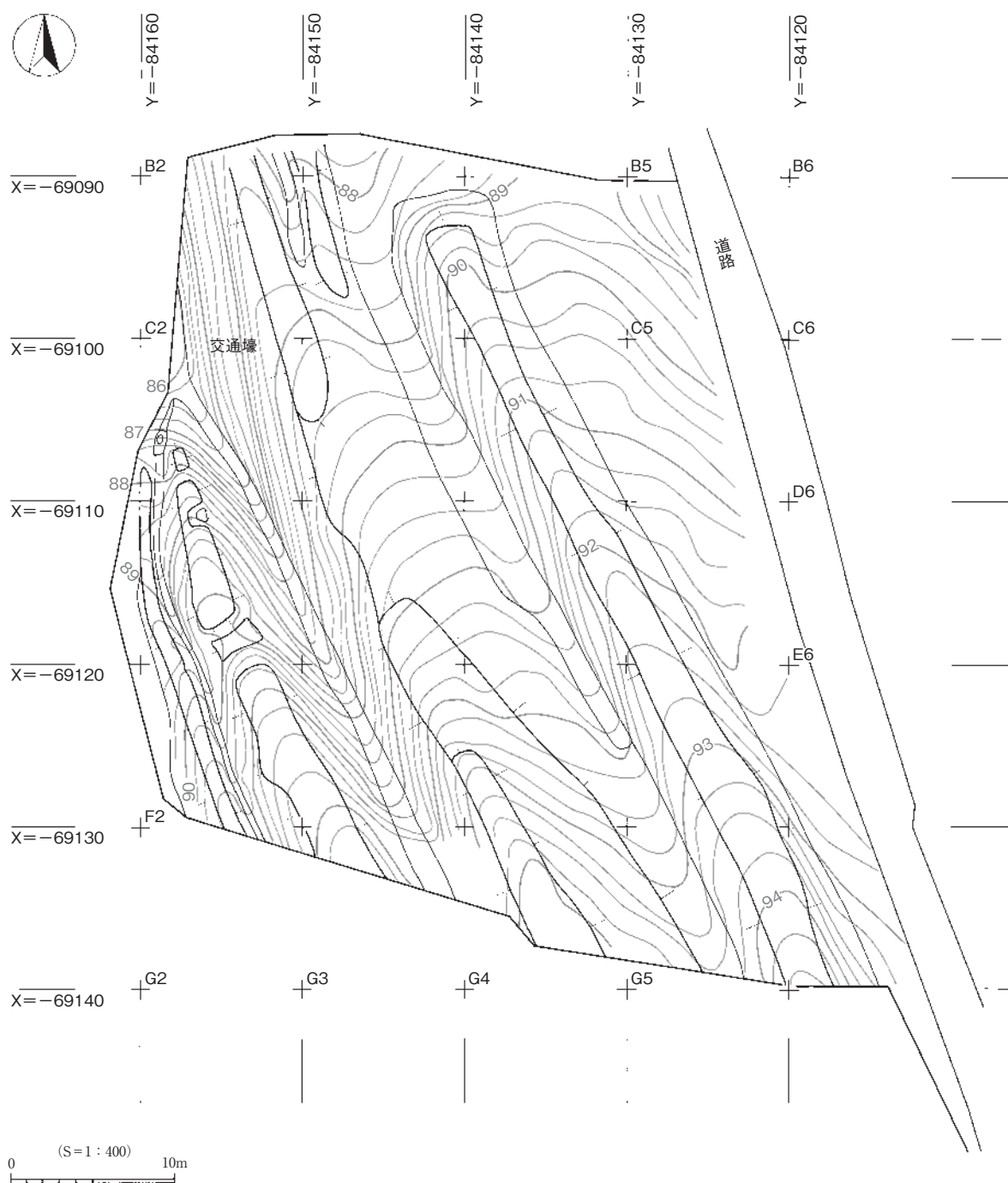
D-5区からF-7区にかけて、蛇行しながら丘陵を登る道路である。検出した長さは23m、幅0.5～1.5m、深さ20cmで、底面には凹凸状の穴が連続して約30基掘られている。凹凸部の深さは、溝の底面から10～50cm程度掘り込まれているが、規則性については分からなかった。また、埋土については、黒褐色の砂質土が堆積していたが、道路1で見られたような硬化面が観察出来なかったことから、硬化面が削平されている可能性もある。この道路が造られた時期については、遺構内から遺物が出土しなかったため不明であるが、伯楽塚古墳群が形成された後に造られたものと考えられる。



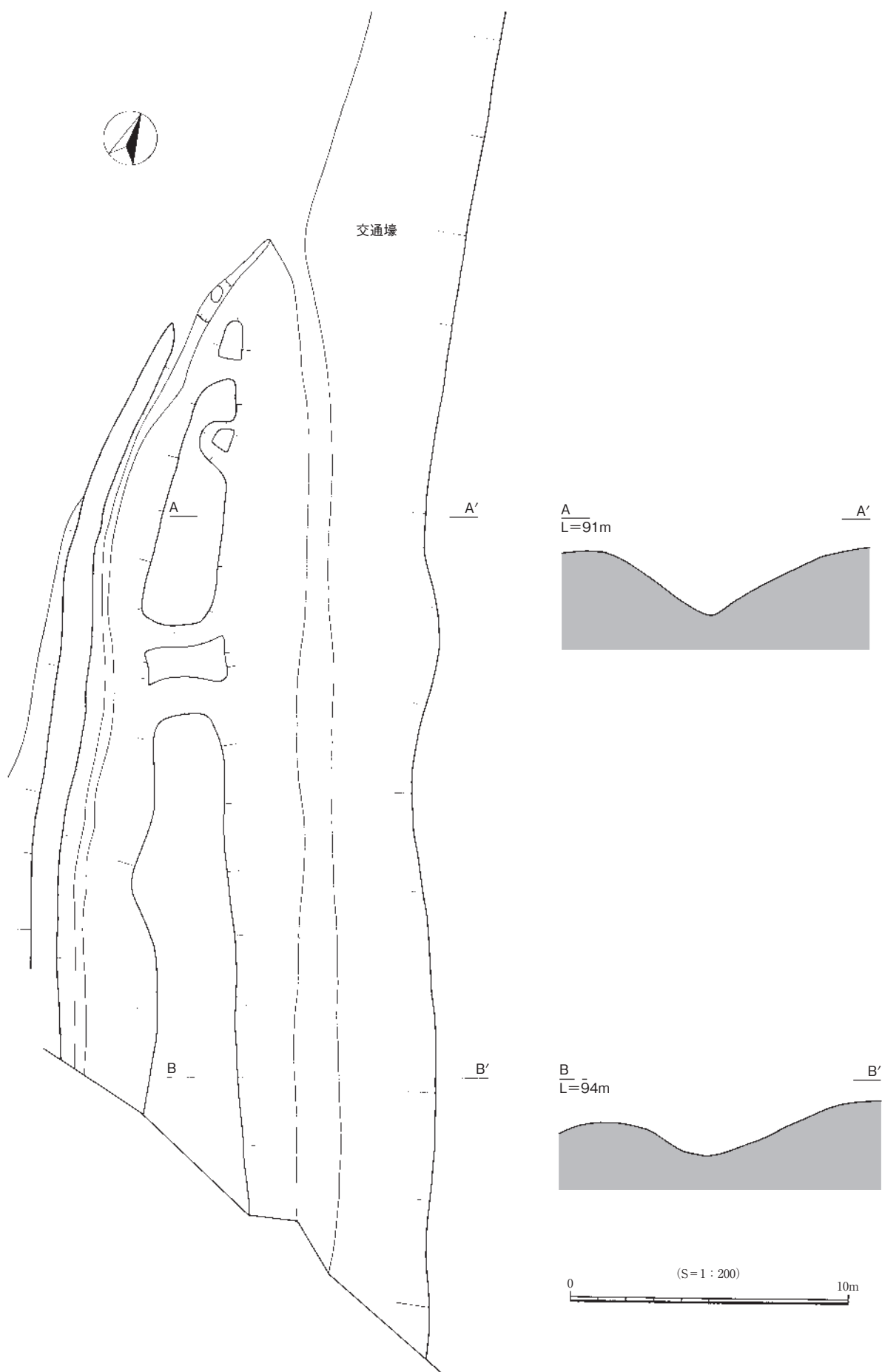
第39図 道路3遺構図

## 第7節 近現代の遺構

近現代の遺構は、表土を除去した第1遺構面の西側において、大型の溝状遺構を確認した。坂長伯楽塚遺跡が所在する越敷山一帯では、アジア・太平洋戦争末期の昭和20年5月から8月までの期間に、「チ号演習」と呼ばれる連合軍との本土決戦に備えた大規模な陣地構築が行われていたことから、この遺構もその時に造られた塹壕跡と推測された。



第40図 第1遺構面平面図



第41図 交通壕遺構図

## 交通壕（第41図）

検出した長さ40m、上面の幅7m、下面の幅1～1.5mの断面逆三角形の溝状遺構である。深さは2～3mもあり、一見すると弥生時代の環濠のようにも見える。

この溝状遺構の北側は、調査前から平坦地が広がっていたが、調査前の樹木伐採時に重機の搬入路として削平されたものと考えられた。この遺構内からの出土遺物が無かったため、時期を決めることは難しかったが、堆積土が薄く、ほとんど埋まりきっていないことから、調査当初から極めて新しい時期の遺構と考えられた。

この溝状の遺構は、調査区外にも伸びていることから、かなり大規模な遺構と考えられる。結論から述べると、この遺構は昭和20年の5月頃から8月にかけて越敷山一帯で実施された、「チ号演習」に関連して構築された塹壕「交通壕」の跡と推測される。

「チ号演習」とは、アジア・太平洋戦争の末期に連合軍との本土決戦に備えて全国で実施された陣地構築作戦であるが、その発令に至る経緯や、具体的な陣地構築作業の実態など不明な点が多い。鳥取県内では560箇所に及ぶ地点で陣地構築が行われたとされており、大規模なものでは中部の高城飛行場の建設などが行われたようだが、作業の大半は塹壕掘削による陣地構築に力点が置かれていたと考えられる。この「チ号演習」の作戦実行には関東から総武兵団が派遣され、それらの作業には地元の市民による勤労義勇隊が動員されていた。越敷山での陣地構築には、日野郡や淀江町方面から動員されたと考えられており、旧岸本町民は逆に淀江の壺瓶山での陣地構築に駆り出されていた。鳥取県西部管内では、越敷山と米子市淀江町の壺瓶山、米子市奈喜良の三カ所に陣地が造られており、皆生海岸方面から上陸してきた連合軍をこの三カ所から攻撃する予定であったという。

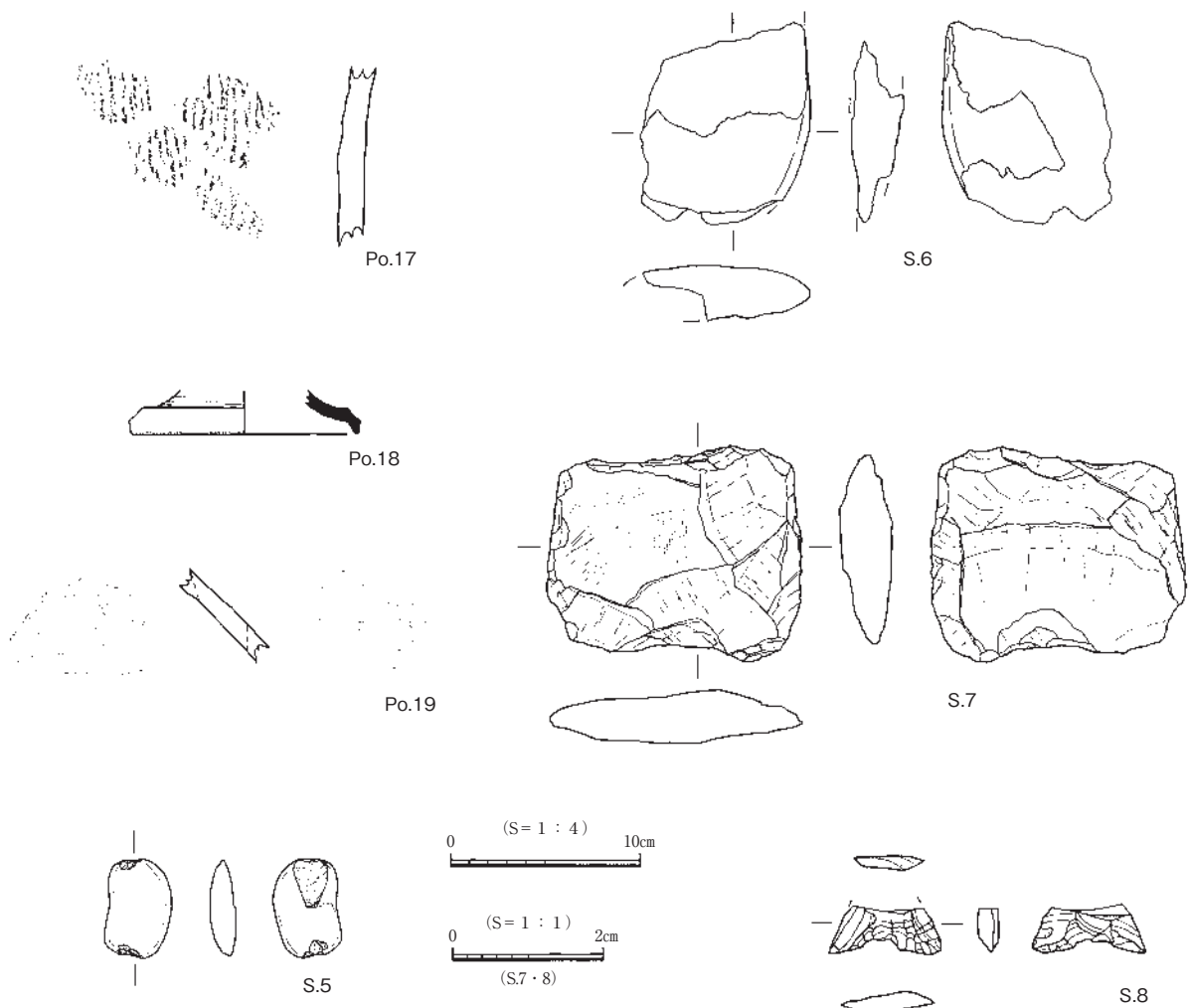
塹壕の掘削方法については、昭和20年4月12日に大本営陸軍部から『国民築城必携』と呼ばれる小冊子が刊行されており、この内容は新聞などにも転載されていたようである。そして、その中には交通壕の構造と共に塹壕の掘削方法が図示されており、広く国民に向けて本土決戦に対する陣地構築の重要性が説かれていたことが解る

今回検出した遺構は、先の小冊子に描かれている塹壕と比較すると深さや幅の規模が大きいことから、越敷山の各所に配置された攻撃陣地同士を繋ぐための交通壕として掘削されたものではないかと考えられる。

## 第8節 丘陵部から出土した遺物 (第42図)

丘陵部から出土した遺構に伴わない遺物は、表土掘削中に出土したものが大半であるが、点数は少ない。出土した遺物の数が少ない理由は、恐らく、調査地内において集落遺跡が形成されていないことに起因すると思われる。古墳時代の遺物も同様に少ないが、古墳時代中期には墳墓祭祀において供献土器などを大量に用いないことが、その理由として考えられる。

Po. 17は、外面を粗く条痕調整する縄紋土器深鉢の体部片と推測される。丘陵上で出土した縄紋土器はこれ1点のみである。Po. 18は須恵器高坏の脚端部の破片である。胎土はセピア色を呈し、外面はカキ目調整される。低脚タイプのもので推測されることから、6世紀前半頃のものであろう。Po. 19は、越前焼と推測される瓷器系陶器の甕体部片である。色調は茶褐色で光沢があり、胎土は灰白色でマーブル状に練り込まれており、白色の砂粒を少し含む。S. 5は、円礫の両端部を打ち欠く小型の石錘である。石材はデイサイトと推測される。S. 6は、粘板岩製の石斧の破片か。刃部を欠損しているため、自然石の可能性もある。S. 7は、安山岩製の楔形石器。S. 8は、先端部を欠損する黒曜石製の石鏃である。



第42図 丘陵部出土遺物図

## 第4章 坂長伯楽塚遺跡谷部の調査

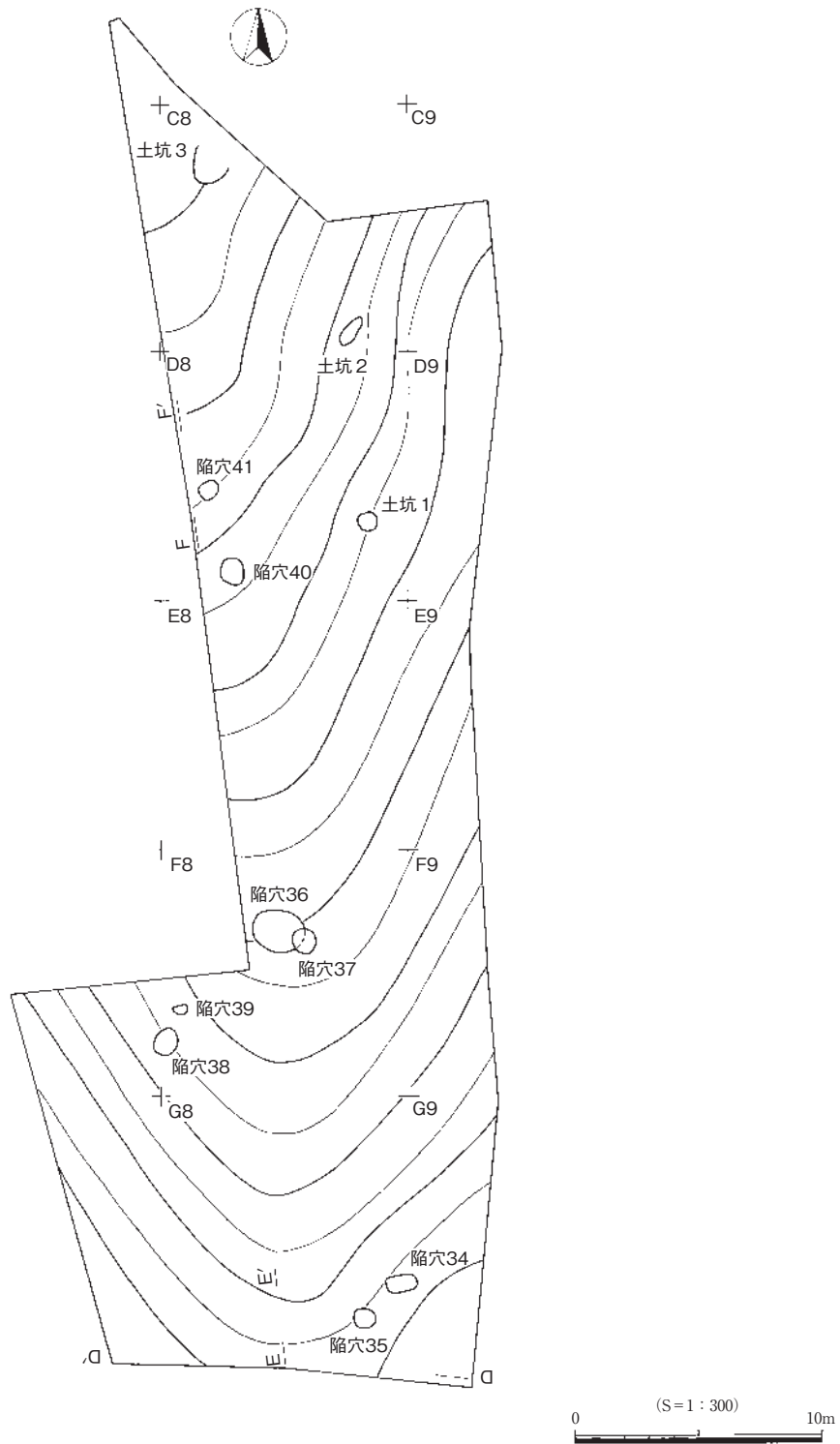
### 第1節 谷部の層位

坂長伯楽塚遺跡の谷部においては、8基の陥穴と性格不明の土坑を3基確認した。このうち陥穴34～36は第Ⅲ層の検出面から掘り込まれていることから、Ⅲ層が形成された縄紋時代早期末から縄紋時代晩期の間掘削されたものと考えられる。それ以外の陥穴・土坑は全て地山面で検出したが、この面から見つかった陥穴には底面に小穴を持たないものがほとんどであった。

また、表土掘削中に谷部の中央付近で東西方向に伸びる、幅1m、深さ80cm程の溝状の遺構を確認したが、表土と同一の砂質土が堆積していることから、攪乱として処理した。今から考えれば、「チ号演習」に伴って造られた塹壕跡であった可能性があるが、調査開始当初には塹壕の認識が無かった為、図面や写真を撮っておらず、検出時の状況を示すことが出来ない。

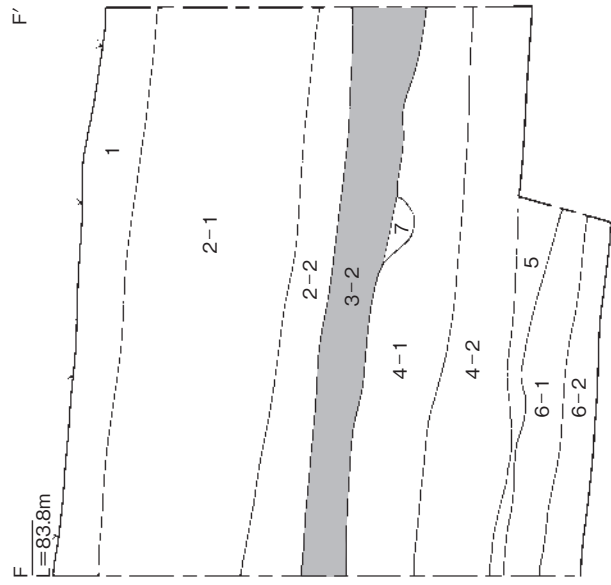
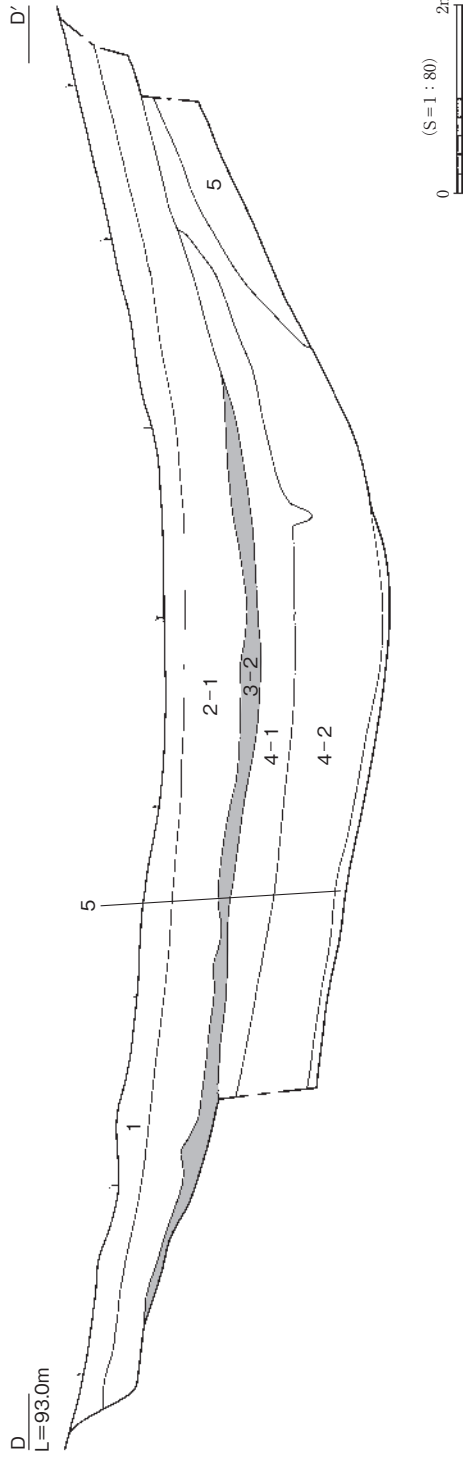
谷部の堆積状況は、表土層から地山まで四つの層に大別される。表土のⅠ層は、腐植を多く含む褐色土で縄紋時代から古代までの遺物を含むが、遺物の出土量は少ない。Ⅱ層は、黒色の砂質土で構成されており、縄紋時代後晩期の遺物を含む。Ⅲ層はロームに近い粘質傾向の強い褐色土で、谷部の中央にレンズ状に厚く堆積していたことから、調査当初は地山と誤認していた。後にⅢ層の上面で陥穴36を検出したことから、この面で遺構が存在することが明らかとなった。Ⅲ層から出土した遺物は、早期後半の穂谷式土器を主体としており、時期的にまとまった資料と考えられるが、どの土器もローリングを受けていることから、土砂崩れなどで谷部に再堆積した遺物と推測される。Ⅳ層は黒色の砂質土で構成されており、遺物は穂谷式土器を含むが、遺物が出土するのはⅣ層の上層部分までであり、地山に近い下層からの遺物の出土は無かった。

調査深度は、最も深い地点で表土から4m下まで掘り下げた。地山と見られるⅤ層下のローム層は、一部をトレンチ状に掘り下げたが、遺物は出土しなかった。

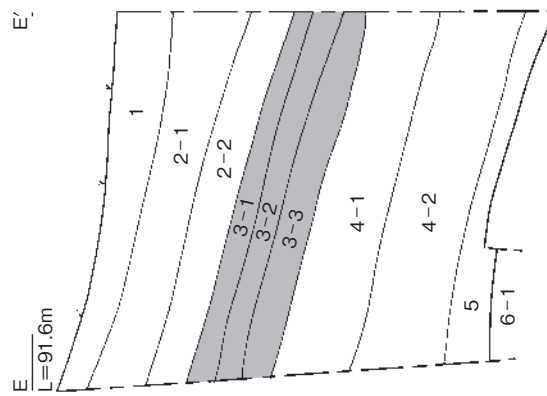


第43図 谷部遺構平面図





- |     |          |       |
|-----|----------|-------|
| 1   | 褐色土 (表土) | I 層   |
| 2-1 | 濃黑色砂質土   | II 層  |
| 2-2 | 黑色砂質土    | II 層  |
| 3-1 | 淡黑褐色砂質土  | III 層 |
| 3-2 | 明褐色粘質土   | III 層 |
| 3-3 | 淡褐色粘質土   | III 層 |
| 4-1 | 明黑色砂質土   | IV 層  |
| 4-2 | 黑灰色砂質土   | IV 層  |
| 5   | 淡灰褐色粘質土  |       |
| 6-1 | 明黃灰色粘質土  |       |
| 6-2 | 暗茶褐色粘質土  |       |
| 7   | 暗灰褐色砂質土  |       |



第44図 谷部断面図

## 第2節 検出した遺構

### 陥穴34 (第45図)

Ⅲ層の上面で検出した長方形の土坑である。当初は掘形がはっきりせず、不整形の土坑として調査したが、最終的にⅤ層の上面で長方形の掘形を確認することができた。遺構の規模は、検出面が長さ1.2m、幅70cm、底面が長さ90cm、幅30～40cmと推測される。深さは、最も深い所で1.4mである。土坑内は、暗褐色の砂質土が堆積していた。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

### 陥穴35 (第45図)

陥穴34の南西部に位置する楕円形の土坑である。検出面の規模は、長径95cm、短径75cm、深さ1.3mで、土坑底面の長径は50cm、短径40cmである。土坑底面には、直径5～8cm、深さ10cm程度の5つの小穴が掘られており、細い杭を立てた跡と推測される。土坑内は、淡褐色の砂質土が堆積していた。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

### 陥穴36 (第45図)

F-8区のⅢ層上面で検出した円形の土坑である。土坑の規模は、検出面の直径が1.6m、底面の直径が1mで、深さは1.7mである。土坑の底面中央には直径10～20cm、深さ30cmの小穴が掘られている。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

### 陥穴37 (第45図)

Ⅴ層の上面で検出した円形の土坑である。土坑の規模は、直径90cm、深さは95cmで、底面はほぼ平坦だが、小穴は見られなかった。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

### 陥穴38 (第46図)

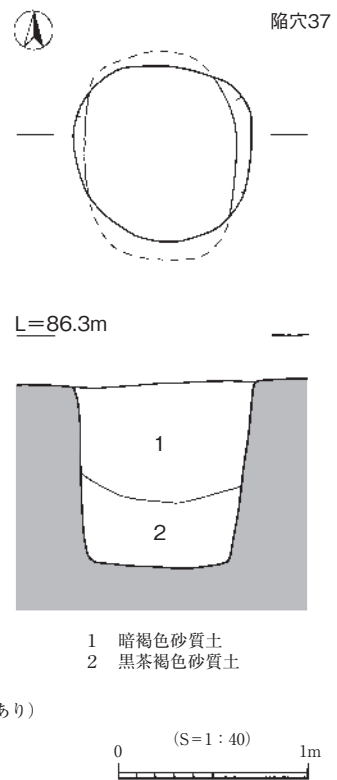
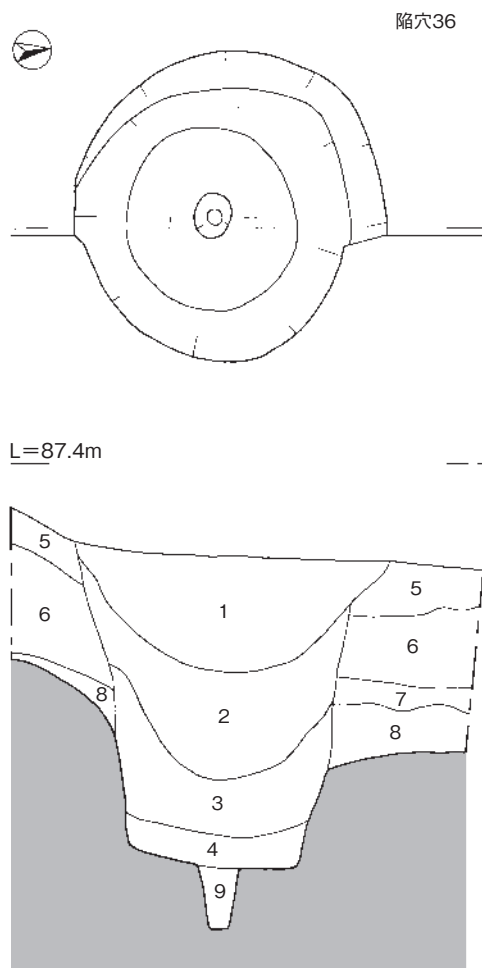
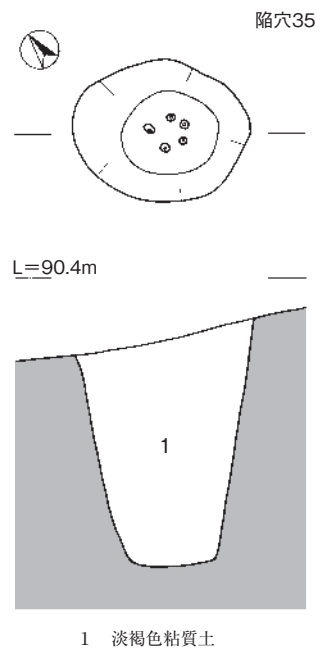
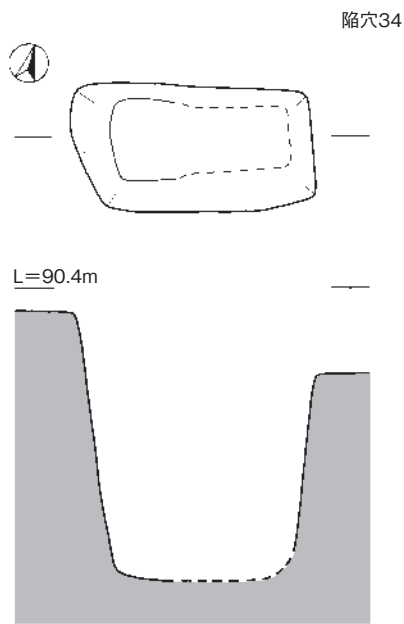
Ⅴ層の上面で検出した楕円形の土坑である。土坑の規模は直径1m、深さは60cmである。土坑の底面には小穴は見られず、地山の傾斜に沿って傾いていることから、陥穴では無い可能性もある。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

### 陥穴39 (第46図)

Ⅴ層上面で検出した土坑である。北側が調査区外に伸びるため正確な規模は不明だが、直径90cm程の円形土坑と推測される。深さは1mであるが、底面には小穴は見られなかった。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

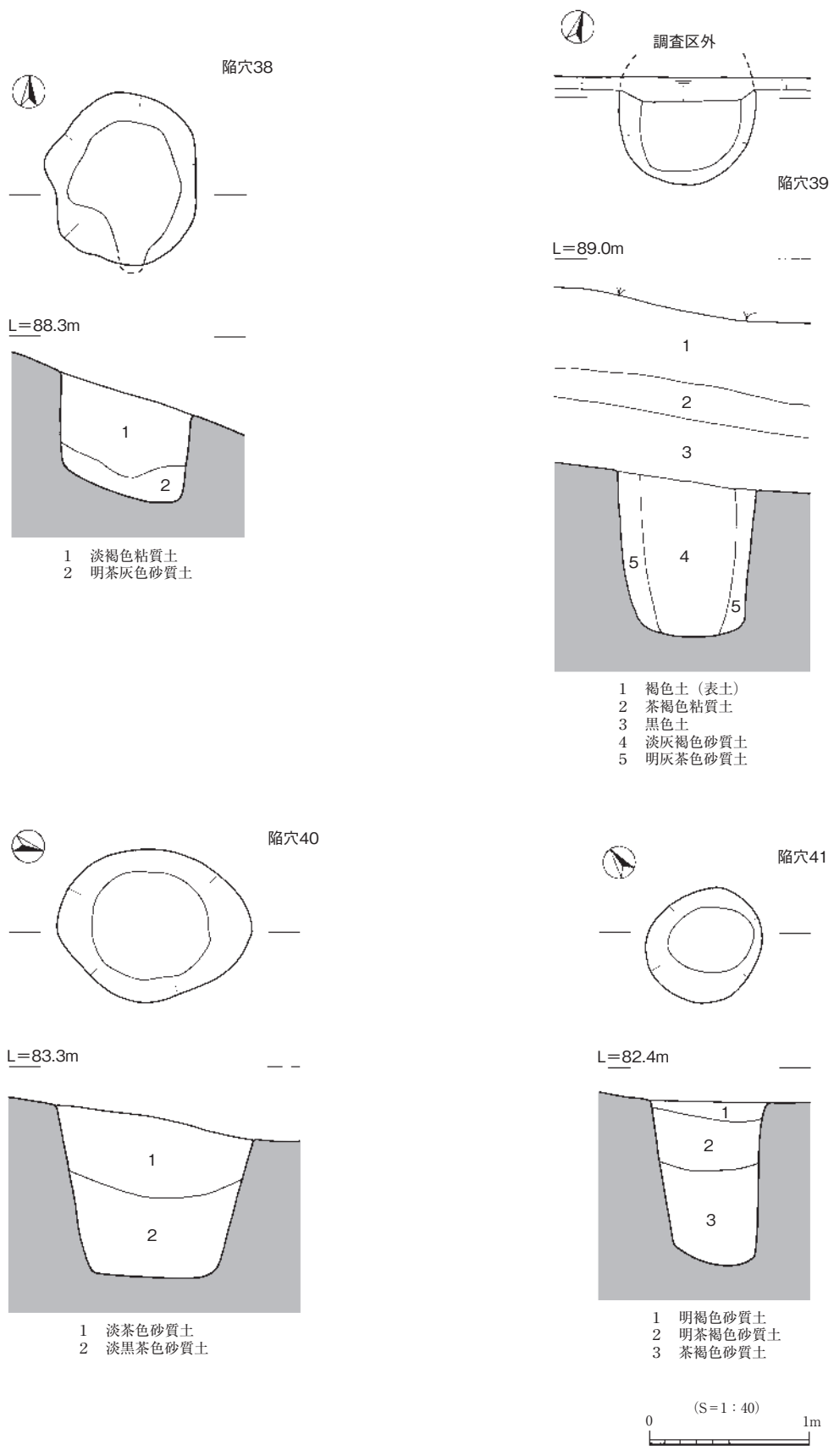
### 陥穴40 (第46図)

D-8区の南西部で検出した楕円形の土坑である。長径1.2m、短径1m、深さ1.1mで、底面には小穴は見られない。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

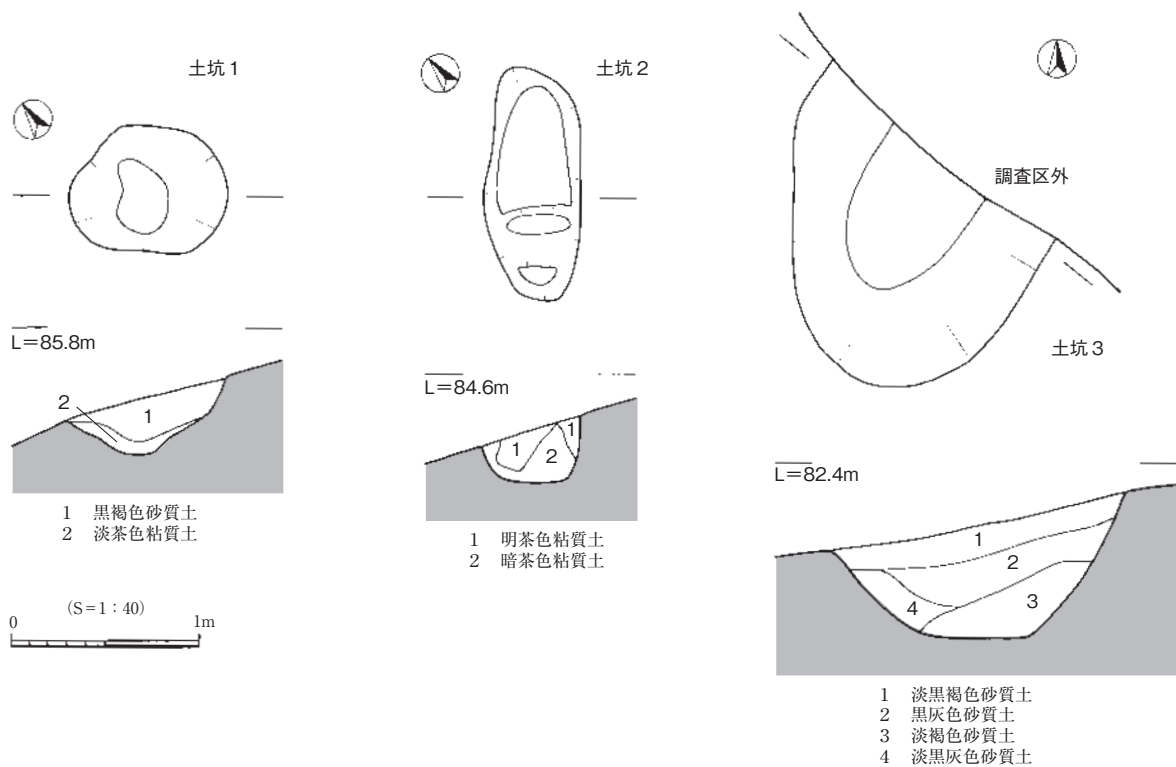


- 1 淡黒灰色粘質土
- 2 淡灰褐色粘質土
- 3 暗黒灰色粘質土 (縮まりあり)
- 4 明茶灰色粘質土
- 5 明茶褐色粘質土
- 6 黒灰色粘質土
- 7 明灰褐色粘質土
- 8 黒褐色粘質土
- 9 明灰褐色粘質土

第45図 陥穴34~37遺構図



第46図 陥穴38~41遺構図



第47図 土坑1～3遺構図

#### 陥穴41 (第46図)

陥穴41の北側で検出した円形の土坑である。直径70cm、深さ1mで、底面には小穴は見られない。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

#### 土坑1 (第47図)

D-8区の東側で検出した不整形の土坑である。長径90cm、短径70cm、深さ40cmで、断面形は楕円状を呈する。この遺構からは、遺物は出土しなかった。

#### 土坑2 (第47図)

C-8区の南東部で検出した、長径1.2m、短径50cm、深さ30cmの長楕円形の土坑である。土坑底面の南西部は段状に掘りくぼめられている。人為的な遺構と考えられるが、性格については不明である。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

#### 土坑3 (第47図)

遺構の北東部が調査区外に伸びるため、正確な規模は不明だが、検出した長さ1.2m、幅1.5m、深さ80cmを測る大型の土坑である。断面形が楕円状を呈していることから、陥穴では無いと判断した。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

### 第3節 IV層出土の縄紋土器 (第48・49図)

IV層は、最も深い所で層厚が80cmあるが、遺物は地山に近い下層からはほとんど出土せず、Ⅲ層に近い上層から出土している。また、出土した遺物の量も上層のⅢ層と比べると少ない。

Po. 20は、表面に大型の楕円押型紋を施し、内面には右上がりの斜行沈線の痕跡を残す深鉢の体部片である。同一層から出土した土器と比較すると、器壁がかなり厚く作られている。Po. 21は、山形紋を施す押型紋土器の体部片。Po. 22は、縦位に撚糸紋を施す深鉢の体部片である。Po. 23は、緩やかに外反する口縁部に幅広の突帯を貼り付け、二段にわたって刺突を施す。Po. 24は、口縁部に突帯を貼り付け、板状工具による左上がりの刺突紋を施す。体部には沈線紋が描かれている。Po. 25は口縁部を欠損しているが、突帯に右上がりの刺突紋を施し、体部には三角形の沈線紋が描かれている。Po. 26は、平行する沈線に斜め方向の沈線紋が描かれる。Po. 27も類似するモチーフと思われるが、器壁はかなり薄い。Po. 28～31は沈線紋のグループだが、施紋具の押し当て方に強弱の差が見られる。Po. 32は、円弧状の紋様が描かれた沈線紋のように見えるが、浅く施紋された山形紋の可能性もある。Po. 33は、2条の沈線と2個の竹管状工具による刺突が施される。Po. 34は、粗い擦痕状に方形の区画が描かれ、内面にもハケ状工具の痕跡が残る。

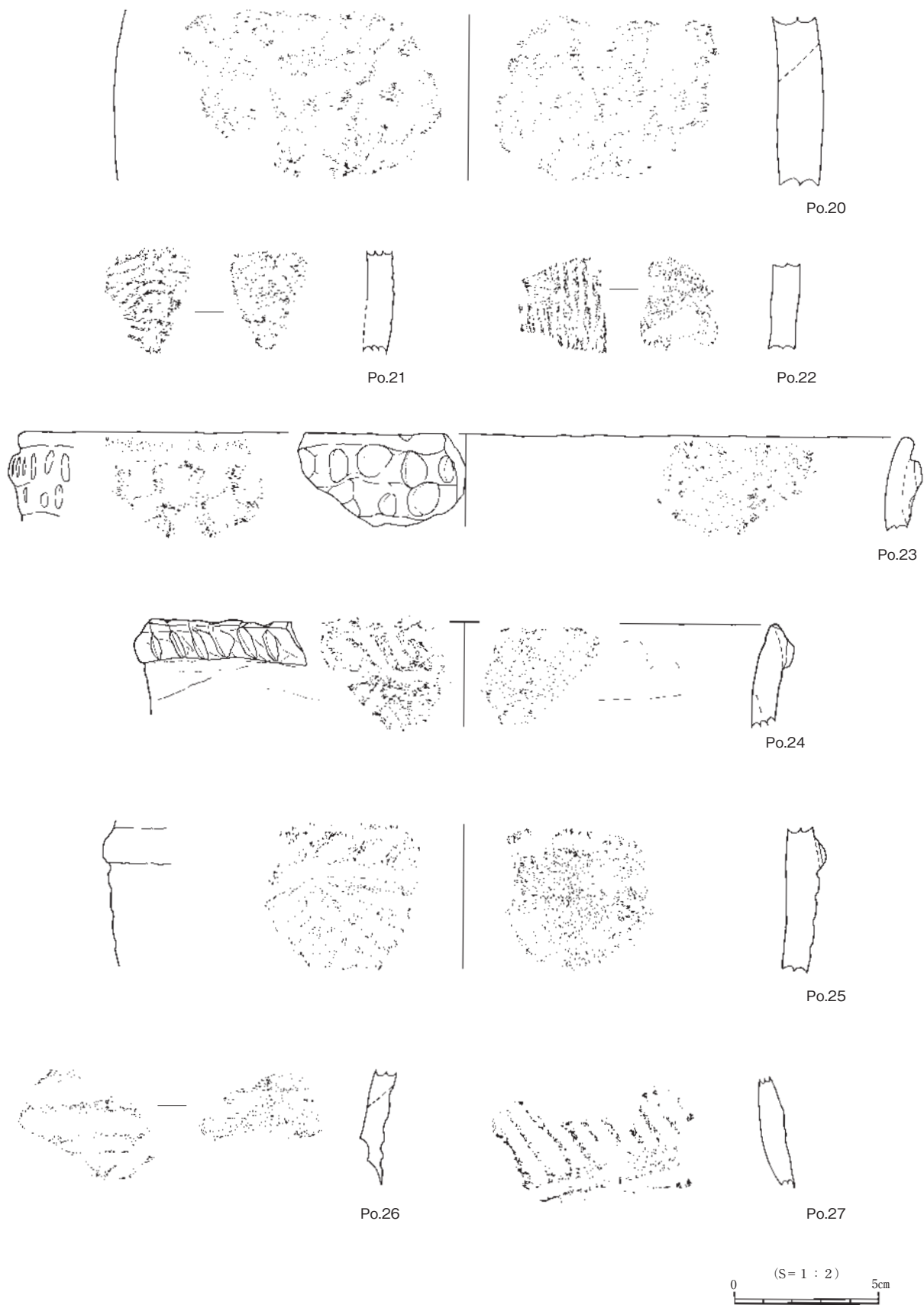
### 第4節 Ⅲ層出土の縄紋土器 (第50～57図)

Ⅲ層は、谷部の中央にレンズ状に厚く堆積する褐色の粘質土層である。洪水などの自然的な要因で谷部に流れ込んだ土砂が再堆積したものと考えられる。ここから出土した遺物は、穂谷式のものが目立つことから、当該期に土砂崩れを起こすような自然災害があったものと推測される。また、谷部から出土した遺物の中でも、このⅢ層から出土した土器は表面の風化が著しく、付着した泥と一体化したものが多かったため、意図的に未洗浄に近い状態のまま乾燥させたものもある。

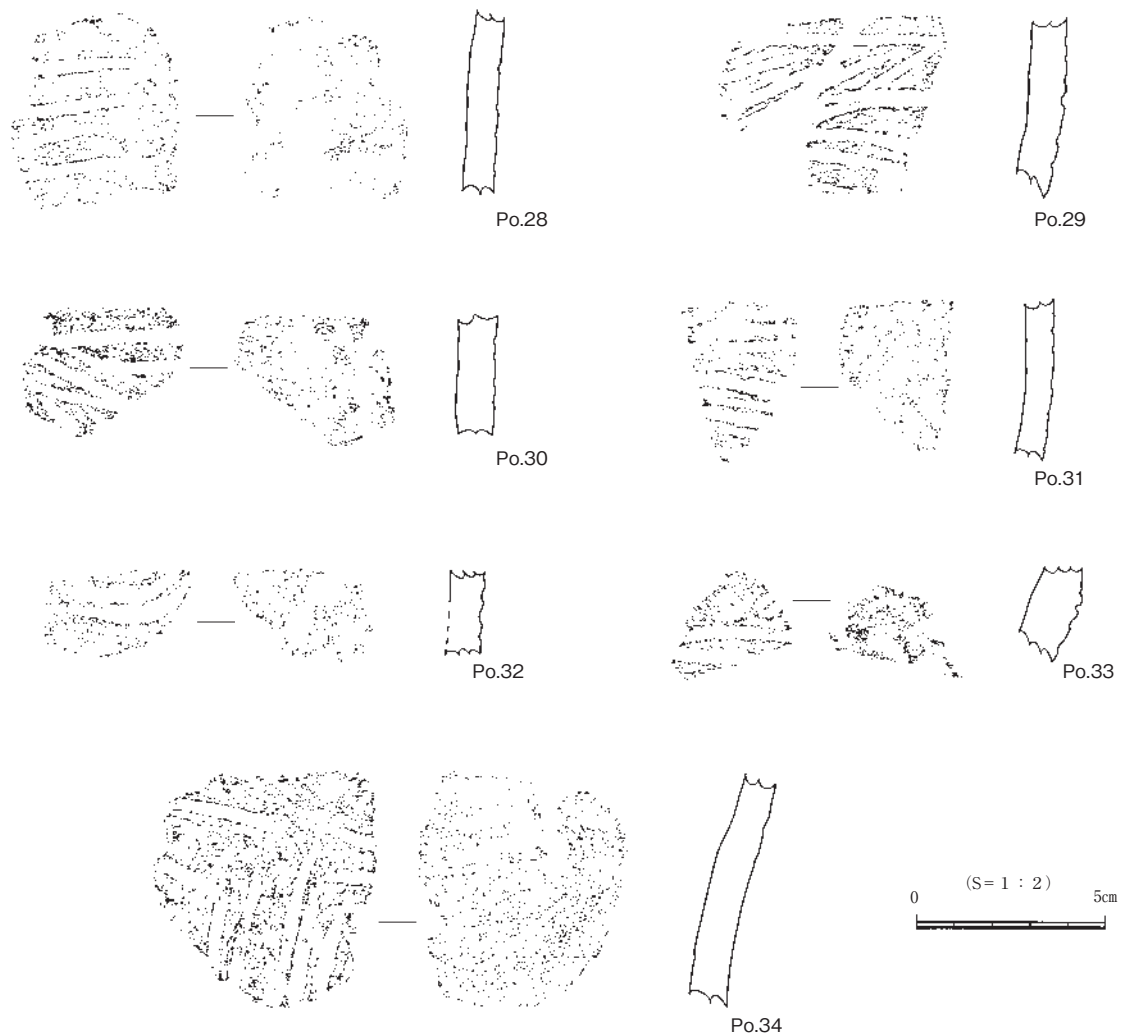
Po. 35は、胴部が膨らみを持ち、口縁部に向かって緩やかに外反する深鉢である。外面には小さな楕円押型紋が施される。Po. 36は、口縁端部を短く屈曲させる深鉢で、外面には楕円押型紋が施される。Po. 36は、高山寺式でも新段階のものと考えられる。Po. 37は楕円押型紋で、内面に浅く右上がりの斜行沈線が施される。Po. 38は、細い線状の紋様が交差する網目紋と見られる。Po. 39は、枝状の工具を回転施紋させた痕のようにも見えるが、棒状の工具を押引状に連続刺突したものと考えられる。Po. 40は外反する口縁に突帯を貼付け、刺突紋を施している。押型紋は、外面と口縁部の内面に山形紋が施される。穂谷式の新段階に位置付けられる。Po. 41も同様に突帯に刺突紋が巡る。Po. 42～53は、体部外面に山形紋を施紋する土器片で、全て深鉢と見られる。

Po. 54～57は、幅広突帯の中央に沈線を巡らせて2条突帯風に見せたもので、刺突紋を施すものがある。Po. 54は、口縁部の直下から沈線紋が施されるが、紋様の彫り込みが浅く、貝殻条痕風にも見える。Po. 58～81は、沈線紋が主体となるグループで、紋様のモチーフは横位施紋と三角形の斜線紋がほとんどを占めるが、Po. 64のように縦位に施紋するものもある。Po. 80は、突帯に「く」字状の刺突を施す。Po. 81は風化が著しいが、胎土の特徴からPo. 80と同一個体と見られ、突帯の下に縦位の沈線紋が施されていたと考えられる。

Po. 82は、口縁部に2条の浅い沈線を巡らす。Po. 83は、口縁部に接して突帯が貼り付けられ、突



第48図 谷部 IV層出土土器図①

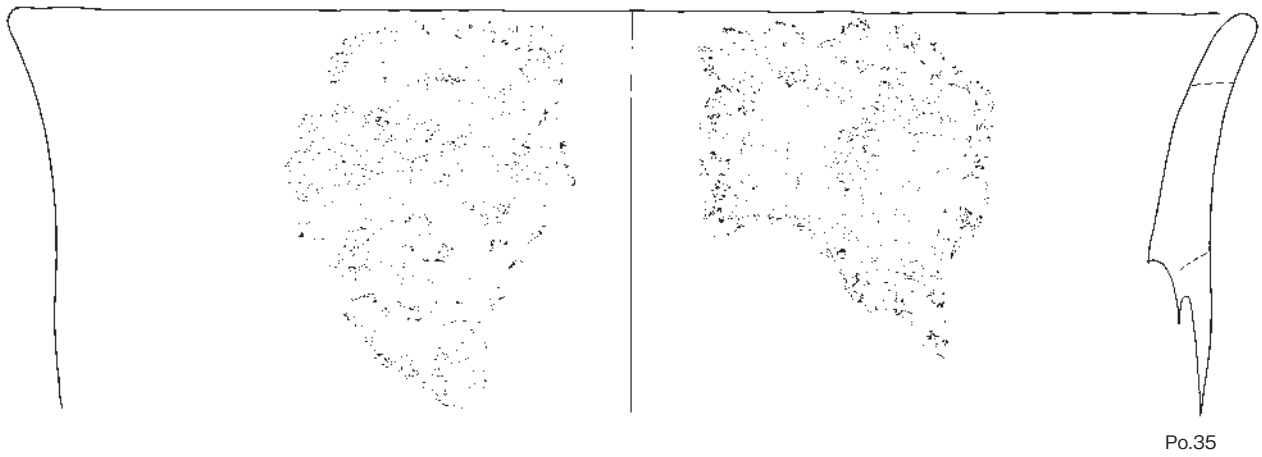


第49図 谷部 IV層出土土器図②

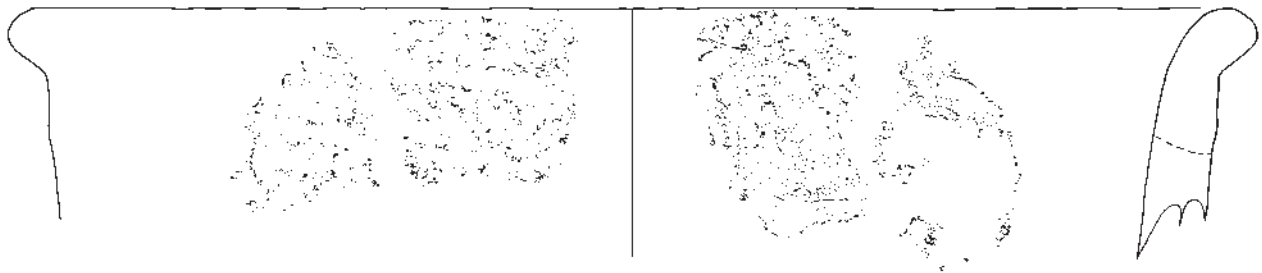
帯中央に沈線が施される。体部にも横位に引きずったような痕がみられるが、施紋具は不明である。Po. 84～89も、沈線が横位ないし縦位に施紋されるが、板状の施紋具を用いてナデ調整した痕のようにも見える。

Po. 90は、半裁した竹管状工具を横位に浅く波状施紋する。Po. 91は、緩く外反する口縁で、体部にハイガイなどの二枚貝の殻頂部を押圧施紋する。Po. 90・91とも、上福万遺跡に類例がある。Po. 92は、幅広の突帯に「C」字状の爪形紋を施す。体部には縄紋の痕跡が残る。Po. 93は、器壁の風化が著しいため断定できないが、逆「C」字状の爪形紋の痕跡か。Po. 94は、口縁端部が肥厚する磨研土器で、器種は浅鉢か。Po. 95は尖底土器の底部であるが、器壁の風化が著しい。





Po.35



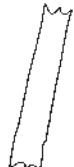
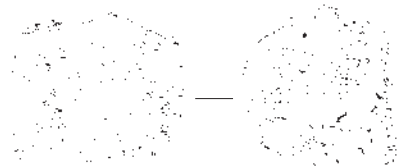
Po.36



Po.37



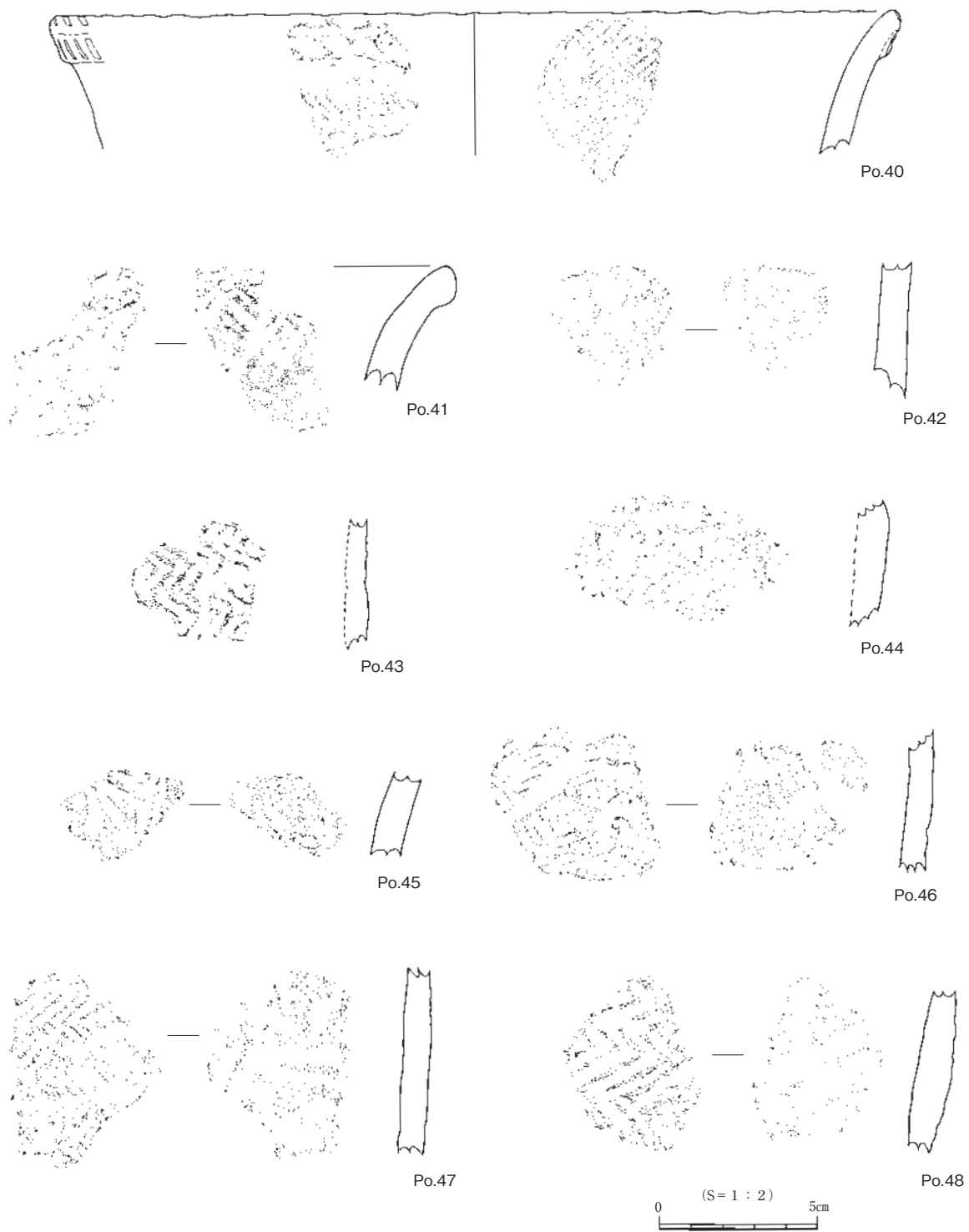
Po.38

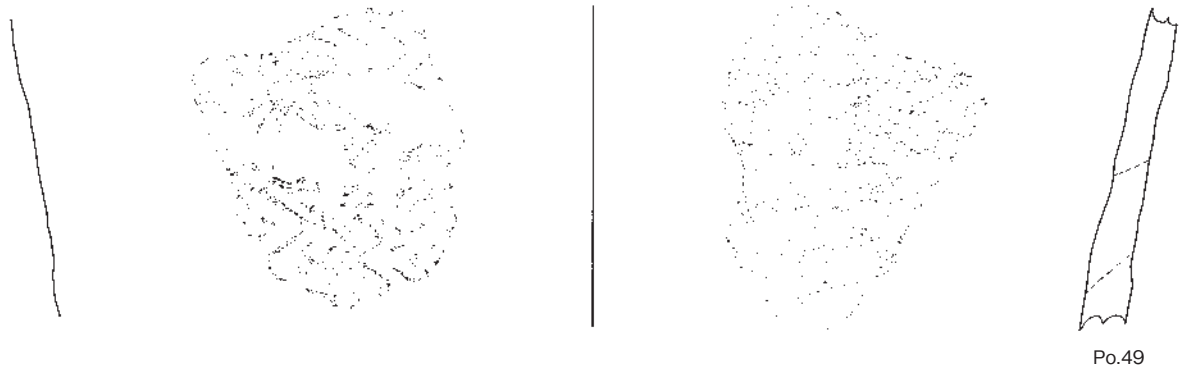


Po.39

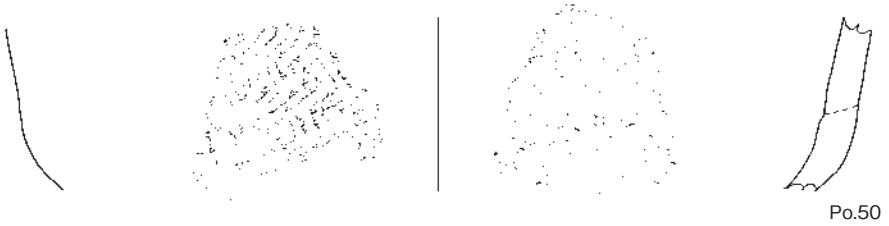
(S = 1 : 2)  
0 5cm

第50図 谷部 Ⅲ層出土土器図①

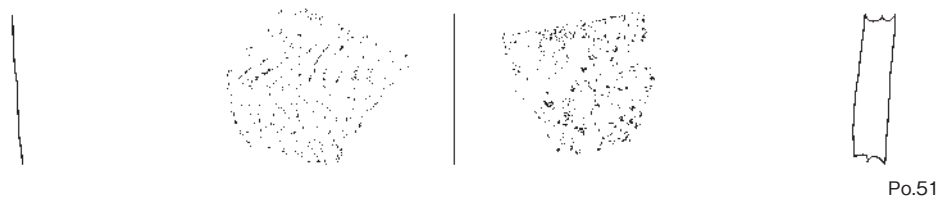




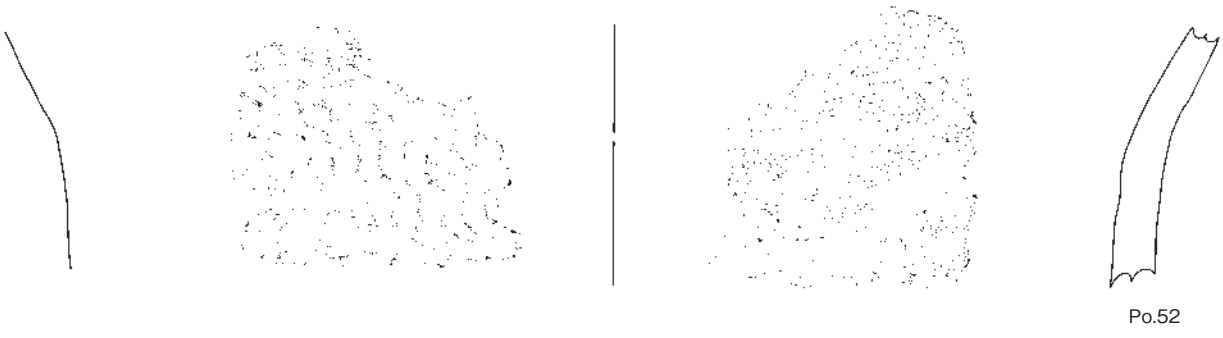
Po.49



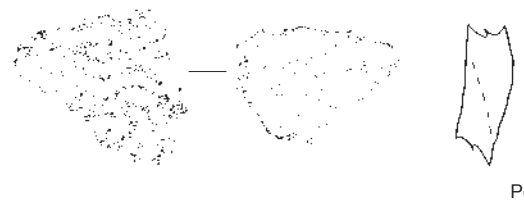
Po.50



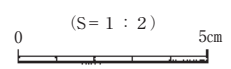
Po.51



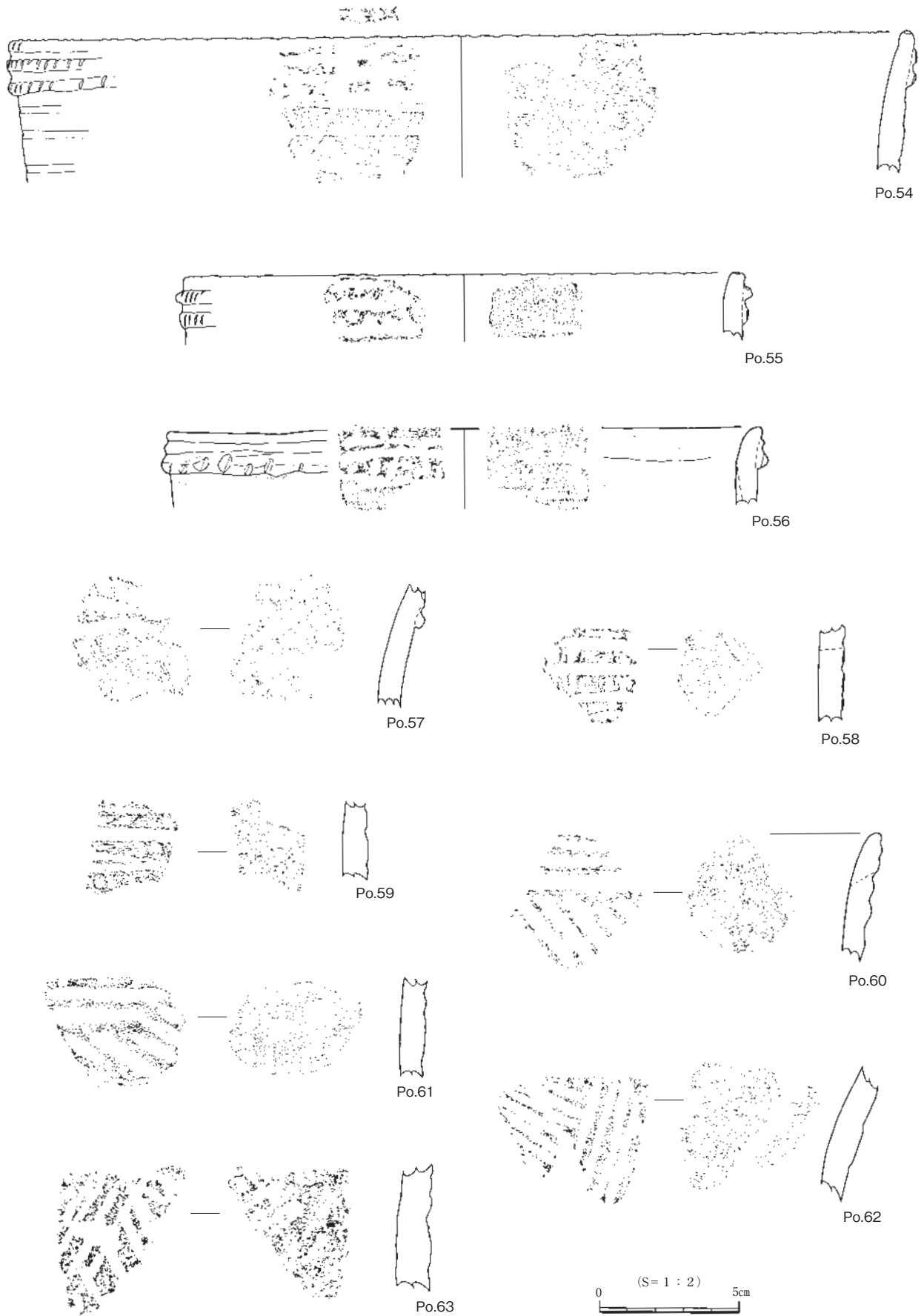
Po.52



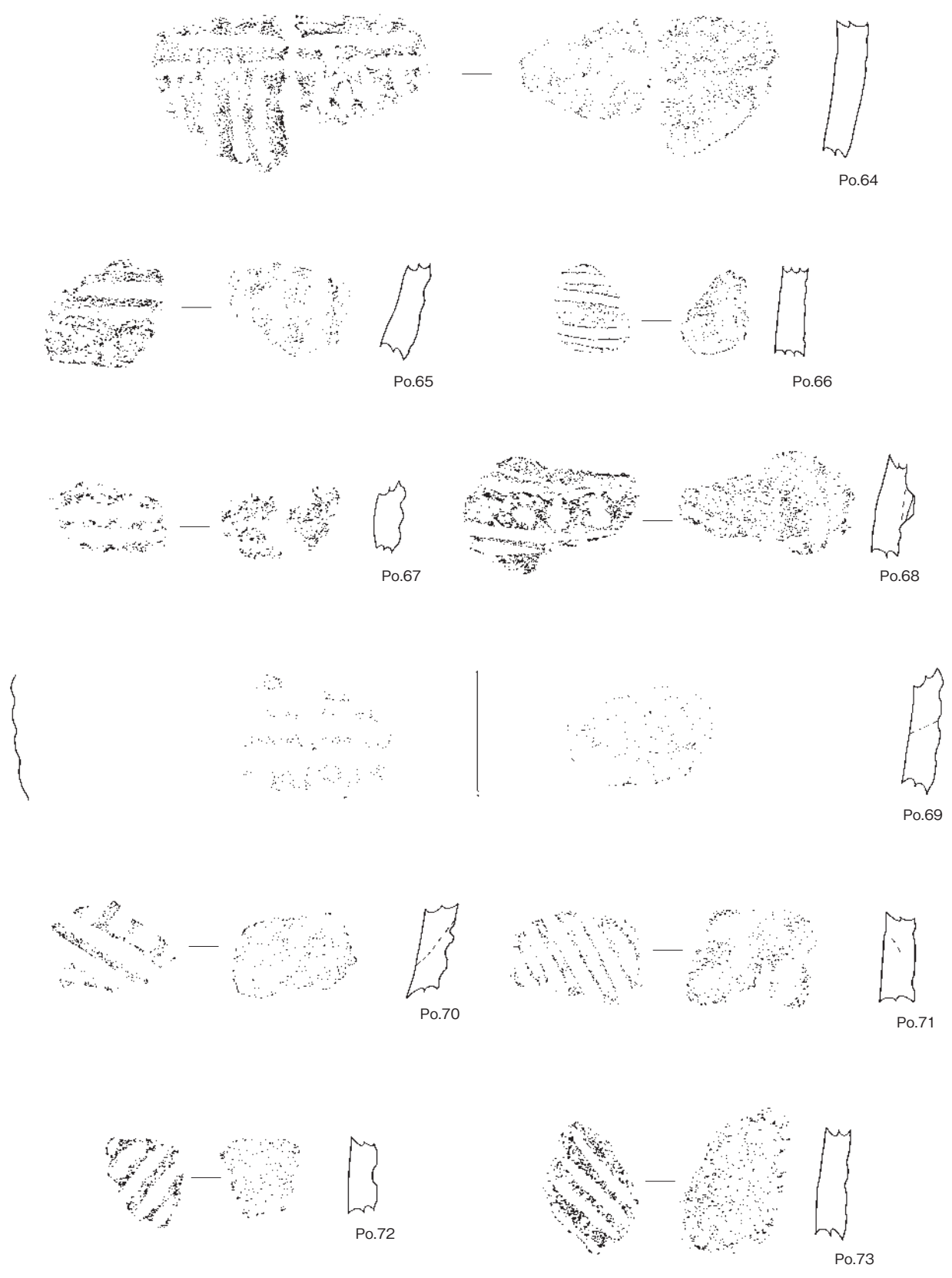
Po.53



第52図 谷部 Ⅲ層出土土器図③

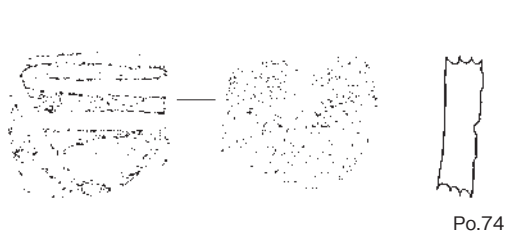


第53図 谷部 Ⅲ層出土土器図④



(S = 1 : 2)  
 0 5cm

第54图 谷部 Ⅲ層出土土器图⑤



Po.74



Po.75



Po.76



Po.77



Po.78



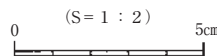
Po.79



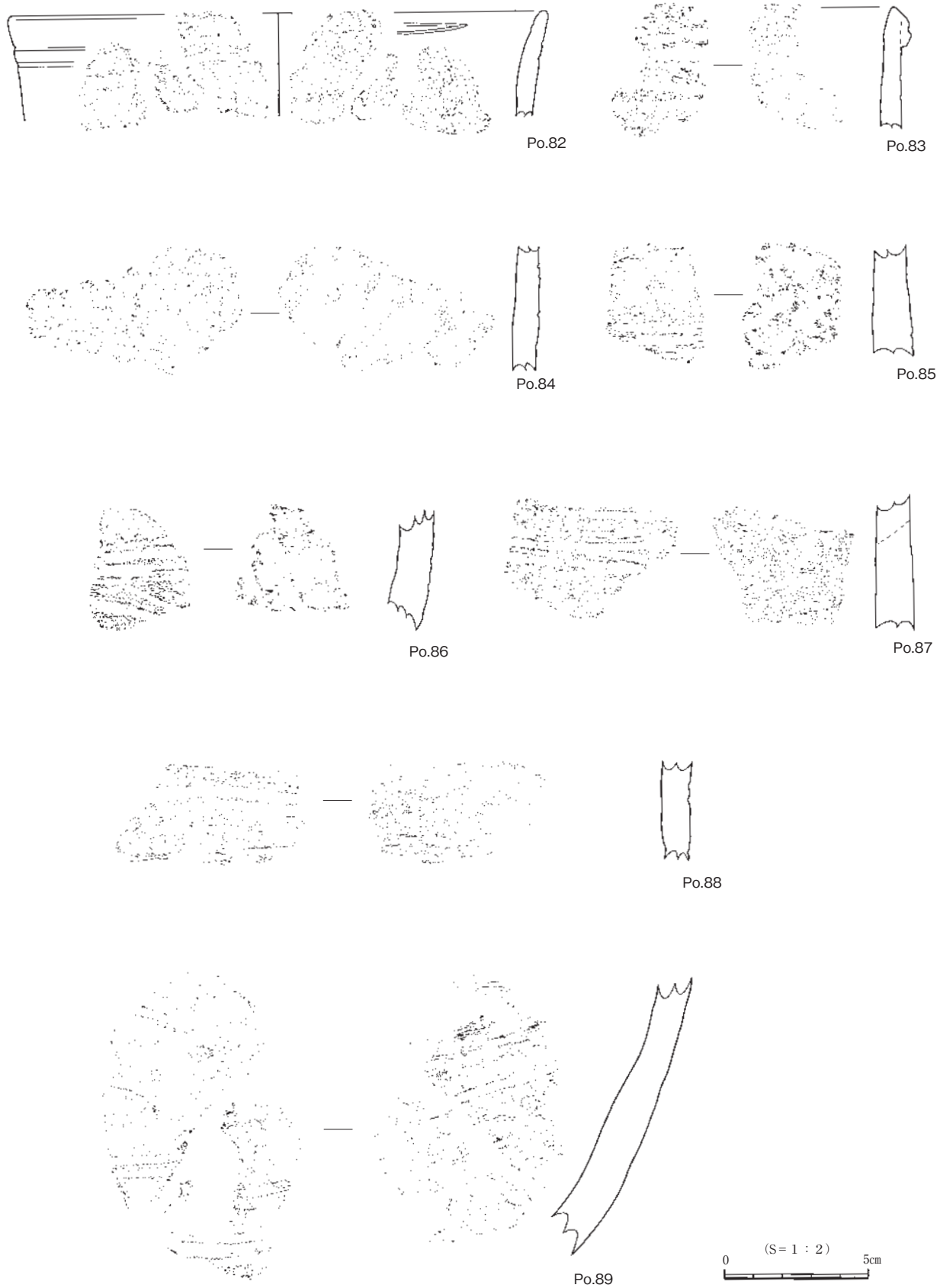
Po.80



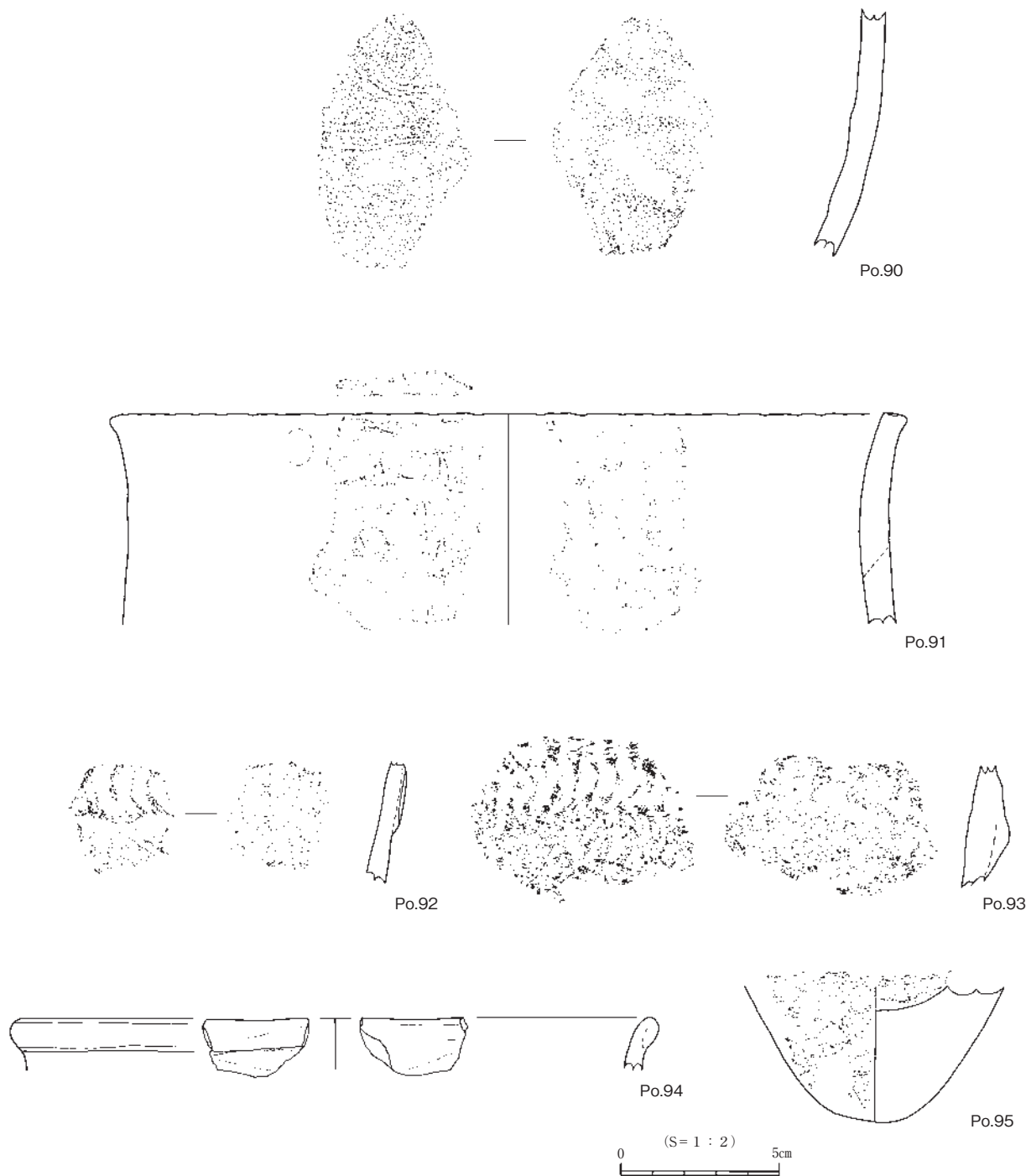
Po.81



第55图 谷部 Ⅲ層出土土器图⑥



第56図 谷部 Ⅲ層出土土器図⑦



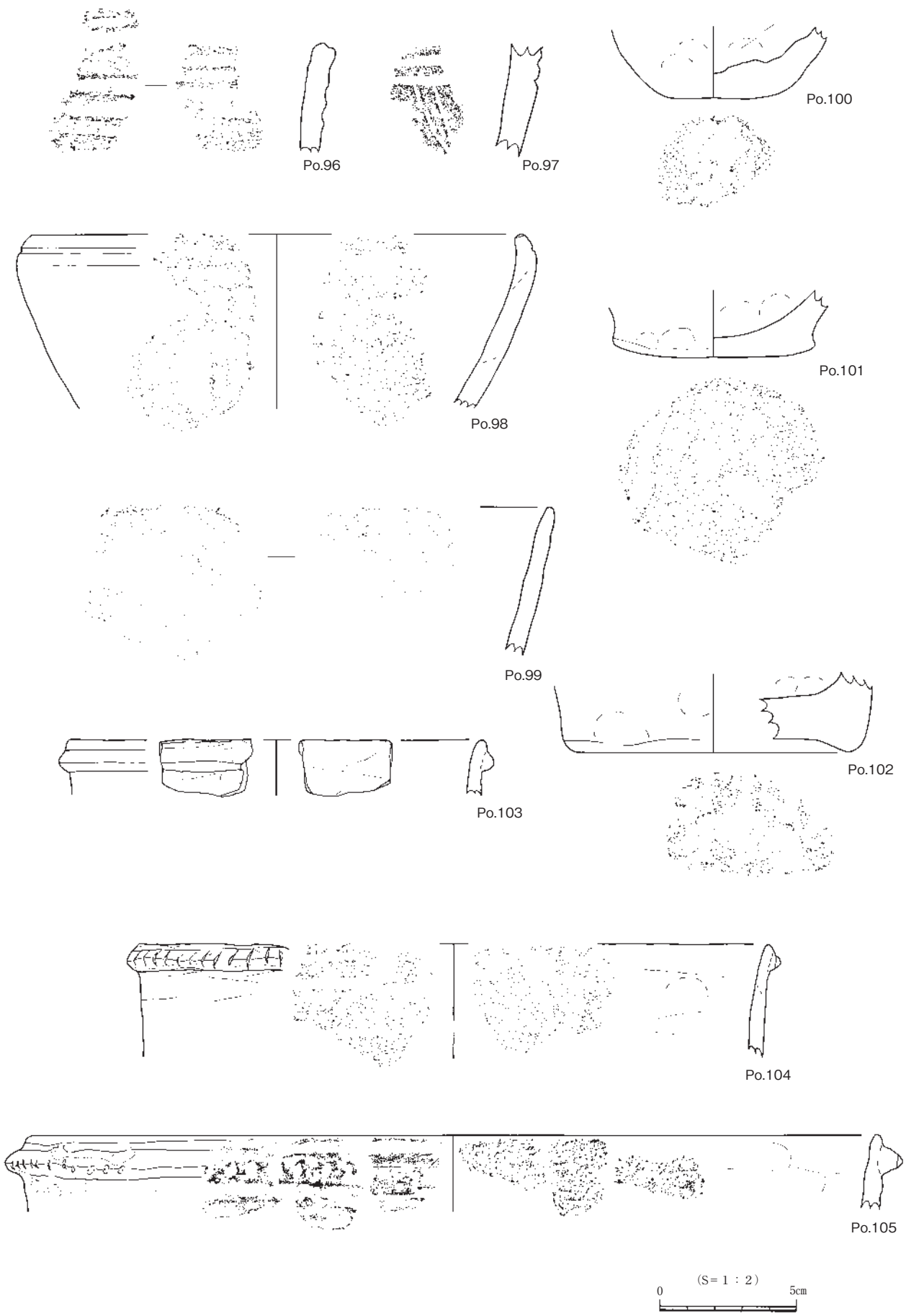
第57図 谷部 III層出土土器図⑧

### 第5節 II層出土の縄紋土器 (第58図)

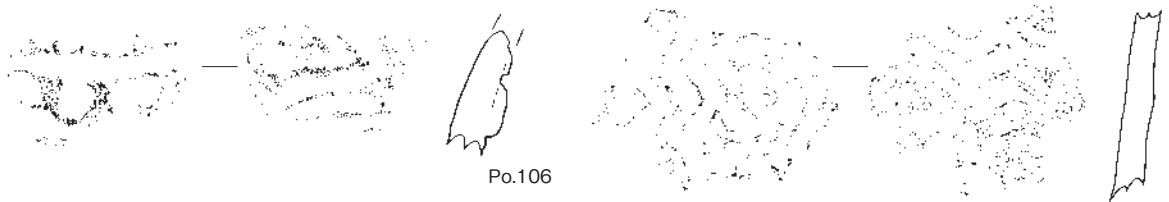
II層から出土した縄紋土器は、後晩期のものが主体であり、底部も平底形のものが出土している。

Po. 96は、口縁部に横位の沈線紋が施され、口縁端部にも沈線が巡る深鉢である。Po. 97は、2条の太い沈線が巡り、細かい斜線紋が施される浅鉢と推定したが、小破片のため検討の余地がある。Po. 98は、口縁端部が短く屈曲し、刺突が施される。口縁には細い1条の沈線が巡り、体部は条痕調整の痕が残る。Po. 99は、砲弾型の器形を呈する深鉢の口縁部と見られる。外面の器壁は、一部が調査時のガリで削られているが、内面は丁寧にナデ調整されている。Po. 100は、橙褐色を呈する丸底に近い底部片で、外面にはうっすらとハケの痕が残り、内面は粗くナデ調整される。Po. 101は、淡



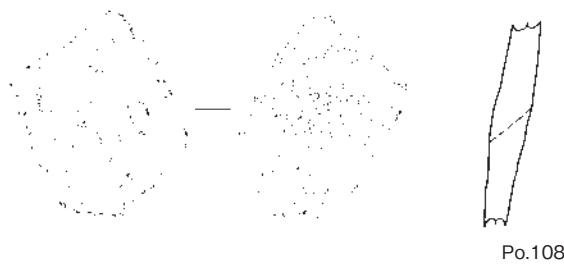


第58图 谷部 II層出土土器图

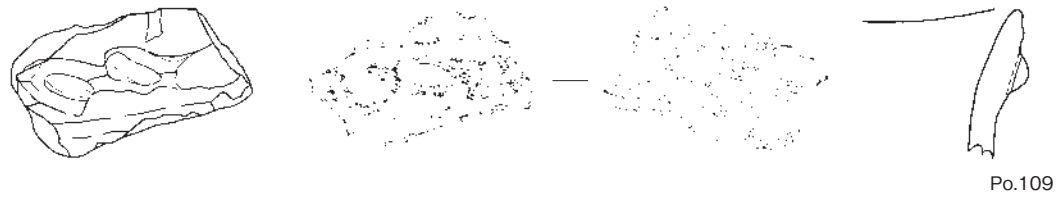
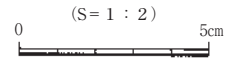


Po.106

Po.107



Po.108



Po.109



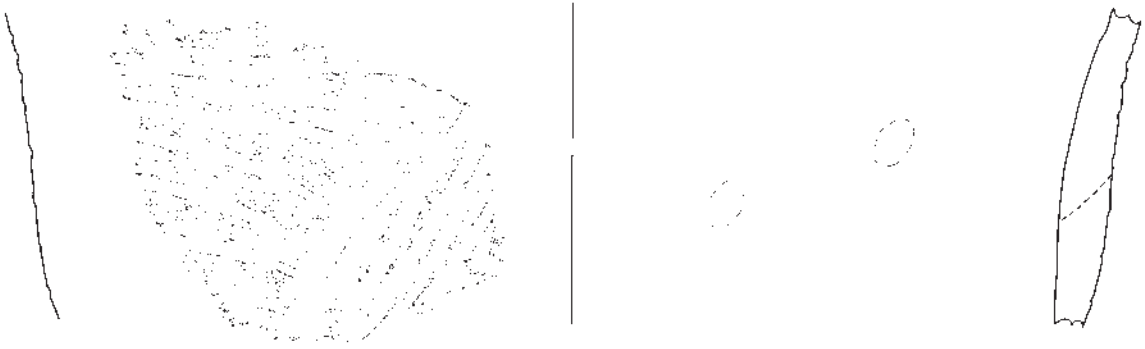
Po.110



Po.111



Po.112



Po.113

第59図 谷部 その他の層出土土器図

茶色を呈する平底の底部片で、外面は風化しているが、内面はナデ調整される。Po. 102は、淡橙褐色を呈する平底の底部片で、中心部に向かって上げ底状となる。Po. 103は、突帯紋土器の口縁部小破片で、突帯には刻みは施されない。Po. 104は、やや緻密な胎土の突帯紋土器で、突帯には爪状工具で刻みが施される。Po. 105もPo. 104と同様の胎土だが、突帯には大きめの刻みが施されている。

## 第6節 その他の層出土の縄紋土器（第59図）

その他の層から出土した土器とは、調査区の断面を精査した際に出土した土器であり、層位が不明確なものを一括している。

Po. 106は、太めの突帯に刺突紋が施されるもので、内面には山形紋が施紋されている。上部は擬口縁状であるが、突帯が剥離した痕跡があることから2段に亘って突帯が巡っていたと考えられる。Po. 107は、暗褐色を呈し内外面に山形紋を施す。Po. 108は、外面に山形紋を施す。Po. 109は、口縁部が波状となる深鉢の破片と見られる。胎土には白色の砂粒を含み、色調は淡橙褐色を呈する。突帯には棒状工具による刺突が施されている。突帯の直下にも1条の沈線が確認できることから、沈線紋土器に分類される。Po. 110は、1条の突帯に棒状工具による刺突があり、突帯の直下から斜格子状に沈線紋が施されている。内面には、斜行沈線状の指ナデの痕が残る。Po. 111は、外反する深鉢の口縁部片である。色調は暗褐色を呈し、器壁は内外面ともナデ調整されている。Po. 112は、幅広の突帯に縦位の刺突が施され、体部には擦痕状の浅い沈線紋が施される土器である。内面には、斜行沈線状の窪みが見られる。Po. 113は、やや器壁の厚い、深鉢の底部付近の破片と考えられる。内面と比較して外面の色調がやや黒っぽいのが、これは黒斑部分の破片であろう。外面には斜線紋が施されるが、沈線が緩やかな円弧を描くようにも見える。

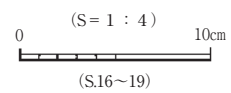
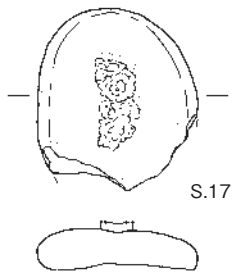
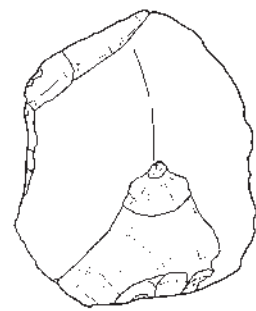
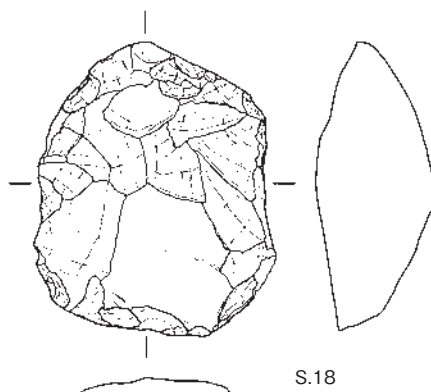
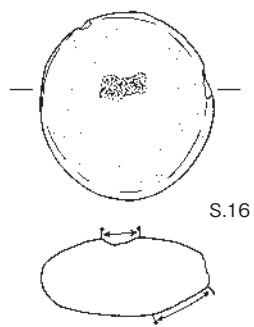
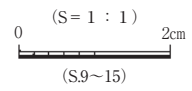
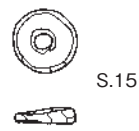
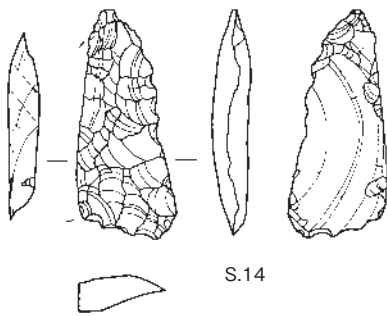
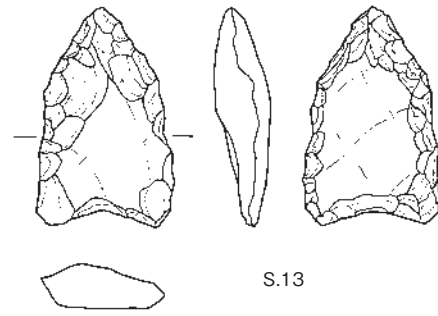
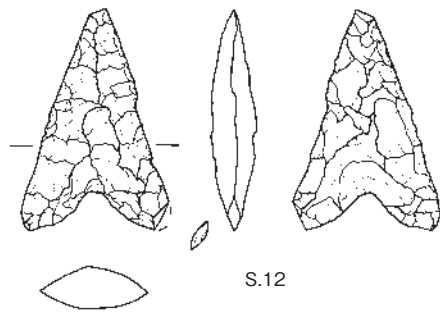
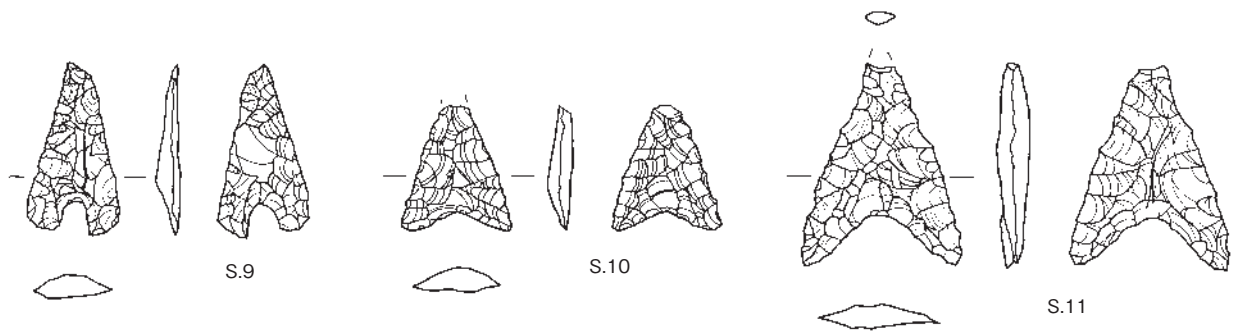
## 第7節 IV・Ⅲ層出土の石器（第60図）

IV層から出土した石器は石鏃1点のみで、大半の石器はⅢ層から出土している。

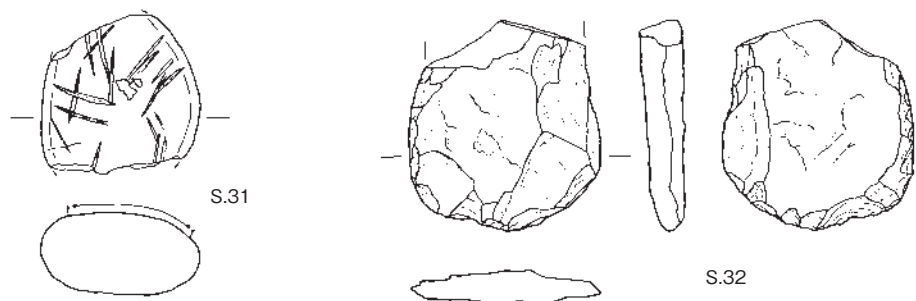
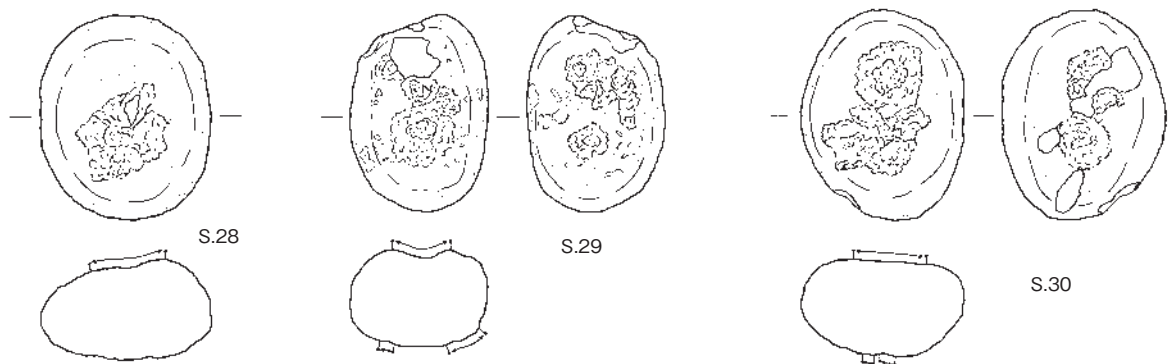
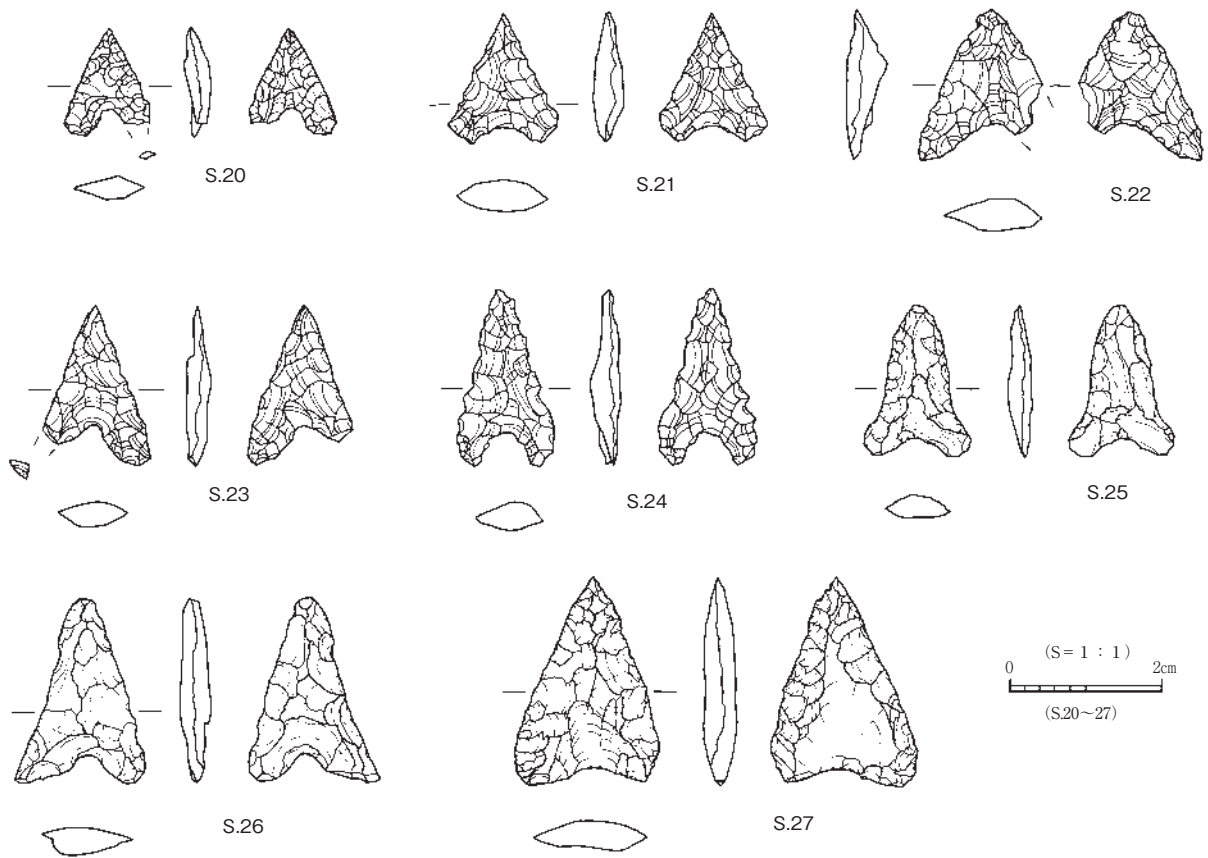
S. 9は長さ2.3cmの黒曜石製の石鏃である。S. 10～11はⅢ層から出土した黒曜石製の石鏃。S. 12・13はサヌカイト製の石鏃である。S. 14は、黒曜石製の石鏃未製品か。S. 15は、直径0.8cm、厚さ0.2cmの滑石製の小玉である。S. 16とS. 17は、敲打痕の残る凹石で、S19は半分欠損している。S. 18は、長さ15.6cm、幅12.7cm、重さ1,355.1gを測る、凝灰岩質頁岩製の石核である。S. 19は、凝灰岩製の磨製石斧の刃部片である。

## 第8節 II層出土の石器（第61図）

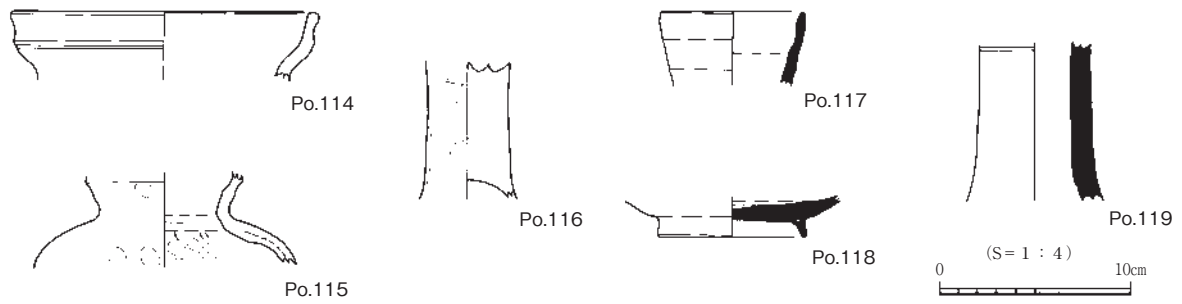
II層から出土した石器は、石鏃などの剥片石器と礫石器、石鋤である。S. 20～24は、黒曜石製の石鏃。S. 25・26は、サヌカイト製の石鏃。S. 27は、玉髓製の石鏃である。S. 28～30は、敲打痕の残る凹石で3点ともデイサイト製である。S. 31は、線状の擦痕が残る安山岩製の円礫で、骨角器などの製作に用いられたものか。S. 32は、花崗岩製の石鋤である。



第60图 谷部 IV・Ⅲ層出土石器图



第61図 谷部 II層出土石器図

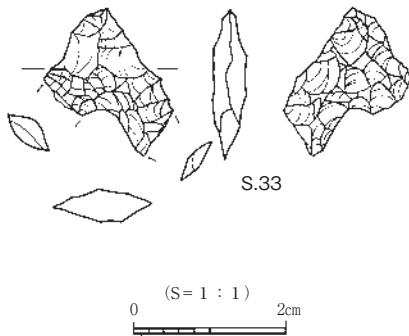


第62図 谷部 II・I層出土土師器・須恵器図

### 第9節 II・I層出土の土師器・須恵器・石器 (第62・63図)

II・I層から出土した遺物は、大半が丘陵上から転落してきたものと考えられる。

Po. 114は、退化した複合口縁型の土師器甕である。Po. 115は土師器直口壺の頸部で、内面には指押さえの痕が残る。Po. 116は土師器高坏の脚柱部。Po. 117は、調査区断面の精査中に出土した、須恵器の提瓶か平瓶の口縁部片である。Po. 118は、高台を持つ須恵器の坏身。Po. 119は須恵器長頸壺の頸部である。S. 33は、排土中から採集した黒曜石製の石鏃である。



第63図 谷部 表採石器図

# 第5章 自然科学分析

## 第1節 坂長伯楽塚遺跡におけるテフラ分析

(株)火山灰考古学研究所

### 1. はじめに

中国地方北部に位置する鳥取県西部には、大山や三瓶など中国地方に位置する火山のほか、九州地方などの火山に由来するテフラ（tephra、いわゆる火山灰）が分布している。それらの多くについては、すでに年代や岩石記載の特徴が明らかにされており、層位関係を把握することで、地形や地層の形成年代のみならず、遺構や遺物包含層の年代などについても明らかにできるようになっている。このようにテフラを時空指標とする火山灰編年学は、わが国の第四紀研究を特徴づける方法になっている。

坂長伯楽塚遺跡の発掘調査でも、谷部において層位や年代が不明な厚い腐植質土層が認められたことから、火山灰編年学の手法をもちいて調査分析を行うことになった。最初に地質調査を実施して、土層の特徴と層序の記載を行い、高純度の室内分析用試料の採取を実施した。その後、実験室内で火山ガラス比分析、重鉍物組成分析、火山ガラスおよび鉍物（角閃石）の屈折率測定を実施した。調査対象となった地点は、北部深掘トレンチと南部深掘トレンチの2地点で、前者の試料について分析測定を行った。

### 2. 土層の層序

#### 1) 北部深掘トレンチ

とくに腐植質土層をよく観察できた北部深掘トレンチでは、下位より褐色土（層厚15cm、7層）、黒褐色土（層厚12cm、6g層）、暗褐色土（層厚10cm、6f層）、黄色土ブロックに富む褐色土（層厚12cm、6e層）、黒褐色土（層厚8cm、6d層）、黄色礫を含む暗灰褐色土（層厚22cm、礫の最大径3mm、6c層）、黄色礫を含む灰褐色土（層厚10cm、礫の最大径7mm、6b層）、暗灰褐色土（層厚8cm、6a層）、黄色礫を含む黒色土（層厚32cm、礫の最大径6mm、5b層）、黄色礫を含む黒褐色土（層厚7cm、礫の最大径7mm、5a層）、わずかに灰色がかった褐色土（層厚7cm、4c層）、黄色がかった褐色土（層厚12cm）、わずかに灰色がかった褐色土（層厚10cm、以上4b層）、暗灰色土（層厚12cm）、黄色がかった灰褐色土（層厚12cm、以上4a層）、黒灰褐色土（層厚23cm、3層）が認められる（図1）。

これらのうち、4b層および4c層から縄文時代早期の遺物が検出されている。また、4a層からは縄文時代晩期の遺物が検出されている。

#### 2) 南部深掘トレンチ

斜面の上方に位置する南部深掘トレンチでは、下位より黒色土（層厚20cm以上）、黒灰褐色土（層厚13cm）、褐色土（層厚14cm、4b層）、灰褐色土（層厚11cm、4a層?）、暗褐色土（層厚11cm、4a層?）、わずかに褐色がかった黒色土（層厚22cm、3層）、黒色土（層厚29cm、2層）、暗灰褐色土（層厚15cm、1層）が認められる（図2）。

### 3. 火山ガラス比分析

#### (1) 分析試料と分析方法

北部深掘トレンチにおいて、土層の層界をまたがないように基本的に5 cmごとに設定採取された試料のうち、18点を対象に火山ガラス比分析を実施して、火山ガラスで特徴づけられるテフラの降灰層準を求めた。火山ガラス比分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料12gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置を用いながら、ていねいに泥分を除去。
- 3) 80℃で恒温乾燥。
- 4) 1/4～1/8 mmおよび1/8～1/16mmの粒子を篩別。
- 5) 偏光顕微鏡下で250粒子を観察し、火山ガラスの色調形態別含有率や、軽鉱物や重鉱物の含有率を求める。

#### (2) 分析結果

北部深掘トレンチにおける火山ガラス比分析の結果を、ダイヤグラムにして図2に、その内訳を表1に示す。北部深掘トレンチでは、試料12から試料10にかけて火山ガラスが多く含まれており、火山ガラスの出現ピークが認められる。とくに火山ガラスの含有率が高いものは試料10 (14.8%) で、含有率が高い順に無色透明のバブル型 (9.6%)、淡褐色および褐色のバブル型 (各2.0%)、繊維束状軽石型 (1.2%) の火山ガラスが含まれている。同様に火山ガラスの含有率が高い試料12 (12.8%) でも、無色透明や淡褐色、それに褐色のバブル型ガラスが多く、試料10と同じテフラに由来する火山ガラスが多く含まれていると考えられる。

そのほかには、試料6でやや多くの火山ガラスが認められる (15.2%)。この試料に含まれる火山ガラスは、含有率が高い順に無色透明のバブル型 (8.4%)、繊維束状軽石型 (2.8%)、スポンジ状軽石型 (2.0%)、淡褐色のバブル型 (1.6%)、分厚い中間型 (0.4%) で、繊維束状軽石型やスポンジ状軽石型の火山ガラスがやや目立つ。なお、試料30でも、上下の試料と比較して無色透明のバブル型ガラスの含有率がやや高い傾向にある (7.6%)。

### 4. 重鉱物組成分析

#### (1) 分析試料と分析方法

火山ガラス分析後の北部深掘トレンチの試料のうち、明色の土層を中心とした、試料10、試料9、試料8、試料6、試料4の5点を対象として、偏光顕微鏡下で1/4～1/8 mm粒径の重鉱物250粒子を観察して、重鉱物組成を求めた。

#### (2) 分析結果

北部深掘トレンチにおける重鉱物組成分析の結果をダイヤグラムにして図3に、その内訳を表2に示す。分析対象試料では、全体として角閃石、不透明鉱物(黒色で光沢のあるもの：おもに磁鉄鉱)、斜方輝石、雲母(おもに黒雲母)が含まれており、試料によっては単斜輝石が認められる傾向にある。分析対象試料の中では、特定の鉱物の顕著な濃集は認められないが、試料6においてやや角閃石の含有率が高い (75.6%)。



## 5. 屈折率測定

### (1) 測定試料と測定方法

指標テフラとの同定精度を向上させるため、北部トレンチの試料10と試料6に含まれる火山ガラス (nd) と角閃石 ( $n_2$ ) の屈折率の測定を実施した。前者は1/8-1/16mm粒径、また後者は $> 1/4$  mmの角閃石を軽く粉碎したものを測定対象とした。測定には、温度変化型屈折率測定装置 (京都フィッショントラック社製RIMS2000) を利用した。

### (2) 測定結果

火山ガラスと角閃石の屈折率測定の結果を、遺跡周辺に降灰している後期更新世後半以降の指標テフラの屈折率特性と合わせて表2に示す。北部トレンチの試料10に含まれる火山ガラス (30粒子) の屈折率 (nd) は、1.498-1.512である。また、角閃石 (60粒子) の屈折率 ( $n_2$ ) は、1.658-1.662 (20粒子) と、1.672-1.678 (40粒子) である。一方、試料6に含まれる火山ガラス (30粒子) の屈折率 (nd) は、1.498-1.511である。この試料の火山ガラスの屈折率特性はtrimodalで、実際にはndが1.498-1.502 (20粒子)、1.505 (1粒子)、1.507-1.511 (9粒子) の値からなる。(15粒子) の屈折率 (n) は、1.496-1.512である。また、角閃石 (60粒子) の屈折率 ( $n_2$ ) は、1.655-1.661 (20粒子) と1.671-1.678 (40粒子) である。いずれにおいても、屈折率が低いものはカミングトン閃石、高いものは普通角閃石である。

## 6. 考 察

### (1) テフラの降灰層準とテフラの同定

北部深掘トレンチの試料12 (5b層上部) から試料10 (5a層) に多く含まれる火山ガラスは、有色のバブル型ガラスで特徴づけられることや屈折率特性 (nd: 1.508-1.512程度) などから、約6,300年前<sup>\*1</sup>に南九州の鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah、暦年較正年代: 約7,300年前、町田・新井、1978、1992、2003) と考えられる。その出現ピークあるいは含有率の急増層準をK-Ahの降灰層準とするならば、試料12あるいは試料10がK-Ahの降灰層準となる。なお、重鉍物組成分析で検出された単斜輝石の多くも、K-Ahに由来する可能性がある。

北部深掘トレンチの試料10 (5a層) に含まれる普通角閃石の屈折率特性は、大山系や三瓶系の後期更新世テフラによく認められる。ただし、カミングトン閃石については、大山松江軽石 (DMP、 $< 13$  万年前、町田・新井、1979、2003) や、三瓶浮布テフラ (SUK、約2~2.1万年前、林・三浦、1987、三浦・林、1991など) でのみ認められる (町田・新井、1992、2003)。屈折率測定で検出されたnd: 1.505-1.507の火山ガラスは、SUKに由来する可能性が高いことから、カミングトン閃石についてもSUKに由来するようと思われる。

さらに、バブル型ガラスの中には、屈折率特性も考慮すると、約2.4~2.5万年前<sup>\*1</sup>に南九州の始良カルデラから噴出した始良Tn火山灰 (AT、暦年較正年代: 約2.8~3.0万年前、町田・新井、1976、2003、早田、2010) 起源の火山ガラスが混在している可能性もある。ATに由来する可能性が高い無色透明のバブル型火山ガラスの含有率は試料30 (6f層) 付近でやや高いものの、その下位でも検出されることから、降灰層準はさらに下位にあると推定される。

一方、試料6 (4b層) に含まれる火山ガラスや角閃石の特徴も、試料12 (5b層上部) のそれに良

く似ている。ただ、さほど顕著ではないものの、ここにバブル型以外の火山ガラスや角閃石の出現ピークがあることから、それらのテフラ粒子で特徴づけられるテフラの降灰層準のある可能性が指摘される。山陰地域でK-Ahより上位のテフラとしては、約4,800~5,000年前<sup>\*1</sup>の角井テフラ（中村唯史氏談）と、約3,700年前<sup>\*1</sup>に三瓶大平山テフラ（SOh、 $n_2$ : 1.673-1.688、松井・井上、1971、草野・中山、1999、町田・新井、1992、2003）の2層の三瓶系テフラの存在が知られている。前者については、ここでは早田（2011）に従い、三瓶角井テフラ（STn）と呼ぶ。STnの岩石記載的特徴は不明であるが、SOhと試料6に含まれるテフラ粒子の特徴は少し異なるように見える。このことから、試料6付近に降灰層準がありそうなテフラはSTnかも知れない。ただ、同層準のカミングトン閃石については、SUk起源の可能性も否定できないことから、現段階での同定精度は高いとは言えない。

今後、火山ガラスや鉱物の屈折率測定や主成分化学組成分析などにより、STnに関する岩石記載学的特徴把握を行うとともに、テフラの分布調査を実施して、テフラの同定精度を向上させる必要がある。

## (2) 明色土層の成因について

坂長伯楽塚遺跡の発掘調査では、谷部の腐植質土層の中の複数の層準に、明色の土層が認められた。北部深掘トレンチでは、6e層、6b層、5a層~4b層、4a層上部がそれに相当する。これらのうち、5a層に関してはK-Ahの降灰層準にあたることから、テフラの降灰が明色の土層の形成に効いている可能性が指摘される。しかしながら、その上位の4c~4b層ではバブル型ガラスの含有率がさほど高くないことから、これらの土層の形成にテフラ降灰はさほど関与していないように思われる。一方、6e層では、黄色土がブロック状に多く混在していることから、丘陵頂面に堆積している褐色火山灰土（いわゆるローム層）に由来する斜面堆積物の可能性が高い。

これらの明色土の土層の形成には、当時の人々による開発、植生変化、さらに地震による斜面崩壊などが関係している可能性があることから、微化石分析含め、多方面から土層の形成要因に関する検討が行われると良い。

## (3) 指標テフラと遺物包含層との層位関係について

発掘調査によって、4c層および4b層から縄文時代早期の遺物が検出されていることは、K-Ahとの層位関係だけからは問題があるようにも見えるが、実際にはこれら包含層は斜面堆積物の可能性が高いことから、丘陵頂面にあった遺物がK-Ah降灰後に発生したマス・ムーブメントによって谷部に移動し、斜面堆積物中に混在したものと推定される。

なお、4a層から検出された縄文時代晩期の遺物については、その下位の4b層上部にSTn（あるいはSOh）の降灰層準があると考えられることと矛盾しない。今後、この試料に含まれる重鉱物の組成や屈折率特性を明らかにして、その起源をより明確にする必要がある。

## 7. まとめ

伯耆町坂長伯楽塚遺跡の発掘調査区のうち谷部において、地質調査を実施して土層層序の記載と分析試料の採取を実施するとともに、火山ガラス比分析、重鉱物組成分析、火山ガラスおよび鉱物（角閃石）の屈折率測定を実施した。その結果、下位より始良Tn火山灰（AT、約2.8~3.0万年前）、三瓶浮布テフラ（SUk、約2~2.1万年前）、鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah、約7,300年前）、三瓶角井テ

フラ (STn、約4,800~5,000年前<sup>\*1</sup>) あるいは三瓶太平山テフラ (SOh、約3,700~3,800年前<sup>\*1</sup>) など由来するテフラ粒子やその降灰層準を検出することができた。

\*1：放射性炭素 (<sup>14</sup>C) 年代。

#### 文献

林正久・三浦清 (1987) 三瓶火山のテフラ層序とその分布. 島根大学山陰地域研究 (自然環境)、3、p. 43-66.

草野高志・中山勝博 (1999) ブロックアンドアッシュフローの堆積過程 (予察). 島根県三瓶火山の大平山火砕流堆積物の例. 火山、44、p. 143-156.

町田洋・新井房夫 (1976) 広域に分布する火山灰—始良Tn火山灰の発見とその意義. 科学、46、p. 339-347.

町田洋・新井房夫 (1978) 南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ—アカホヤ火山灰. 第四紀研究、17、p. 143-163.

町田洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス. 東京大学出版会、276 p.

町田洋・新井房夫 (2003) 新編火山灰アトラス. 東京大学出版会、336 p.

松井整司・井上多津男 (1971) 三瓶火山の噴出物と層序. 地球科学、25、p. 147-163.

三浦清・林正久 (1991) 中国・四国地方の第四紀テフラ研究—広域テフラを中心として—. 第四紀研究、30、p. 339-351.

早田勉 (2010) 更新世堆積物とテフラ. 稲田孝司・佐藤宏之編「講座日本の考古学1 旧石器時代上」、青木書店、p. 77-102.

早田勉 (2011) 広島県庄原市高野町上深石動植物遺体包含地の地質層序とテフラ. 広島県庄原市教育委員会編「広島県庄原市高野町所在の動植物遺体包蔵地の調査—和南原・上深石山—」、p. 13-21.

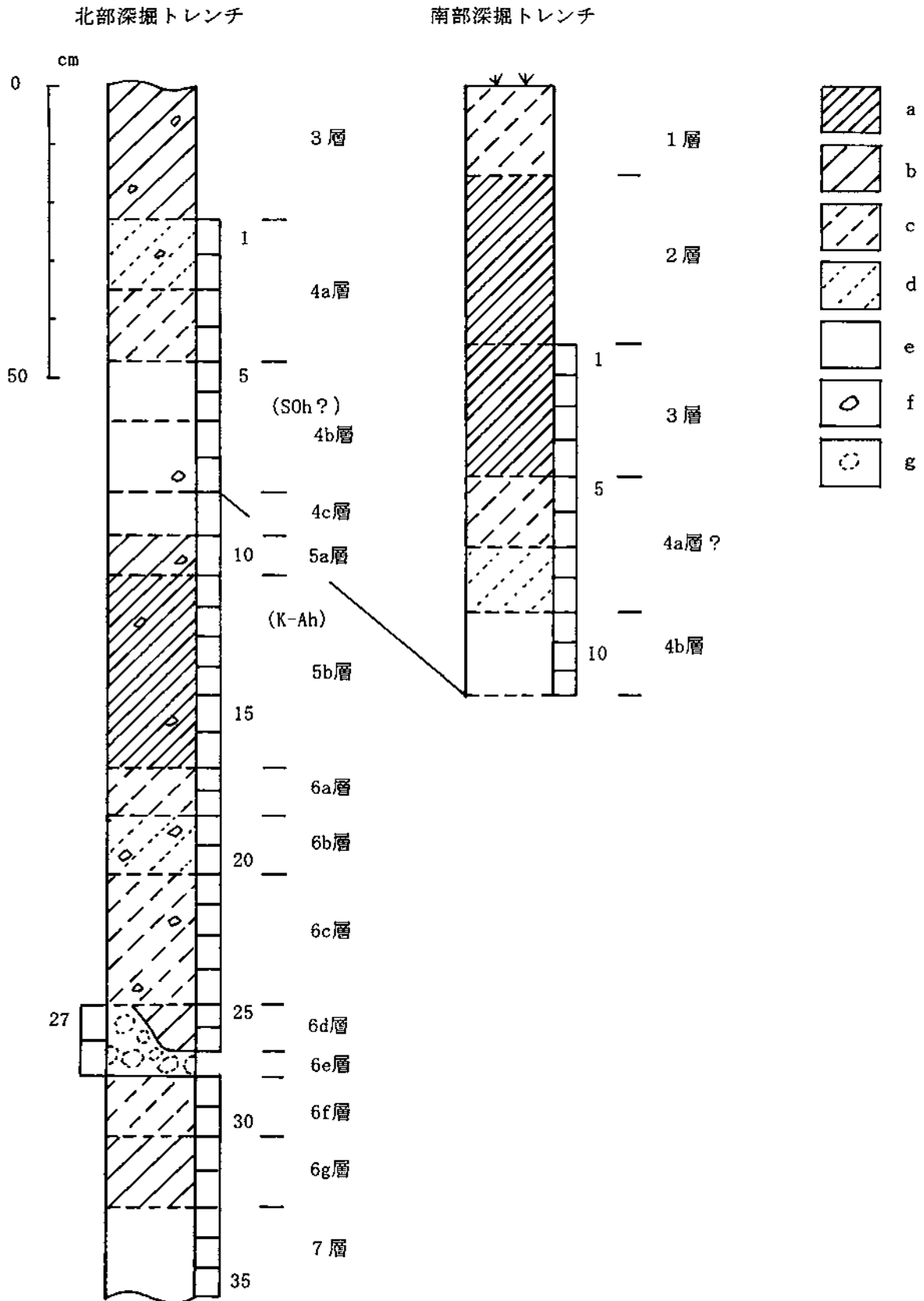


図1 伯楽塚遺跡の土層柱状図

数字はテフラ分析の試料番号。

a : 黒色土、b : 黒灰～黒褐色土、c : 暗灰～暗褐色土、d : 灰褐色土、e : 褐～黄色土、f : 礫、g : 黄色土ブロック

火山ガラス比

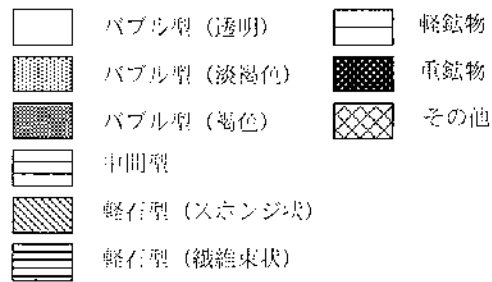
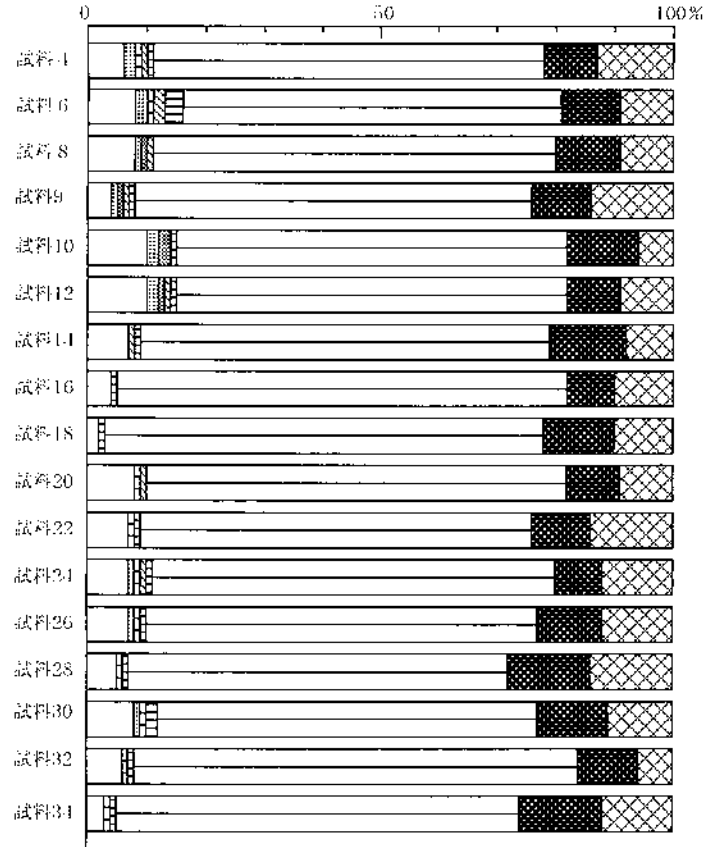


図2 火山ガラス比ダイアグラム

重鉱物組成

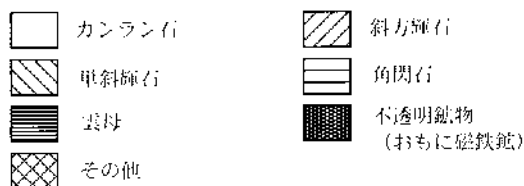
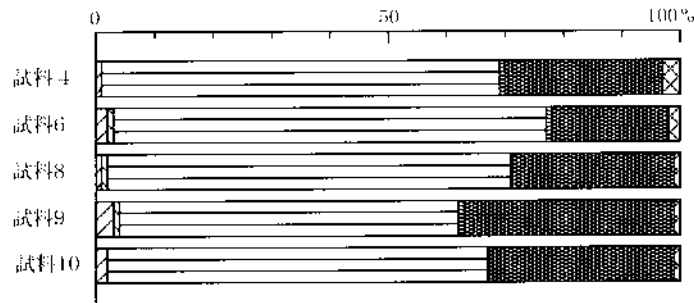


図3 北部深掘トレンチの重鉱物組成ダイアグラム

表1 北部深掘トレンチにおける火山ガラス比分析結果

試料	bw (cl)	bw (pb)	bw (br)	md	pm (sp)	pm (fb)	軽鉱物	重鉱物	その他	合計
4	13	4	0	2	3	2	169	24	33	250
6	21	4	0	1	5	7	164	25	23	250
8	20	2	1	0	2	2	173	27	23	250
9	10	3	2	0	0	3	169	24	39	250
10	24	5	5	0	0	3	168	29	16	250
12	22	5	2	0	1	2	169	23	26	250
14	17	0	0	0	1	1	179	32	20	250
16	11	0	0	0	0	3	189	20	27	250
18	6	0	0	0	0	3	182	31	28	250
20	20	0	0	2	1	0	180	23	24	250
22	14	0	0	2	0	2	167	26	39	250
24	18	1	0	1	2	1	176	19	32	250
26	18	1	0	1	0	2	172	27	29	250
28	12	0	0	2	0	2	163	34	37	250
30	19	1	0	2	0	4	164	30	30	250
32	15	0	0	2	0	2	192	24	15	250
34	8	0	0	2	0	2	172	35	31	250

bw：バブル型、md：中間型、pm：軽石型、cl：透明、pb：淡褐色、br：褐色、sp：スポンジ状発泡、fb：繊維束状発泡。数字は粒子数。

表2 北部深掘トレンチにおける重鉱物組成分析結果

試料	ol	opx	cpx	am	bi	opq	その他	合計
4	0	3	0	170	2	68	7	250
6	0	4	1	189	1	49	6	250
8	0	3	1	172	0	71	3	250
9	0	8	2	147	1	89	3	250
10	0	6	0	163	0	79	2	250

ol：カンラン石、opx：斜方輝石、cpx：単斜輝石、am：角閃石、bi：黒雲母、opq：不透明鉱物（おもに磁鉄鉱）。数字は粒子数。

表3 屈折率測定結果

地点名	試料・テフラ	火山ガラス		斜方輝石		角閃石	
		屈折率 (nd, n)	測定点数	屈折率 ( $\gamma$ )	測定点数	屈折率 (n2)	測定点数
伯楽塚遺跡	北部深掘トレンチ・試料6	1.498-1.511 (1.498-1.502) (1.505) (1.507-1.511)	30 (20) (1) (9)			1.655-1.678 (1.655-1.661) (1.671-1.678)	60 (20) (40)
	北部深掘トレンチ・試料10	1.498-1.512	(30)			1.658-1.678 (1.658-1.662) (1.672-1.678)	60 (20) (40)
指標テフラ	三瓶大平山 (SOh)					1.673-1.688	
	鬼界アカホヤ (K-Ah)	1.508-1.516		1.708-1.713			
	大山鏡ヶ平 (DKg)			1.703-1.707		1.671-1.676	
	大山弥山 (DMs)	1.507-1.510		1.703-1.707		1.670-1.675	
	大山東丸山 (DHg)	1.505-1.508		1.703-1.707		1.676-1.689	
	大山笹ヶ平 (DSs)	1.501-1.504		1.703-1.707		1.674-1.678	
	三瓶浮布 (SUK)	1.505-1.507				1.671-1.675 (oxy. ho : >1.695) (cum : 1.660-1.665)	
	始良Tn (AT)	1.498-1.501		1.728-1.734			
	大山鴨ヶ丘 (DKm)					1.668-1.675	
三瓶池田 (SI)	1.502-1.505				1.670-1.676		

屈折率測定は、温度変化型屈折率測定装置 (MAIOT) による。指標テフラの屈折率特性は町田・新井 (2003)。角閃石の屈折率特性は普通角閃石。Oxy.ho：酸化角閃石、cum：カミングトン閃石。

## 第6章 坂長伯楽塚遺跡発掘調査の総括

### 第1節 坂長伯楽塚遺跡出土の縄紋土器

坂長伯楽塚遺跡の調査では、谷部から縄紋時代早期の押型紋土器が多数出土した。これらの押型紋土器は、高山寺式を最古として、穂谷式、宮の平式が見られる。米子市内では、上福万遺跡が早期の押型紋土器を主体とする遺跡として広く知られており、早期の土器片だけで33,600点もの資料数を誇っているが、今回の調査で新たに出土した土器は、少量ながらも年代的にもまとまった資料であり、中国地方では類例の少ない穂谷式土器の編年を補強する上で重要な資料になると考えられる。

坂長伯楽塚遺跡から出土した土器の中では、楕円押型紋を施す厚手の深鉢（Po. 20）が最も古層を示す資料であり、高山寺式のものが見られる。この他にも内面に斜行沈線を施すものがあり、これらも高山寺式土器の範疇に収まる資料である。ただし、出土した土器の中でもこの種の土器は数点程度しか出土しておらず、高山寺式土器が主体的な存在であったとは言い難い。そして、最下層のⅣ層から出土したものでは、穂谷式のもの最も新しい資料であり、これらを被覆するⅢ層からは、高山寺式、穂谷式、宮の平式のもの出土している。このように、出土した土器を見ると穂谷式土器が主体を占めていることから、年代的にもかなり限定された時期の遺物群と考えられる。

しかしながら、これらの遺物が出土したⅢ層はテフラ分析の結果から、鬼界アカホヤ火山灰（7,300年前）の降灰層を被覆する明色土であり、縄紋時代早期前半から中頃と推測される高山寺式土器～穂谷式土器の年代観からすると層位的に逆転してしまうが、地震による斜面崩壊や土砂崩れなどの自然災害によって生じた再堆積層の可能性が高いと考えられる。このように、坂長伯楽塚遺跡から出土した縄紋時代早期の土器は、層位的に良好な一括資料とは言い難いが、全国的に見ても類例の少ない穂谷式土器が中心となる数少ない遺跡と考えられる。

今回坂長伯楽塚遺跡から出土した土器と、上福万遺跡の土器を比較した場合、どのような違いが見出せるのか比較してみると、上福万遺跡から出土する縄紋時代早期の土器のうち、古い様相を持つものは、薄手の器壁に山形紋や楕円紋を横位施紋するグループで、これらは黄鳥式に相当する土器群と考えられるが、坂長伯楽塚遺跡からは未検出であり、今のところ、黄鳥式段階の資料は存在しないと言える。

上福万遺跡では、続く高山寺式の資料が最も多く、沈線紋土器が一定量出土している。上福万遺跡では層位的な分類が出来なかったが、型式学的な分類により、高山寺式土器を三時期に細分されている。ここでは、Po. 35～38が該当するが、紋様は楕円紋と網目紋のみでありバリエーションが少ないが、Po. 36は口縁端部が短く屈曲し、口縁直下に1条の沈線が巡っており、高山寺式土器の中でも、より新しい要素と見られる。

この他に、上福万遺跡で見られた要素と共通するものは、山形紋、沈線紋、貝殻施紋、刺突紋を持つグループである。これらの土器は、高山寺式に続く穂谷式の資料と考えられる。このうち、坂長伯楽塚遺跡で主体を占めるのは、山形紋と沈線紋土器であり、それ以外の土器は出土点数が極めて少ない。山形紋では、細片資料のため全形が分からないが、縦位に施紋されるものが多いと推測され、口縁端部には突帯を貼り付け、口縁内面に押型紋を施すものがある（Po. 40、41、106）。

沈線紋土器では、完形品にまで復元できる資料に恵まれなかったが、口縁部や胴部に突帯を貼り付けて刺突を施すものが多い。上福万遺跡の沈線紋土器では、押引沈線紋を二段ないし数段に亘って施すものが主体的と見られるが、坂長伯楽塚遺跡の資料では押引沈線紋が欠落している。

沈線紋の紋様について見てみると、三角形の区画紋を意識したものが大多数を占めるが、縦位に沈線を施すもの（Po. 64、81）も見られたことから、縦、横、斜めへの三方向への沈線施紋が基本となるようだ。施紋具のバリエーションでは、①円形の棒状工具を軽く押しあてて施紋するものと、②ヘラ状の工具で深く溝状に彫り込むもの（Po. 79）、③細い櫛状の工具を用いるもの（Po. 80）の三種が混在しているが、坂長伯楽塚遺跡では、①が多数を占めている。このように、紋様の構成については共通する要素が見られるが、施紋具のバリエーションに違いが見出せる。今のところ、時期的な変化を示すものかどうかは分からないが、土器紋様のパターンと使用される施紋具がどのように変化していくのか、注意すべき点と考える。なお、坂長伯楽塚遺跡から出土した沈線紋土器では内面斜行沈線を施すものは見られなかったが、上福万遺跡では3点確認されており、内面斜行沈線の欠落が上福万遺跡よりも後出する要素となる可能性がある。

それから、沈線紋土器に見られる突帯の貼付手法には、細い粘土紐を用いるものと（Po. 24、25）、带状の突帯を貼り付け、中央部に沈線を巡らせて2条突帯風に貼り付けるもの（Po. 54～57）があることを確認した。写真1～3に、Po. 54の突帯の貼り付け方を復元した写真を示す。

上福万遺跡の資料では、突帯を持つ沈線紋土器が非常に少なく、带状に突帯を貼り付ける資料も見られないことから、坂長伯楽塚遺跡資料と単純に比較することが出来ないが、これが時期的な変化を示すのか、外来的な要素が影響しているのか、今後の検討課題と考える。



写真1 带状に突帯を貼り付ける



写真2 突帯に刻みを施す



写真3 突帯の中央に沈線を巡らす



それから、もう一つ問題となるのは、標高の高い丘陵山地の谷部からまとまった数の土器が出土した理由についてである。坂長伯楽塚遺跡は、調査した尾根部で標高が100m近くもある山深い場所であり、丘陵部は古墳時代と奈良時代に地形改変を受けているため縄紋時代の遺物包含層は残っていなかったが、検出された遺構も陥穴のみであり、生活を営むには不便な場所ではなかったのだろうか。

そのような環境ではあるが、谷部からかなりの点数の石鏃が出土していることと、丘陵部からたくさんの陥穴が見つまっていることから、縄紋時代早期と断定できないまでも、この地が縄紋時代を通じて狩猟の場として利用されてきたことは明らかであろう。

常識的に集落のすぐそばに陥穴を掘ることは考えにくいけれども、陥穴の時期を問わなければ、今回調査した地点のすぐ南側の丘陵上に、これら狩猟活動を行う際のキャンプサイトが存在した可能性があろう。当時の植生や気候環境が明確ではないため、あくまでも想像の域を出ないが、出土した土器が時期的に限定されうることと、出土した遺物の中でも石鏃の比率が高い点も、こうした考えを補強する材料になると考えられる。今回の調査での最大の成果は、人里離れた山の中でも未知の縄紋集落が存在する可能性を示した点にある。

## 第2節 伯楽塚古墳群の調査成果

伯楽塚古墳群は16基からなる群集墳であったが、今回の調査で新たに5基の古墳周溝を検出したことから、総数21基の古墳群であることが判明した。そして、調査地のすぐ南側の同一尾根上には越敷山112号墳が所在していることから、伯楽塚古墳群も越敷山古墳群と一連の群集墳群と考えられる。

越敷山周辺では、越敷山古墳群を始めとして、伯楽塚古墳群、越敷野原古墳群が分布しているが、これら古墳群は全て越敷山から伸びる尾根上に連続して展開しており、それぞれの尾根で小支群ごとのグループ分けをすることが必要と考える。

今回実施した伯楽塚古墳群の調査で判明した事実を列挙すると、以下の特徴が抽出される。

- ①直径10m未満の円墳が主体的だが、方墳も存在する。
- ②周溝を持つ古墳でも、中心埋葬は土壙墓である。
- ③頭位は東・東南が多い。
- ④古墳の周溝内、特に南東部に供献土器が置かれている事例が多い。

これらのうち、①については、一部しか周溝が残っていない古墳は復元的に円墳と想定したものはあるが、伯楽塚18号墳は方墳の可能性が高く、一つの古墳群で円墳と方墳が混在していたと考えられる。このような事例は、日下古墳群でも確認されているが、墳丘形態の違いが時期差や階層性の違いなど、どのような背景によって生じているのかまでは言及されていない。

②については、周溝が確認された古墳で埋葬施設が残っていたものでは、全て木棺痕跡が見られなかったが、これらが全て土壙墓であったとしても、伯楽塚20号墳の中心主体部は長さ3m近い掘形を持つものであり、周辺の埋葬施設と比べても突出した規模を誇る。それと比較して、石棺は全て小規模なものが中心であり、副葬品を持つものは無かった。石蓋土壙墓についても小型のものが中心であり、子供用の埋葬施設であった可能性が高い。

なお、石棺を組み合わせて設置する際に、現地でどのような加工が行われたかについては、石棺の周辺や墓壇の掘形内から石を割った際の石屑などが出土していないことから、石を切り出した段階でかなりの部分まで加工して現地まで運んでいる可能性が考えられる。

③の頭位については、石枕を持たないものでは断定できないが、周溝を持つ古墳では東西方向を意識したものが多く、それ以外の周辺埋葬では南東-北西方向が多い。調査開始当初は大山の方向を意識していると考えたが、全ての埋葬施設が大山山頂に向かって真っすぐ造られている訳ではないため断定できない。むしろ、地形的な制約も大きな要因である可能性が高い。

④については、平成25年度に実施した隣接地の調査でも同様の成果が得られており、墳墓祭祀において明確に定められた土器供献儀礼の存在を示しているように思われる。しかし、越敷山古墳群以外では、古墳の周溝内から完形品の供献土器がまとまって見つかる事例は珍しく、規則性を窺わせるような良好な資料は少ない。伯楽塚古墳群・越敷山古墳群で認められる土器供献儀礼を、どの範囲にまで一般化出来るかという問題については、周辺地域での類例を積み重ねて検討する必要がある。

ところで、これらの古墳群を造った集落はどこにあったのか、周辺では当該期の集落遺跡の検出例が少なく、集落と墳墓のセットで捉えられる事例は少ないが、集落から古墳が見える範囲に求めるのが理想的であろう。古墳時代中期の集落立地は、米子市の長砂第3遺跡で見られたような丘陵斜面に段状のテラスを形成して竪穴建物を建てる事例がある。長砂第3遺跡では、逆に墓域がどこにあるのか分からなかったが、同一丘陵を北に1 kmほど遡った場所にほぼ同時期に造営された東宗像古墳群があることから、この付近に奥都城を定めたものと推測されている。越敷山周辺には、北側の長者原台地の縁辺や斜面地に集落適地があることから、この付近に大規模な古墳群を形成する母体となった集落があったと推測される。

### 第3節 道路状遺構について

今回の調査では、奈良時代の道路状遺構を確認した。このうち、保存状態の良い道路1については、南北方向に伸びる溝状の遺構であり、底面には雨水を浸み込ませる暗渠として機能したと見られる凹凸状の溝が掘られていた。最初から道路を尾根上の標高の高い場所を選んで通せば、このような雨水対策をする必要もないはずだが、この地点ではどうしても溝にならざるを得ない事情があったのであろう。

これについては、調査地が古墳の点在する山の尾根上にあり、ここに道を通すと勾配がきつくなるため、標高が高くなる場所を溝状に削ることで道路全体の勾配を緩くする工夫であったと考えた。発掘調査をした範囲はごく一部なので、調査区内は全て溝状の道路であったが、延長部では逆に盛土をして道路を造った地点もあるのではないか。

坂長伯楽塚遺跡から南へ1 kmの地点に位置している小町石橋ノ上遺跡では、平成8年度の調査で丘陵尾根の鞍部を埋める土手状の遺構が確認されている（第64図）。この時は性格不明の土塁状遺構とされたが、これも丘陵の鞍部を埋めて丘陵間の高低差をなくすための道路地業と考えれば、越敷山の山頂部に向かって南北方向に伸びる大規模な道路が存在したことになる。

ここで更に問題となるのは、この道路がどこからどこへ向かって造られたのかという疑問である。

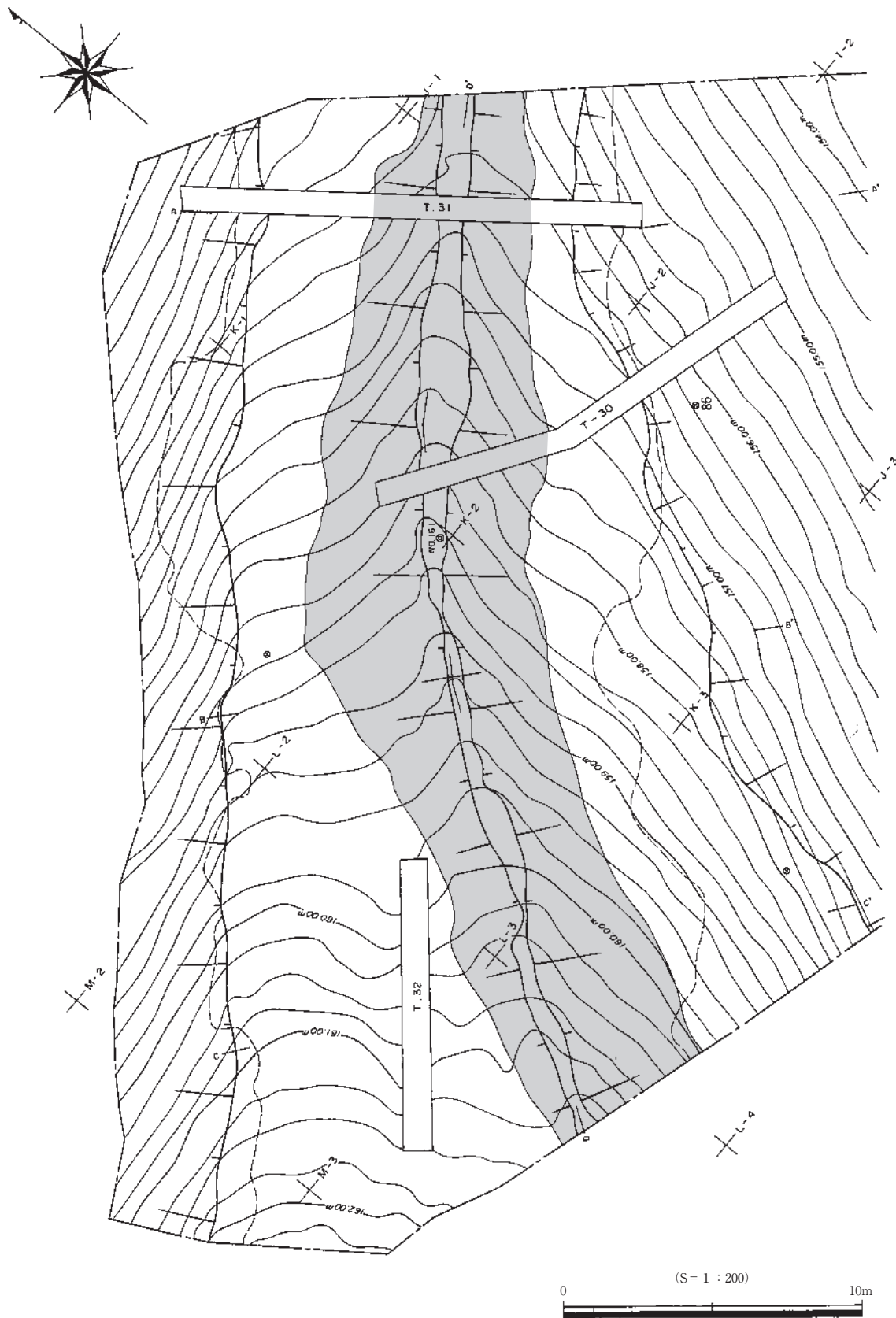
調査地の北西部に位置している長者原台地では、古代の会見郡衙跡と目されている長者屋敷遺跡をはじめとして、官衙関連の遺跡が集中して見つかっている。そして、この会見郡衙のそばには会見の駅家があったとされている。現在に至るまでこの駅家の跡は確認されていないが、会見郡衙とそれほど離れていない場所に存在した可能性が高いと推測される。そして、会見郡衙の所在する長者原台地は、そのまま南に向かうと、越敷山を超えて南部町の池野を経て伯耆町の三部へと繋がる。三部は古代における日野郡野上郷の遺称地であり、会見駅家から野上郷への道が伸びていたことは想像に難くない。また、日野川沿いを南へ通るルートを想定すると、河川の屈曲が多い上に支流からの流れ込みによって段丘が途切れた崖地が続くことから、道路を通すには適していなかったと考えられる。実際に、国道181号バイパスの工事に関連して金廻地区で実施された試掘調査では、礫層が厚く堆積している状況が確認されており、日野川の川床付近では常に安定した状態にあったとは言いがたい。

このような地理的な条件から、越敷山を通る道が、古代の日野郡へと至るルートとして整備されたものと考えたい。あるいは、越敷山山頂に烽火の中継点があったと仮定すれば、烽屋までの連絡ルートとして整備された可能性も出てくるのではないだろうか。このように、今回検出した道路遺構は、会見郡衙周辺では未解明のままとなっている古代道のルートと共に、烽火の中継ルートについても一考を促す資料と考える。

ちなみに、今回調査した道路の延長部分は、現在も窪地や土塁状の高まりとして旧状を留めている可能性があることから、分布調査によって道路の延長部分を確認することは可能である。ただし、越敷山一帯では太平洋戦争末期の本土決戦に備えて掘削された塹壕が各所に分布していることから、表面的にはこれらの遺構との区別が難しい。

#### 参考文献

- 1959年 佐々木謙「伯耆岸本坂中古墳群」『ひすい』60号 佐々木古代文化研究所
- 1983年 『岸本町史』岸本町史編さん委員会
- 1985年 長岡充展ほか『上福万遺跡』鳥取県教育文化財団
- 1991年 久保穰二郎「鳥取県出土の押型紋土器の様相」『鳥取県立博物館研究報告第28号』鳥取県立博物館
- 1992年 小原貴樹ほか『日下古墳群』米子市教育委員会
- 1996年 米子市史編さん協議会『新修米子市史』第13巻 米子市
- 1997年 中森 祥ほか『小町石橋ノ上遺跡』鳥取県教育文化財団



第64図 小町石橋ノ上遺跡の土塁状遺構

表1 伯楽塚遺跡出土土器・土製品・陶磁器観察表（残存・復元値は（ ）で表示）

遺物番号	地区遺構	層位	種別器種	法 量 (cm)			色 調	調 整		備 考
				口径	底径	器高		内 面	外 面	
Po. 1	伯楽塚18号墳南周溝	埋土中	土師器甕	13.7		(23.1)	橙褐色	ケズリ、ナデ	ハケ、ナデ	
Po. 2	伯楽塚19号墳南周溝	埋土中	土師器坏身	10.0		5.4	淡橙褐色	ナデ	ケズリ後ナデ	
Po. 3	伯楽塚19号墳南周溝	埋土中	土師器坏身	(12.6)		( 4.7)	淡橙褐色	風化	風化	
Po. 4	伯楽塚20号墳南東周溝	埋土中	土師器甕	(12.1)		11.5	橙褐色	ケズリ、ナデ	ハケ、ナデ	
Po. 5	伯楽塚20号墳南東周溝	埋土中	土師器高坏	14.0	8.1	10.7	橙褐色	ナデ	ナデ	
Po. 6	伯楽塚20号墳南東周溝	埋土中	土師器高坏	13.6	8.2	10.8	橙褐色	ナデ	ナデ	
Po. 7	伯楽塚20号墳南東周溝	埋土中	土師器高坏	13.6	7.9	10.3	橙褐色	ナデ	ナデ	
Po. 8	伯楽塚21号墳南周溝	埋土中	土師器高坏			( 5.6)	淡橙褐色	ケズリ、ナデ	ナデ	
Po. 9	土壙墓3	礫上	須恵器坏身	12.9		6.0	灰色	ナデ	回転ヘラケズリ、ナデ	ヘラ記号
Po. 10	土壙墓3	礫上	須恵器坏身	12.9		5.3	灰色～淡灰色	ナデ	回転ヘラケズリ、ナデ	
Po. 11	土壙墓4	埋土中	土師器坏身	(11.6)		( 2.5)	淡橙褐色	ナデ	ナデ	
Po. 12	道路1	埋土中	須恵器大甕			(10.7)	青灰色	ナデ	ナデ、波状紋	
Po. 13	道路1	埋土中	須恵器坏身	(13.3)	( 9.2)	4.0	淡青灰色	ナデ	底部糸切、ナデ	
Po. 14	道路2	埋土中	土師器坏身	(13.8)		( 3.2)	橙褐色	ナデ	風化	
Po. 15	道路2	埋土中	土師器坏身	(12.0)		3.0	黄灰褐色	ナデ	ナデ	
Po. 16	道路2	埋土中	土師器甕	(14.0)		( 3.8)	褐色	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	
Po. 17	D4区	表土	縄紋土器深鉢			( 4.8)	褐色	ナデ	貝殻条痕	
Po. 18	丘陵部	表土	須恵器高坏		(12.0)	( 2.3)	青灰色	ナデ	ナデ、カキメ	
Po. 19	C4区	表土	瓷器系陶器大甕			( 5.0)	暗褐色	ナデ	ナデ	高山寺式
Po. 20	F8区	IV層	縄紋土器深鉢			( 5.8)	橙褐色	ナデ、斜行沈線	楕円紋	
Po. 21	F8区	IV層	縄紋土器深鉢			( 3.4)	赤茶色	ナデ	山形紋	
Po. 22	F8区	IV層	縄紋土器深鉢			( 3.0)	灰褐色	ナデ	撚糸紋	
Po. 23	F8区	IV層	縄紋土器深鉢	(31.0)		( 3.2)	黄褐色	ナデ	突帯、刺突紋	

表2 伯楽塚遺跡出土土器・土製品・陶磁器観察表（残存・復元値は（ ）で表示）

遺物番号	地区遺構	層位	種別器種	法 量 (cm)			色 調	調 整		備 考
				口径	底径	器高		内 面	外 面	
Po. 24	F8区	Ⅳ層	縄紋土器 深鉢	(21.6)		( 3.6)	灰茶色	ナデ	突帯、刺突紋、 沈線紋	
Po. 25	F7区	Ⅳ層	縄紋土器 深鉢			( 5.0)	黄灰褐色	ナデ	突帯、刺突紋、 沈線紋	
Po. 26	F8区	Ⅳ層	縄紋土器 深鉢			( 4.0)	橙褐色	ナデ	沈線紋	
Po. 27	D8区	Ⅳ層	縄紋土器 深鉢			( 3.9)	黒茶色	風化	沈線紋	
Po. 28	F8区	Ⅳ層	縄紋土器 深鉢			( 4.5)	灰茶褐色	ナデ	沈線紋	
Po. 29	F8区	Ⅳ層	縄紋土器 深鉢			( 4.2)	茶褐色	風化	沈線紋	
Po. 30	F8区	Ⅳ層	縄紋土器 深鉢			( 3.1)	茶褐色	ナデ	沈線紋	
Po. 31	F8区	Ⅳ層	縄紋土器 深鉢			( 4.7)	灰茶色	ナデ	沈線紋	条痕紋の可能 性あり
Po. 32	F8区	Ⅳ層	縄紋土器 深鉢			( 2.2)	橙褐色	風化	山形紋	
Po. 33	F8区	Ⅳ層	縄紋土器 深鉢			( 2.6)	灰茶色	ナデ	刺突紋、沈線紋	
Po. 34	F8区	Ⅳ層	縄紋土器 深鉢			( 5.9)	橙褐色	条痕、ナデ	沈線紋	
Po. 35	F8区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢	(32.4)		(10.6)	橙褐色	ナデ	楕円紋	高山寺式
Po. 36	F7区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢	(31.8)		( 6.6)	褐色	ナデ	風化	高山寺式
Po. 37	F8区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢			( 3.4)	褐色	ナデ、 斜行沈線	楕円紋	高山寺式
Po. 38	F7区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢			( 4.3)	黄灰褐色	ナデ	網目紋	高山寺式
Po. 39	F8区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢			( 4.5)	黄灰褐色	ナデ	押引状沈線	
Po. 40	F8区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢		(26.6)	( 4.5)	黄橙褐色	ナデ、山形紋	突帯、刺突紋、 山形紋	穂谷式新段階
Po. 41	F7区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢			( 3.9)	灰褐色	ナデ、山形紋	突帯、刺突紋、 山形紋	
Po. 42	F7区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢			( 4.2)	黄褐色	ナデ	山形紋	
Po. 43	F8区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢			( 3.9)	橙褐色	風化	山形紋	
Po. 44	F8区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢			( 3.5)	茶褐色	風化	山形紋	
Po. 45	F7区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢			( 2.7)	橙褐色	ナデ	沈線紋	
Po. 46	F8区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢			( 4.4)	茶褐色	ナデ	山形紋	
Po. 47	F8区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢			( 5.9)	茶褐色	ナデ	山形紋	
Po. 48	C8区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢			( 5.0)	灰褐色	ナデ	山形紋	
Po. 49	F8区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢			( 8.5)	黄褐色	ナデ	山形紋	

表3 伯楽塚遺跡出土土器・土製品・陶磁器観察表（残存・復元値は（ ）で表示）

遺物番号	地区遺構	層位	種別器種	法 量 (cm)			色 調	調 整		備 考
				口径	底径	器高		内 面	外 面	
Po. 50	F7区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢・屈曲部			(4.6)	褐色	ナデ	山形紋	
Po. 51	F7区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢			(4.0)	黄褐色	ナデ	山形紋	
Po. 52	F8区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢・屈曲部			(6.9)	黄褐色	ナデ	山形紋	
Po. 53	F8区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢			(3.6)	茶褐色	ナデ	山形紋	
Po. 54	F8区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢	(32.2)		(5.0)	黄褐色	条痕、ナデ	突帯、刺突紋、 沈線紋	田戸式系
Po. 55	F7区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢	(20.1)		(2.4)	黄褐色	ナデ	突帯、刺突紋	
Po. 56	F8区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢	(21.0)		(2.8)	褐色	条痕、ナデ	突帯、刺突紋、 沈線紋	
Po. 57	F8区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢			(4.4)	褐色	ナデ	突帯、沈線紋	
Po. 58	F7区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢			(3.4)	黄褐色	ナデ	沈線紋	田戸式系
Po. 59	F8区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢			(2.6)	褐色	ナデ	沈線紋	田戸式系
Po. 60	F8区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢			(4.6)	外：灰褐色 内：褐色	ナデ	沈線紋	
Po. 61	F8区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢			(3.4)	茶褐色	ナデ	沈線紋	
Po. 62	F8区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢			(4.8)	灰褐色	ナデ	沈線紋	
Po. 63	F8区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢			(4.5)	黒茶色	風化、ナデ	沈線紋	
Po. 64	F8区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢			(4.7)	茶褐色	ナデ	沈線紋	
Po. 65	F8区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢			(3.5)	橙褐色	ナデ	沈線紋	
Po. 66	F8区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢			(3.0)	茶色	ナデ	沈線紋	
Po. 67	F7区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢			(2.5)	褐色	ナデ	沈線紋	
Po. 68	F8区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢			(3.9)	灰茶色	ナデ	突帯、刺突紋、 沈線紋	
Po. 69	F8区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢			(4.3)	褐色	ナデ	沈線紋	
Po. 70	F8区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢			(3.2)	橙褐色	ナデ	沈線紋	
Po. 71	C8区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢			(3.0)	橙色	ナデ	沈線紋	
Po. 72	F8区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢			(2.6)	橙褐色	ナデ	沈線紋	
Po. 73	F8区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢			(3.8)	橙褐色	風化、ナデ	沈線紋	
Po. 74	F8区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢			(3.7)	橙褐色	ナデ	沈線紋	
Po. 75	F8区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢			(6.0)	褐色	ナデ	沈線紋、刺突紋	

表4 伯楽塚遺跡出土土器・土製品・陶磁器観察表（残存・復元値は（ ）で表示）

遺物番号	地区遺構	層位	種別器種	法 量 (cm)			色 調	調 整		備 考
				口径	底径	器高		内 面	外 面	
Po. 76	F7区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢			( 3.6)	褐色	ナデ	沈線紋	
Po. 77	F8区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢			( 5.5)	黄灰褐色	ナデ	沈線紋	
Po. 78	F8区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢			( 5.4)	茶褐色	ナデ	沈線紋	
Po. 79	F8区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢			( 5.7)	褐色	風化、ナデ	沈線紋	黒斑
Po. 80	F7区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢			( 5.6)	暗橙褐色	ナデ	突帯、刺突紋、 沈線紋	
Po. 81	F8区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢			( 3.5)	赤茶色	ナデ	沈線紋	
Po. 82	C8区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢	(18.3)		( 3.6)	灰褐色	ナデ	沈線紋、ナデ	宮の平式
Po. 83	F8区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢			( 4.2)	褐色	ナデ	突帯、沈線紋	宮の平式
Po. 84	F8区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢			( 4.3)	褐色	条痕、ナデ	沈線紋	宮の平式
Po. 85	F8区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢			( 3.8)	茶褐色	風化	沈線紋	宮の平式
Po. 86	F8区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢			( 4.1)	褐色	風化	沈線紋	宮の平式
Po. 87	F7区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢			( 4.7)	黄褐色	条痕、ナデ	沈線紋	宮の平式
Po. 88	F7区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢			( 3.5)	灰褐色	条痕、ナデ	沈線紋	宮の平式
Po. 89	F7区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢			(10.0)	灰褐色	条痕	沈線紋	宮の平式
Po. 90	C8区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢			( 4.8)	褐色	条痕、ナデ	沈線紋	
Po. 91	F7区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢	(25.1)		( 6.6)	暗褐色	ナデ	貝殻殻表圧痕紋	
Po. 92	F8区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢			( 3.8)	黄灰褐色	風化	突帯、刺突紋、 縄紋？	
Po. 93	F8区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢			( 3.7)	淡橙色	風化	風化、刺突紋？	
Po. 94	C8区	Ⅲ層	縄紋土器 深鉢	(19.7)		( 1.6)	灰褐色	ナデ	沈線紋？	磨研
Po. 95	F7区	Ⅲ層	縄紋土器 底部			(4.25)	黄褐色	風化	ナデ	
Po. 96	C8区	Ⅱ層	縄紋土器 深鉢			( 4.0)	灰褐色	条痕	沈線紋	
Po. 97	谷部南西	Ⅱ層	縄紋土器 深鉢			( 4.2)	灰褐色	風化	沈線紋	
Po. 98	C8区	Ⅱ層	縄紋土器 浅鉢	(17.9)		( 6.4)	灰褐色	風化、ナデ	条痕調整後ナデ、 沈線紋	
Po. 99	D8区	Ⅱ層	縄紋土器 深鉢			( 5.4)	灰褐色	ナデ	ナデ	
Po. 100	F8区	Ⅱ層	縄紋土器 底部		4.0	( 2.6)	赤茶色	ナデ	ナデ	
Po. 101	F8区	Ⅱ層	縄紋土器 底部		7.4	( 2.4)	茶褐色	ナデ	風化	



表5 伯楽塚遺跡出土土器・土製品・陶磁器観察表（残存・復元値は（ ）で表示）

遺物番号	地区遺構	層位	種別器種	法 量 (cm)			色 調	調 整		備 考
				口径	底径	器高		内 面	外 面	
Po. 102	C8区	Ⅱ層	縄紋土器 底部		(10.0)	( 2.7)	赤茶色	風化	ナデ	
Po. 103	C8区	Ⅱ層	突帯紋系土器 深鉢	(15.1)		( 2.0)	褐色	風化	突帯	
Po. 104	C8区	Ⅱ層	突帯紋系土器 深鉢	(23.0)		( 4.2)	褐色	風化	突帯、刺突紋	
Po. 105	D8区	Ⅱ層	突帯紋系土器 深鉢	(31.0)		( 2.8)	灰褐色	ナデ	突帯、刺突紋	
Po. 106	G7区	断面	縄紋土器 深鉢			( 3.3)	灰褐色	山形紋	突帯、刺突紋	
Po. 107	注記不明	不明	縄紋土器 深鉢			( 5.0)	黒褐色	山形紋	山形紋	
Po. 108	H8ライン	断面	縄紋土器 深鉢			( 5.5)	橙褐色	ナデ	山形紋	
Po. 109	H8ライン	断面	縄紋土器 深鉢			( 3.9)	暗橙褐色	ナデ	突帯、刺突紋	
Po. 110	G7区	断面	縄紋土器 深鉢			( 5.3)	褐色	ナデ	突帯、刺突紋、 刺突紋	
Po. 111	G7区	断面	縄紋土器 深鉢			( 6.3)	灰茶色	ナデ	ナデ	
Po. 112	H8ライン	断面	縄紋土器 深鉢			(4.95)	灰褐色	ナデ	突帯、刺突紋、 沈線紋	
Po. 113	G7区	断面	縄紋土器 深鉢			( 8.5)	黄灰褐色	風化、ナデ	沈線紋	
Po. 114	C8区	Ⅱ層	土師器 甕	(16.0)		( 3.7)	灰褐色	ナデ	ナデ	
Po. 115	E8区	Ⅱ層	土師器 壺			( 5.0)	橙褐色	ナデ	ナデ	
Po. 116	谷部東中央	Ⅱ層	土師器 高坏			( 7.3)	褐色	ケズリ	ハケ	
Po. 117	B8区	断面	須恵器 瓶	( 7.4)		( 3.9)	淡青灰色	ナデ	ナデ	
Po. 118	G8区	Ⅱ層	須恵器 坏身		( 7.7)	( 2.2)	青灰色	ナデ	ナデ	
Po. 119	D8区	Ⅱ層	須恵器 高坏			( 8.3)	淡青灰色	ナデ	ナデ	

表6 坂長伯楽塚遺跡出土石製品観察表（残存・復元値は（ ）で表示）

遺物 番号	地区遺構	層位	種 別	法 量 (cm)			重量 (g)	石 材
				最大長	最大幅	最大厚		
S. 1	陥穴21	埋土中	石鏃	1.9	1.5	0.3	0.6	黒曜石
S. 2	伯楽塚20号墳	盛土中	局部磨製石斧	( 7.8)	( 5.9)	( 1.3)	60.8	安山岩
S. 3	道路 1	埋土中	打欠石錘	6.5	4.2	2.1	91.5	花崗岩
S. 4	道路 2	埋土中	石鏃	2.1	1.7	0.2	0.4	黒曜石
S. 5	B 3 区	表土	打欠石錘	5.3	3.3	1.4	37.3	デイサイト
S. 6	C 5 区	表土	礫器	(11.7)	( 9.1)	( 2.9)	241.8	粘板岩
S. 7	E 2 区	黒色土	楔形石器	2.8	3.4	0.7	8.5	安山岩
S. 8	C 5 区	表土	石鏃	( 0.6)	1.5	0.25	0.1	黒曜石
S. 9	F 8 区	Ⅳ層	石鏃	2.3	1.2	0.3	0.5	黒曜石
S. 10	C 8 区	Ⅲ層	石鏃	(16.5)	15.0	0.3	0.5	黒曜石
S. 11	F 7 区	Ⅲ層	石鏃	( 2.7)	2.1	0.3	1.4	黒曜石
S. 12	F 7 区	Ⅲ層	剥片	3.0	( 1.3)	0.5	1.6	サヌカイト
S. 13	F 8 区	Ⅲ層	石鏃	2.9	1.8	0.7	3.3	サヌカイト
S. 14	F 8 区	Ⅲ層	石鏃	2.9	( 2.0)	0.6	2.0	黒曜石
S. 15	F 8 区	Ⅲ層	小玉	0.8	0.8	0.2	0.2	滑石
S. 16	F 7 区	Ⅲ層	凹石	10.0	9.2	4.2	461.5	デイサイト
S. 17	C 8 区	Ⅲ層	凹石	( 9.6)	8.5	2.1	199.9	デイサイト
S. 18	C 8 区	Ⅲ層	石核	15.6	12.7	6.3	1355.1	凝灰岩質頁岩
S. 19	C 8 区	Ⅲ層	磨製石斧	( 5.0)	( 4.2)	( 0.7)	15.8	凝灰岩
S. 20	F 8 区	Ⅱ層	石鏃	1.5	1.2	0.3	0.3	黒曜石
S. 21	E 8 区	Ⅱ層	石鏃	1.7	1.4	0.4	0.5	黒曜石
S. 22	G 8 区	Ⅱ層	石鏃	2.0	(1.65)	0.5	0.9	黒曜石
S. 23	G 8 区	Ⅱ層	石鏃	2.1	( 1.4)	0.3	0.5	黒曜石

表7 坂長伯楽塚遺跡出土石製品観察表（残存・復元値は（ ）で表示）

遺物 番号	地区遺構	層位	種 別	法 量 (cm)			重量 (g)	石 材
				最大長	最大幅	最大厚		
S. 24	E8区	Ⅱ層	石鏃	2.3	1.3	0.4	0.6	黒曜石
S. 25	C8区	Ⅱ層	石鏃	2.0	1.4	0.3	0.6	サヌカイト
S. 26	G8区	Ⅱ層	石鏃	2.5	1.7	0.4	1.0	サヌカイト
S. 27	E8区	Ⅱ層	石鏃	2.7	1.9	0.4	1.9	玉髄
S. 28	G8区	Ⅱ層	凹石	10.9	9.1	5.4	765.7	デイサイト
S. 29	C8区	Ⅱ層	凹石	10.4	7.4	5.1	416.7	デイサイト
S. 30	D8区	Ⅱ層	凹石	11.1	8.7	5.2	566.4	デイサイト
S. 31	D8区	Ⅱ層	砥石	( 8.4)	8.5	4.4	382.7	安山岩
S. 32	D8区	Ⅱ層	石鏃	11.2	10.2	1.8	305.6	花崗岩
S. 33	表採	不明	石鏃	( 1.5)	( 1.2)	0.3	0.9	黒曜石

# 写真図版



1. 坂長伯楽塚遺跡調査前（北西上空より）





1. 坂長伯楽塚遺跡調査後（写真上が北）





1. 建物 1 完掘 (南東より)



2. 陥穴 1 完掘 (東より)



3. 陥穴 4 完掘 (西より)

写真図版 4



1. 陥穴5完掘（北西より）



2. 陥穴6完掘（北より）



3. 陥穴8・9・10完掘（北より）





1. 陥穴14 (左)・13 (右)  
完掘 (北より)



2. 陥穴18完掘 (北より)



3. 陥穴19完掘 (南より)

写真図版 6



1. 陥穴21完掘（北より）



2. 陥穴22完掘（北より）



3. 陥穴25完掘（南より）





1. 陥穴27完掘 (南より)



2. 陥穴28完掘 (東より)



3. 陥穴30完掘 (東より)



1. 陥穴31完掘（東より）



2. 陥穴32完掘（東より）



3. 陥穴33完掘（東より）





1. 伯楽塚17号墳 (東より)



2. 伯楽塚18号墳1 主体部検出  
(西北より)



3. 伯楽塚18号墳1 主体部完掘  
(南東より)



1. 伯楽塚18号墳南周溝土器  
出土状況（南より）



2. 伯楽塚19号墳1・2主体部  
検出（西より）



3. 伯楽塚19号墳1・2主体部  
完掘（東より）





1. 伯楽塚20号墳周溝内土器  
出土状況 (北東より)



2. 伯楽塚21号墳南周溝  
検出 (南東より)



3. 伯楽塚21号墳周溝内土器  
出土状況 (北東より)



1. 石棺墓1検出（南より）



2. 石棺墓1完掘（北東より）



3. 石棺墓1枕（北より）





1. 石棺墓1 掘形埋土  
(南西より)



2. 石棺墓1 掘形完掘  
(南東より)



3. 石棺墓2 検出  
(北東より)



1. 石棺墓2断面(南西より)



2. 石棺墓2完掘(北東より)



3. 石棺墓2転落石  
(南西より)



1. 石棺墓2 掘形完掘  
(南西より)



2. 石棺墓3 検出 (南西より)



3. 石棺墓3 断面 (南西より)





1. 石棺墓3完掘(南西より)



2. 石棺墓3掘形埋土  
(東より)



3. 石棺墓3掘形埋土  
(南西より)



1. 石棺墓3掘形完掘  
(北西より)



2. 石棺墓4検出 (西より)



3. 石棺墓4断面 (北より)





1. 石棺墓4完掘（東より）



2. 石棺墓4掘形（北より）



3. 石蓋土壙墓1検出  
（南東より）



1. 石蓋土壙墓1完掘  
(南西より)



2. 石蓋土壙墓1枕(北より)



3. 石蓋土壙墓2検出  
(北より)





1. 石蓋土壇墓2完掘  
(北より)



2. 土壇墓1完掘(北西より)



3. 土壇墓2断面(北西より)





1. 土壙墓3調査中  
(北西より)



2. 土壙墓3完掘 (東より)



3. 土壙墓3完掘 (北より)



1. 土壇墓 4 完掘 (北西より)



2. 不明遺構 1 完掘 (北東より)



3. 不明遺構 2 完掘 (北より)





1. 道路1 検出 (北西より)



2. 道路1 凹凸溝検出  
(北西より)



3. 道路1 転石部断面  
(北東より)



1. 道路1凹凸溝断面  
(南西より)



2. 道路1凹凸溝断面  
(南西より)



3. 道路1凹凸溝断面  
(南西より)





1. 道路1完掘（北東より）



2. 道路1完掘（北西より）



3. 道路1完掘（南東より）



1. 道路2完掘（北西より）



2. 交通壕完掘（北西より）



3. 交通壕完掘（北西より）





1. 谷部東側Ⅲ層上面検出  
(北より)



2. 谷部南西断面(北東より)



3. 谷部中央断面(東より)



1. 陥穴34完掘（北より）



2. 陥穴35完掘（北より）



3. 陥穴36断面（東より）





1. 陥穴36完掘 (南東より)



2. 陥穴37完掘 (北より)



3. 陥穴38完掘 (西より)



1. 陥穴39完掘（南より）



2. 陥穴40完掘（東より）



3. 陥穴41完掘（北より）





1. 土坑3完掘 (南西より)



2. 火山灰サンプル採取中  
(南東より)



3. 石棺墓1 移築復元  
(北西より)



1. 昭和34年出土土師器 1



2. 昭和34年出土須恵器 2



3. 昭和34年出土須恵器 3 (1~3は、S=1/2)



4. 伯楽塚古墳群出土土器 (Po. 9の直径12.9cm)



Po.1

1. 伯楽塚18号墳 (Po. 1)



Po.2

2. 伯楽塚19号墳 (Po. 2)



Po.3

3. 伯楽塚19号墳 (Po. 3)



Po.4

4. 伯楽塚20号墳 (Po. 4)



Po.5

5. 伯楽塚20号墳 (Po. 5)



Po.6

6. 伯楽塚20号墳 (Po. 6)



Po.7

7. 伯楽塚20号墳 (Po. 7)



Po.9

8. 土壙墓3 (Po. 9)



Po.10

9. 土壙墓3 (Po. 10)



写真図版34



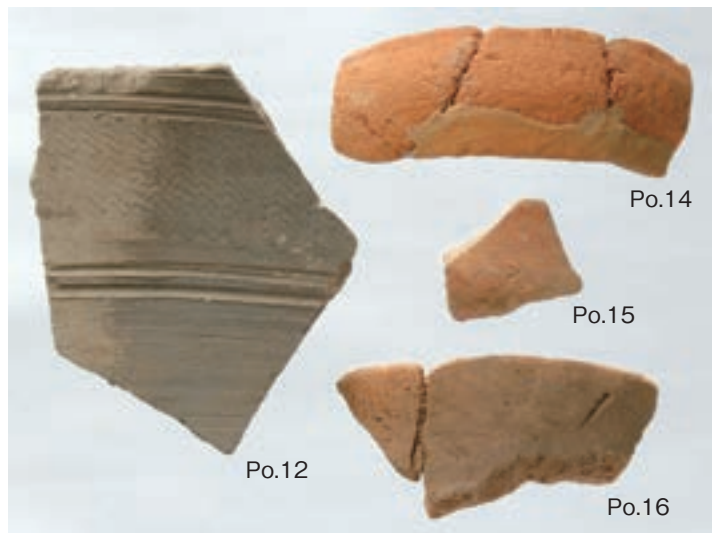
1. 伯楽塚21号墳 (Po. 8)



2. 土壙墓4 (Po. 11)



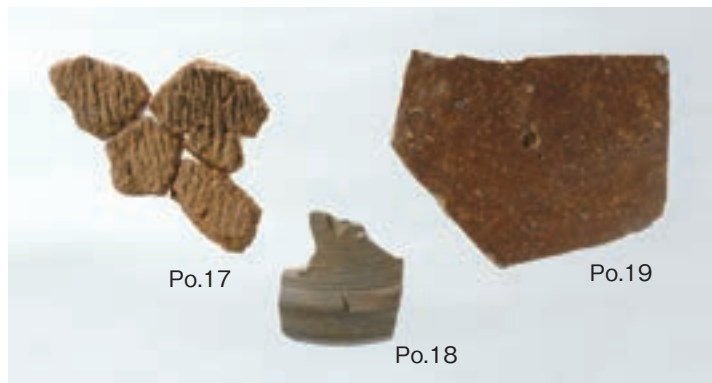
3. 道路1 (Po. 13)



5. 道路1 出土土器



4. 道路1 (Po. 13底面)



6. 丘陵部出土遺物



7. 谷部出土遺物 (縄紋土器以外)

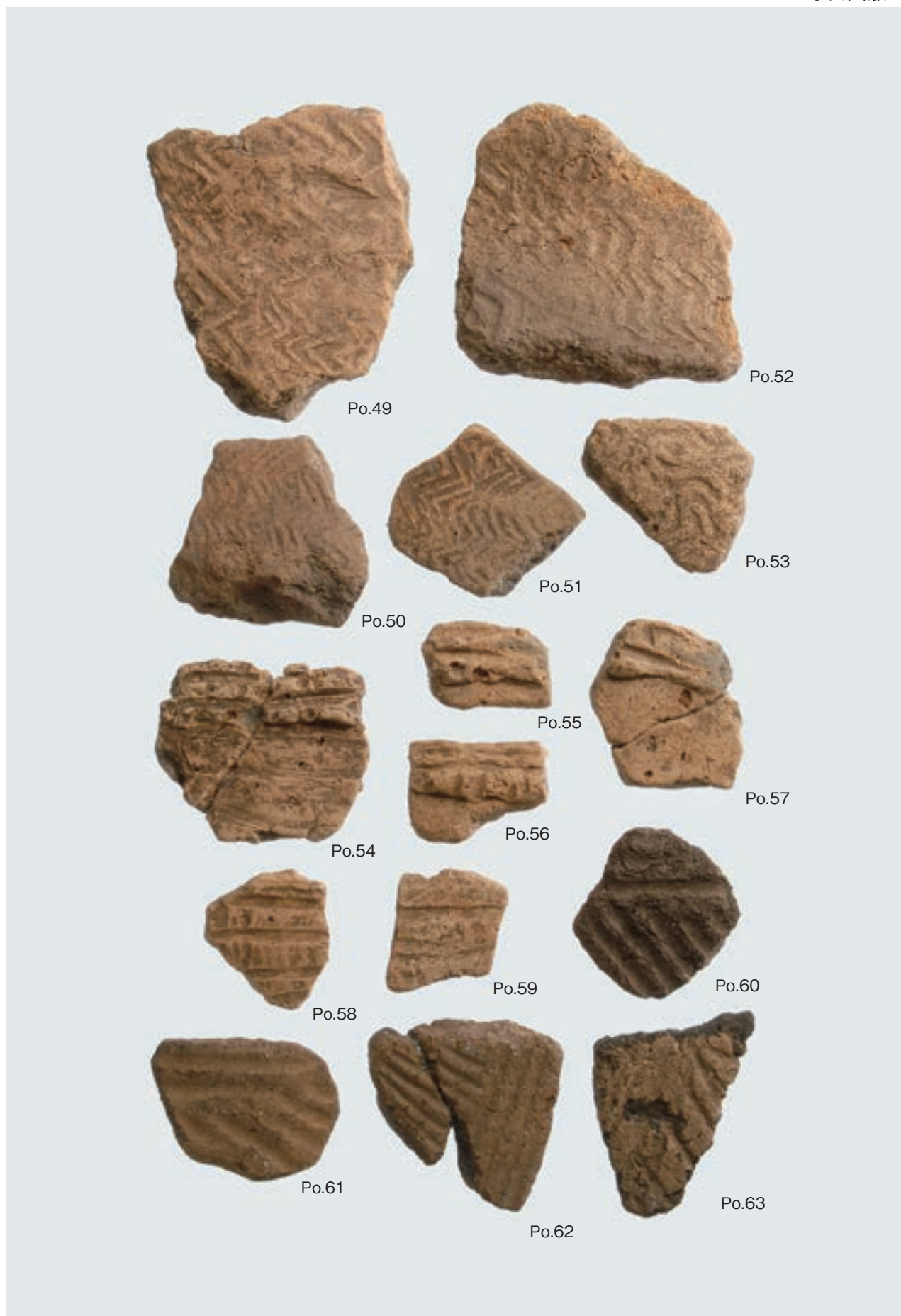


1. 谷部IV層出土土器

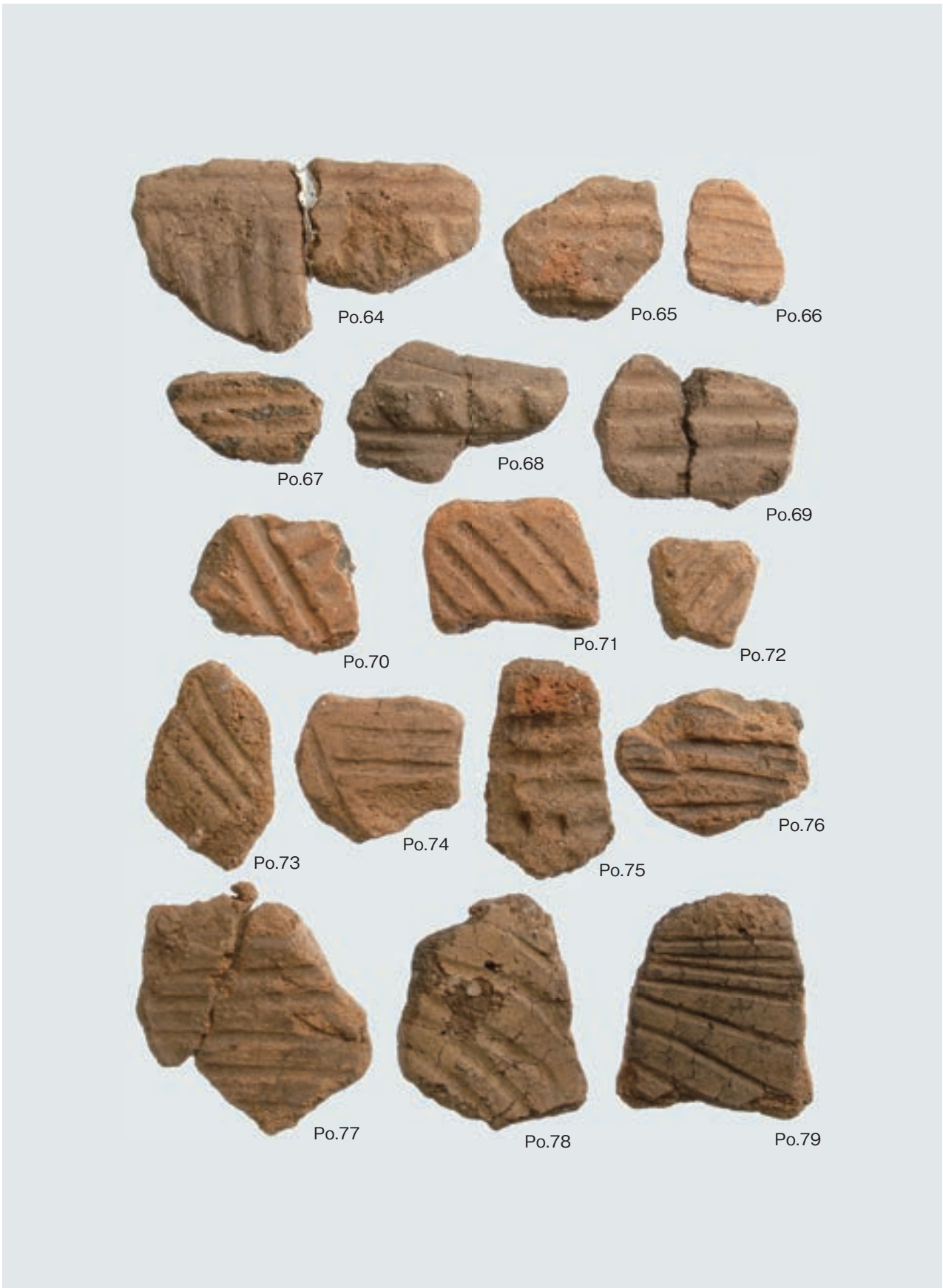


1. 谷部Ⅲ層出土土器①





1. 谷部Ⅲ層出土土器②

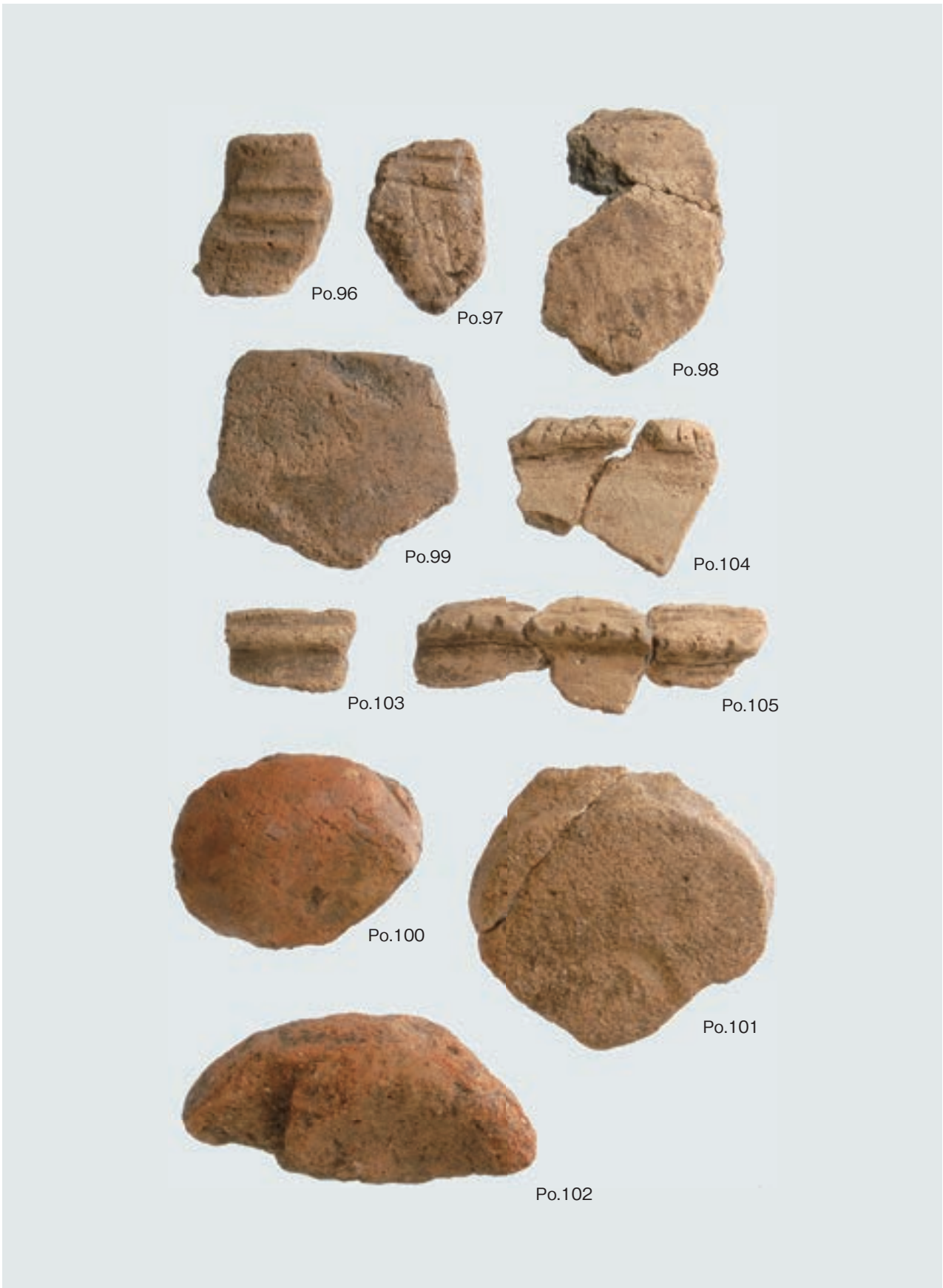


1. 谷部Ⅲ層出土土器③



1. 谷部Ⅲ層出土土器④





1. 谷部Ⅱ層出土土器



1. 谷部その他の層出土土器

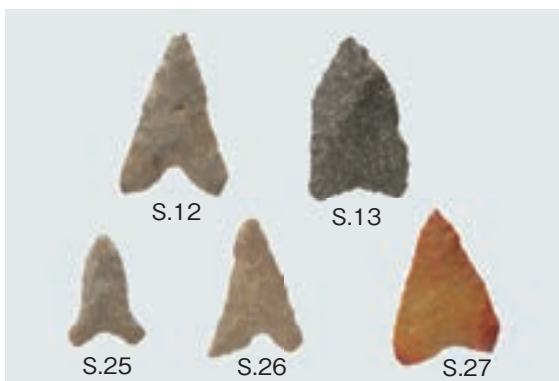


1. 黒曜石製の石鏃

(S= 2 / 3)



2. 黒曜石製の石鏃 (裏面)



3. 黒曜石製以外の石鏃

(S= 2 / 3)



5. 打欠石錘

(S= 2 / 3)



4. 黒曜石製以外の石鏃 (裏面)



6. スクレイパー

(S= 2 / 3)



7. 玉

(S= 3 / 1)





1. 磨製石器

(S= 2 / 3)



2. 礫石器・石鋤 (S. 16の長さ10cm)



1. 石核 (S.18)

(S=2/3)

報告書抄録

ふりがな	さかちょうばくろうづかいせき・ばくろうづか17～21ごうふん							
書名	坂長伯楽塚遺跡・伯楽塚17～21号墳							
副書名	一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	一般財団法人 米子市文化財団 埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	11							
編著者名	佐伯純也							
編集機関	一般財団法人 米子市文化財団 埋蔵文化財調査室							
所在地	〒683-0011 鳥取県米子市福市281番地 TEL・FAX 0859-26-0455 eメールアドレス yonagomaibun@clear.ocn.ne.jp							
発行年月日	西暦2016年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
坂長伯楽塚遺跡・伯楽塚17～21号墳	西伯郡伯耆町坂長字伯楽塚	31390	1-378	35° 22' 36"	133° 24' 16"	平成23年 3月8日～ 平成24年 12月28日	3,450㎡	道路建設 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
坂長伯楽塚遺跡・伯楽塚17～21号墳	散布地・古墳群	縄紋時代 古墳時代 奈良時代 現代	陥穴、古墳、石棺、石蓋 土壙墓、土壙墓、道路、 塹壕跡		縄紋土器、土師器、須 恵器、陶磁器、石器		縄紋時代 早期の穂 谷式土器 が出土	
要 約								
<p>坂長伯楽塚遺跡からは、縄紋時代早期後半期の押型紋土器の最終末段階、高山寺式から穂谷式・宮の平式の土器が多数出土した。遺物の多くは谷部の再堆積層から出土しており、調査地の周辺に当該期の集落が存在したことを示すと考えられる。古墳時代には、丘陵上に伯楽塚古墳群が築造されており、今回の調査で伯楽塚17号墳から21号墳までを新たに確認した。古墳群の時期は、古墳時代中期、6世紀前半代と推測される。奈良時代の遺構では、丘陵部の中央、南北方向に向かう道路状遺構を確認した。道路状遺構は、中央部に凹凸状の溝を掘り、硬くしまった土で埋め戻されており、暗渠排水の溝を兼ねた道路地業と見られる。近現代の遺構では、アジア・太平洋戦争の末期に本土決戦を想定した「チ号演習」に伴い造られた塹壕跡を確認した。</p>								

一般財団法人米子市文化財団埋蔵文化財発掘調査報告書11

鳥取県西伯郡伯耆町

坂長伯楽塚遺跡・伯楽塚17～21号墳

2016年3月

編集・発行 一般財団法人 米子市文化財団

〒683-0011 鳥取県米子市福市281番地

TEL 0859-26-0455

印刷 勝美印刷株式会社